田村敏雄伝

―自民党派閥宏池会初代事務局長・池田勇人の高度成長政策を支えた人物―

小 林 英 夫†

The Autobiography of Tamura Toshio: The first secretary general of Kochikai, a Liberal Democratic Party faction and supported Prime Minister Ikeda Hayato in promoting Japan's High Economic Growth Policy

Hideo Kobayashi

This paper focuses on Tamura Toshio who was the first secretary general of Kochikai, a Liberal Democratic Party faction, and supported Prime Minister Ikeda Hayato in promoting Japan's High Economic Growth Policy.

Japan's postwar High Economic Growth Policy got started in the 1960s. While it is well-known that Shimomura Osamu, a senior executive staff of Ministry of Industry and Trade was the initiator of this policy, nobody knows that Tamura Toshio supported Shimomura Osamu and promoted this policy in collaboration with him.

Tamura died in 1963 when Japan's High Economic Growth got under way. So that, he did not leave a great impression in history of the Japanese postwar economic policy, because there was no one who could tell about his feat. But, when we consider a role he played in PM Ikeda's policy making process, everybody should realize his strong contribution to this issue.

This paper consists of two parts: in the first half, I would like to summarize his life and in the latter half, to analyze his role in promoting Japan's High Economic Growth Policy.

序

はじめに

本稿は，池田勇人を総理に送り出し，現在なお谷垣派，古賀派を合して岸田文雄率いる岸田派として自由民主党の有力派閥のひとつを構成する宏池会の初代事務局長の田村敏雄の自伝である。この派閥は，かつては池田勇人を筆頭に大平正芳，鈴木善幸，宮澤喜一といった総理大臣を生んだ名門派閥だった。宏池会は，自民党のなかにあっては「政策集団」として知られ，知的雰囲気をもった面々で構成され，党内ではどちらかといえば「穏健派」「ハト派」としてその存在感を持っていた。本稿では，

† 早稲田大学名誉教授　Professor Emeritus, Waseda University

この派閥集団の歴史を発祥の段階までさかのぼってみてみることとしたい。宏池会は池田勇人を中心とした政治家たちによってつくられた派閥集団であるが，その組織の中心にあって池田を支えた人物の一人が本稿の主役の田村敏雄だった。現在では，彼の名を知るものは少ない。宏池会の関係者の間でも，名前は聞いたと語る若手議員はいるが，その人物像を語れるものは皆無に近い。

しかし，田村敏雄に関する著作はおろか論文すら無きに等しい状況を考えれば，そうした若手議員が出てくるのもむべなるかな，という感がしないでもない。著者が，田村敏雄の自伝を手掛ける第一の理由は彼をして，それにふさわしい歴史的位置を与えたい，という点にある。そして本稿を書き始めるにあたって，どんな人物だったのか，を予備知識として，ごく簡単に述べておく理由もそこにある。

彼は京都の福地山に近い山村に生まれ苦学して東京帝国大学を卒業した。在学中に高等試験（高文）をパスし，1925 年に大学卒業と同時に大蔵省に入省した。入省の同期には 1960 年に岸信介を継いで総理大臣となる池田勇人がいた。1932 年 3 月に関東軍の傀儡満洲国が建国されると大蔵省の筆頭若手官僚だった星野直樹らとともに渡満，租税問題の専門官としてその建国の屋台骨作りに租税制度整備の面で活動し，その後は満洲産業資源開発の拠点である通化省の次長として鉄鉱資源開発を担当，折から進行していた満洲重工業化政策の中枢に位置する「満洲産業開発五箇年計画」を支え，続いて満洲国中堅官吏を養成するために開校された大同学院で教鞭をとり多くの中堅官吏を育成するために力を注いだ。そして，1945 年 8 月には濱江省の次長として北満の地ハルビンで敗戦を迎えた。

敗戦後はソ連に抑留され，中央アジアの捕虜収容所をいくつも転々とした後 1950 年にナホトカから引揚げた。その間収容所で強制労働を強いられていた頃にソ連のエージェントとなることを強要され，承諾した。帰国後の 1952 年からソ連大使館の三等書記官だったラストボロフが田村に接触，情報活動を強要されるが 1953 年に関係を切る。1952 年から 1956 年まで大蔵省関連団体の大蔵財務協会の理事長となるが，同時に出版社の進路社を立ち上げ，1954 年 5 月から月刊誌『進路』の発刊を開始する。1957 年 10 月に吉田，石橋，岸内閣で主要閣僚を務めた池田勇人を中心に自民党派閥組織の宏池会が結成されると，その初代事務局長に就任し，同時に『進路』は，宏池会の機関誌へと変身する。そして田村は，池田とともに日本の高度成長政策の具体化に着手し，岸政権時代のプランを継いで，「所得倍増計画」というキャッチフレーズで政策化しそれを推進することとなる。そして，その推進途上の 1963 年 8 月に雄図半ばで死去することとなる。

戦後の日本の高度成長政策の実現とその推進に様々な人物がかかわったことは間違いないが，田村敏雄もそのなかでも重要人物の一人だった。彼は，満洲国で高級官僚として満洲「工業化」と戦時高度成長政策に資源開発，人材開発の面から関与し，その経験を生かし戦後日本の高度成長の推進者たちを取りまとめるオルガナイザーとして宏池会の初代事務局長に就任し，池田を支えたがゆえに，池田が進めた高度成長政策は 1960 年代スムーズに展開されることとなる。田村の生涯を見ると，改めて日本の高度成長は，実はその底流で深く満洲人脈との関わり合いが動いていたことが見えてくるのである。そこには，彼らが青壮年時代に抱いた傀儡国家満洲国への「見果てぬ夢」を戦後も追い続けた姿が浮かび上がってくる。彼らが抱いていたこの「夢」と「情熱」が，宏池会の初発の段階から渦巻いていた。

本稿では，田村敏雄の誕生から死に至るまでの時期を追いながら，彼が，いかなる過程を経て，日本の高度成長推進の陰の演出者になっていったのか，その歩みを追ってみることとしたい。

貧弱な田村敏雄研究

はじめに述べたように，田村敏雄といっても多くの読者はご存知ないかもしれない。しかし，自民党の宏池会といえばご存知の方も多いであろう。1957 年 11 月岸内閣の時，内閣改造で当時大蔵大臣だった池田勇人は閣外に出るが，その時，将来の総理を目指す勉強会として出発したのが宏池会で，その初代事務局長に就任したのが田村敏雄だった。宏池会は，その後池田勇人に始まり前尾繁三郎，大平正芳，鈴木善幸，宮沢喜一と，前尾繁三郎を除くすべての同派閥の首領を総理に送りだす名門派閥であった。その後は，紆余曲折を経て現在岸田文雄が率いる「岸田派」に流れ込んでいる。この派の出発の課題は，戦後復興後の日本経済の成長策の立案にあった。そして，田村は，大蔵省同期の池田に請われて初代事務局長に就任する前後に機関誌『進路』を発行し，仲間を募っていたが、そこの勉強会に大蔵官僚だった下村治などを巻き込んで，高度成長に関する研究会を組織した。池田内閣のキャッチフレーズの「所得倍増論」は，こうした集まりのなかから生み出されたものだという。本書の目的は，日本の高度成長の推進に大きな役割を演じた田村敏雄の生涯をたどってみようというものである。

しかし，これだけ重要な役割を演じた人物であるにも関わらず，評伝一つないというのは不思議な限りである。歴史上の人物には，その立ち振る舞い故に実力以上に評価されて様々な伝記や評伝に描かれる人物もいれば，その逆の人物も少なくない。田村の場合には，後者の事例に属するといえよう。

従って，田村を扱った単著はない。田村を次いで宏池会事務局長の任にあった木村貢が『総理の品格』（徳間書店　2006 年）の宏池会の歴史の「池田時代」を語るなかで，「土曜会」なる政策研究会の中心人物として田村敏雄にふれているが，同書の目的が宏池会の流れをたどることにあるので，当然のことながら田村そのものに光を当てているわけではない。田村を最も正確に位置付けた数少ない著作の一つは上久保敏『下村治「日本経済学」の実践者』（日本経済評論社　2008 年）であろう。上久保は，丁寧に下村の理論形成過程を追いながら，政治家・池田と理論家・下村の間をつなぐ者として田村敏雄の役割を位置づけ，「下村と池田を取り持つ田村がいなければ，所得倍増政策が実現したかどうかわからない」（123 頁）と述べている。本稿の基本的視点も上久保と同じである。ただ，上久保の著作は，下村を対象としたものであるという制約から田村に関するこれ以上の言及はない。そのほか，彼を研究した唯一といってもよい類書としては，沢木耕太郎『危機の宰相』（文芸春秋 2008 年）があり，そのなかに池田勇人，下村治とともに田村敏雄が登場するが，田村の満洲時代の体験と経験の戦後への継承を重視する本稿の視点とは若干異なるし，彼が満洲時代の経験ゆえに，池田が総理の時代にその高度成長の演出者として活動することが可能となったという本稿の視点とも結び合わない。池田勇人の秘書だった伊藤昌哉の『池田勇人　その生と死』（至誠堂　1966 年），『実録自民党戦国史』（朝日ソノラマ　1982 年）でも田村に関して論じた箇所はほとんどない。『実録　自民党戦国史』は，池田の死後の話が中心だから出てこないのはやむを得ないとしても，『池田勇人その生と死』では「所得倍増計画の発想」という一項が設けられているが，そこでは池田の高度成長政策は，「財政家としての池田の勘と下村の理論とが，がっちりとかみあった」（60 頁）結果だとしか述べていない。実は，池田の勘と下村の理論を「がっちりと」つなげた男が田村なのである。

また，論文としては，犬田章「『所得倍増計画』陰の推進者　田村敏雄先生のことども」（『海外事情』22 巻 9 号　1974 年 9 月）がある。田村が池田総理の所得倍増計画にどうかかわったかを中心に論じ

ている。短い論文であり，しかも思い出の記でもあるので，犬田が田村と接した時期と課題に限定して論じているため，当然のことながら生い立ちから大蔵省入省以前の事柄や満洲での生活，シベリア抑留や宏池会結成までの経緯などはここでは論じられてはいない。シベリア抑留と帰国後のソ連エージェントとしての活動に関しては富田武『シベリア抑留者たちの戦後　冷戦下の世論と運動　1945–56年』（人文書院　2013年）が彼の活動概況を記述している。

田村の場合，評伝がないだけではない。その履歴や略歴が不正確だったり，ある場合には明らかな誤記が少なくない。大蔵省の主要官僚の履歴をまとめた大蔵省百年史編纂室編『大蔵省人名録　明治・大正・昭和』（大蔵財務協会　1973年）には，大蔵省の歴代大臣，次官，局長クラスの略歴が紹介されているが，そこの田村敏雄の表記を紹介すると以下のようになっている。

田村敏雄［京都］　明治二九・五・一三～昭和三八・八・五
大一一．一一高等試験行政科合格　〈中略〉一四・三東京帝国大学経済学部経済学科卒一四・四大蔵属・理財局　一四・一二専売局書記兼大蔵属・専売局長官官房　一五・四大蔵属・預金部兼理財局　昭二・七司税官・山形税務署長　四・八仙台税務署長　七・七辞職　七・八満洲国財務部事務官・税務司国税科長　〈中略〉一九・四浜江省次長　二〇・八帰国　二五・三大蔵財務協会二七・七同理事長　二九・二辞職（同書，102頁）

田村が長年勤めた大蔵省の『人名録　明治・大正・昭和』というこの本でさえ誤記がある。田村は，1945年8月帰国とあるが，これは間違いで，彼はシベリアに抑留され，1950年1月に高砂丸で帰国している。また，1950年3月大蔵財務協会に職を得たように記述しているが，当然これも1952年7月の誤りということになる。この『大蔵省人名録　明治・大正・昭和』の本では，1954年2月辞職で，田村の記述は終わっている。たしかに，大蔵省と関連がなくなった後のことが記述されていないのは，大蔵省の人名録というこの本の性格上，ある意味で当然だが，彼はその後1957年11月に池田勇人を囲む勉強会である宏池会の初代事務局長に就任する。そして機関誌『進路』を池田の政策発表誌とし，池田内閣の「所得倍増論」に象徴される高度成長を演出し，1963年8月に死去しているのである。したがって，日本の高度成長の歴史を考えるとき，欠かすことができない人物の一人なのである。

第1節　田村敏雄の少年時代

夜久野への旅

田村敏雄は，京都府福知山市に近い夜久野に生まれた。現在，東京から，彼の故郷，京都と兵庫の県境の京都府福知山市夜久野を訪ねるには，まず新幹線で東京を発って京都まで，そこから山陰線の急行で福知山まで行く。さらに福知山で在来線に乗り換えて上野久野まで，最短でも約6時間はかかる。東京から京都まで新幹線で約2時間，京都から兵庫県との県境とはいえ同じ京都府内の上夜久野まで約4時間ほどだ。新幹線と比べ在来線がいかに冷遇された不便な乗物であるかが，いやというほど体験できる旅である。外の景色は，福知山を出るとぐっと田園風景が広がり，列車は山間のなかをぬうようにして進む。無人駅が連なるなかで，運転手兼車掌のワンマンカーは出口が運転手のいる前

だけで，そこに切符を置いていくシステムになっている。こんな山里離れた田舎に行くときも，私は何組かの台湾からの旅行客と席を同じくした。京都観光から足を延ばして京都郊外の地を旅しているのだという。台湾にいても様々な旅行情報がインターネットでキャッチできる今日では，いとも簡単にこうした僻地の旅情報も入手できるのだろう。そして，彼等は，だれにガイドされることもなく，彼らだけで自由に異国の地の観光を楽しんでいるのだ。

私が 2014 年 11 月にここを最初に訪れた時は，着いたのが夜の 10 時，冬の日はとっぷりと暮れていた。山陰線の他の駅同様にここも無人駅で，駅前には店らしい店はない。こんなさびれた山陰線の上野久野駅から車でとりあえず宿へと向かう。

夜久野へ着いた翌朝，さっそく車を駆って京都府福知山市直見才谷へ向かう。山陰線の上夜久野駅から車で直見川沿いの国道 63 号線を北に向かうこと約 20 分，才谷の集落につく。山間の集落は典型的な山村で，他の日本の農村部の村落同様に絵にかいたような過疎地帯でもある。この道をさらに進んで丹後山地を抜ければ酒呑童子伝説で名高い大江山を右に見て日本海の港町宮津，舞鶴に達する。昼間畑仕事をしているのは老人ばかりで若者は一人も見えない。傾斜地の畑の周りにネット状の網がかけられているのは，イノシシやシカから畑を守るためだとバスの運転手から聞かされた。私がこんな奥深い山間の村を訪ねたのは，そこに本書の主人公である田村敏雄の甥にあたる田村秋夫さん（2014 年時点で 68 歳）が住んでいるからである。

夜久野の風景

田村家

「江戸時代から明治の初めにかけては，田村家はこの辺一帯の土地や山林を持っていた大百姓でした」，とは田村秋夫さんの弁である。当時の田村家の当主の田村清左衛門は，文政 10（1827）年の生まれで，農業に精を出し，なかなかのやり手で頭もよく，田地や山林を次々と買い増していったという。当時は，炭焼きや木材販売，養蚕や山菜採りといった産業も盛んで，山林地主もけっこうな実入りになったといわれているから，田村家もそうした事業に手を出して蓄財を重ねたものと想像される。

いまでも田村秋夫さんの家の裏山には正妻とお妾さんの二基の墓を伴う清左衛門の墓石が残されて

写真　田村敏雄氏の屋敷跡と清佐右衛門の墓

写真　田村秋夫氏宅の庭の前に広がる才谷の田園風景

いる。清左衛門は豊かな財力に裏付けられたそれなりの艶福家だったのだろう。苔むした墓石は己の地所を監視するかのように眼下に広がる平野を見下ろしている。

清左衛門の墓のすぐ下に，これまたその下に広がる田畑を監視するかのように広場が広がっているが，今はさら地になっている。そこは屋敷跡で，長男の田村勇蔵と息子で本稿の主人公の田村敏雄が住んでいた。母屋を中心に蔵が二つ備わる広さで，相当な屋敷だったことを彷彿とさせる趣がある。田村勇蔵は慶應 2(1866)年に清左衛門の長男としてこの地で生まれている。彼は，1938 年に亡くなるが，この間さしたる仕事もせず，酒をこよなく愛し，書物を読む読書家で，祖先伝来の田地田畑を切り売りしながら生活していたという。明治から大正，昭和の激動の時代を生き抜くには，彼には親が勇気をもつ男に育てという願いを込めて名付けた勇蔵という名にふさわしいパワーは，残念ながら持ち合わせていなかったのであろう。そんななかで，家が傾きかけ始めた明治 29(1896)年に田村敏雄は誕生している。母サトは，山を越えた兵庫県豊岡市但東町東里の農家大橋藤五郎の長女で，夫とは正反対で，意思強じんで粘り強い性格を持っていたという。大橋の家も田村家同様に最盛期には村の土地の三分の一を所有する地主で，農業の傍ら養蚕や炭焼きを副業にしていたという（大橋正規氏談　兵庫県西宮市在住)。田村敏雄は，父親の勉強好きと母親の頑張りの精神を受け継いでこの世に出てきたようだ。

ところで，田村敏雄が生まれた 1896 年といえば日清戦争の下関講和条約締結の翌年であり，日本全体が大きく東アジアに飛躍する時期に該当する。当時の夜久野は，山間の農業地帯で，農林業で生計を立てている農家が大半だった。1873 年夜久野に近い福知山に生まれ，政治家・実業家として名を成し，1918 年に時の中国の段祺瑞内閣への西原借款で有名となった人物に西原亀三がいる。彼は，幼少の折の福知山周辺の状況を自叙伝『夢の七十余年』のなかで次のように回想しているが，西原亀三から 20 余年遅れて同地に生まれた田村敏雄の村の風景もそれと似たものだったのだろう。西原は，「山国の代名詞のようになっている丹波の奥のつまり，山高くして谷深く，丹波と但馬とに抱き込まれて，ちょうどすりばちの底のようになったところに，戸数百六十戸の小さいわが雲原村（福知山市）がある」としたうえで，「村の人たちはこれらの田畑をていねいに耕作して米麦を作り，山根・谷くぼ・川のほとり，いやしくも利用し得る土地は寸土をあまさず丹念に開墾して段々畑とし，空地

には柿を植え桑・楮を作り，山の上には焼畑をつくって蕎麦や小豆を収穫する」と記し，「昔は宮津藩に属し，千俵の年貢米が与謝峠を越さねば正月が出来なかったといわれたもので，その残り米に雑穀を合わせて，昔も今も住民の食糧は大体自給自足されて多少は余る。明治中葉の頃までは製糸が盛んで，これを営むものが五十戸を超えていた。水質が良いため糸がわくに固着せず，いろつやも美しく解けもよいので，丹後ちりめんの本場加悦地方で一割高で買われ，雲原糸の声価は高かった。林産物は持出しの便利が悪いために，炭にして出すほかは多少の板が牛の背で運びだされていたくらいなもので，薪として売ったのでは引き合わなかった。そのほか渋柿を多く作り，これを串柿にして売るのがなかなかばかにならぬ収入をあげた。山には栗が多く，山芋でねった蕎麦のうまいこともここの自慢である」（北村敬直『夢の七〇余年』3–4 頁）と郷土福知山周辺を紹介していた。

田村の家もそうした農家の一つだったのだろう。しかしこの地域にも明治の近代化の波が押し寄せる。直見村に郵便局が開設されたのが明治 15（1882）年，上夜久野に巡査駐在所ができたのが明治 22（1889）年，額田に電信局ができたのが明治 37（1904）年のことである。東京からの軍の指令がこの新設された電報局に届き，ここから夜久野の集落に日露戦争の召集令状である通称「赤紙」が送付された。この山深い集落にも次第に明治の近代化の波が押し寄せてきていたことがわかる。山陰線が開通し，上夜久野，下夜久野の駅が設置されたのが明治 44（1911）年のことであった（『夜久野町史』第四巻 736 頁以下）。

小学校入学

1902 年に田村は尋常小学校に入学する。日英同盟が締結された年であり，日露関係は風雲急を告げていた。1904 年に日露戦争が勃発するが，その時田村は 8 歳である。多感な少年期が日露戦後に該当するわけで，いやがうえにも彼が強いナショナリズムの波に洗われたとしても不思議ではない。

1884 年に大阪で編成され，1898 年に福知山に移駐することになる歩兵第二十連隊は，1894 年に勃発した日清戦争に出征するが，このときは，大連湾に集結中に終戦を迎えその後は占領地の守備を担当した。いわば，戦後処理部隊で激戦は経験しておらず，従って犠牲者は少なかった。ところが，その 10 年後の 1904 年 2 月に勃発した日露戦争時には 5 月福知山の第二十連隊にも動員令が発せられ，住民の歓呼の声に送られて神戸まで行軍，遼東半島へと向かっている。第二十連隊は，日露戦争では激戦地を転戦，8 月の遼陽会戦には第十師団の一翼を形成して参戦している。田村の同郷夜久野出身だった衣川菊蔵一等卒は，この戦闘に参加しているが，会戦前夜戦場にあって繭のできや繭の値段に気をもんでいたが，「繭の収量も上々，値もよろしい」という故郷からの便りを懐中に激戦のなかで「それを聞いて安心した」という故郷への返事を最後に戦死している。この戦闘では，連隊長の桂真澄中佐が戦死，多くの将兵が戦傷死する損害を経験した（福知山市史編さん委員会『福知山市史』第四巻　1996 年　395–396 頁）。続く奉天の会戦でも天王山と称された万宝山の正面攻撃を担当した第二十連隊は，多くの損害を出しながらもロシア軍の全面退却の生み出す原動力をなした。日露戦争を通じて歩兵第二十連隊が払った犠牲は「戦死者七九六名，戦傷者一五八九名，計二三八五名」を数えた（同上書，411 頁）。

こんななかで，田村敏雄も小学生として出征兵士を見送ったに相違ない。そして明治 38（1905）年 3 月には上夜久野村の上夜久野尋常小学校（後の精華尋常小学校）では「日露開戦記念林造成」が行

われた（『夜久野町史』第四巻　803頁），とあるから，田村もそれに参加したのであろう。

田村は，1902年に6歳で上夜久野尋常高等小学校に入学，第一分校へ通い始めた。田村は，ここで尋常小学校の4年間と高等科の2年間（在籍中に4年に延長される），合計8年間，1910年に14歳になるまでを過ごしている。田村が入学した1902年にそれまでの上夜久野尋常小学校に高等科が設置され，校名も上夜久野尋常高等小学校と改称されたのである。田村は，新たに生まれた上夜久野尋常高等小学校の第一期生ということになる。田村が在籍していた1902年から10年までの間での最大の出来事は日露戦争の勃発であり，日本の勝利であった。学校の企画で「日露開戦記念林造成」が行われたことは前述したが，戦争の勝利とその後の朝鮮半島への日本勢力拡大の動きは，日本海に面した舞鶴，敦賀といった朝鮮に近い港町からさほど遠くないこの福知山の地にも伝えられたに相違ない。特に1904年9月には松山，丸亀，姫路に次いで福知山の第二十連隊地敷地内にもロシア兵俘虜収容所が設けられていたから，日露戦争の雰囲気は，戦後に至るまで，他地域以上に濃厚なものがあったに相違ない（福知山市史編さん委員会『福知山市史』第4巻　1996年　412–418頁）。

田村が尋常高等小学校に在籍していた1908年に学校制度が変更となり，義務教育期間が4年から6年に延長されている。したがって，この年から高等小学校が2年追加されるので1910年に上夜久野高等尋常小学校を卒業したことになる。その後田村は中学に行くことなく1915年に京都府師範学校第二部に入学するまでの5年間は代用教員や百姓仕事をしながら，独学で専門学校入学者資格検定試験（略称「専検」）に挑戦する。この試験は，「ラクダが針の穴を通るより難しい」と称されていたように，難関ではあったが，田村は5年かけ，代用教員の合間に時間を見つけて受験勉強に励み，1915年，19歳で見事この難関を突破したのである。

田村敏雄は，尋常高等小学校時代は，成績が非常に優秀だったという。家に残されていた田村敏雄の小学生の頃の作文を読んだ甥の田村秋夫は，「きれいな字で，とてもしっかりした内容でした」とその印象を語っている。後日田村は，月刊誌『進路』を出版していたが，発刊当初は毎号のように随筆を書いて達筆の片鱗を我々に見せてくれるが，おそらく幼少期の訓練がそうした才能を花開かせたのではないか。

山路吉兵衛との出会い

前述したように，田村は，尋常高等小学校卒業後に中学への進学を希望したであろうが，家運が傾きかけていた田村家にとって，それは財力的に望み得べくもない道だった。したがって，彼は，尋常高等小学校卒業後5年間は実家で農作業をしたり代用教員などをする傍ら勉学に励む生活を余儀なくされた。

この空白の間を支えてくれたのが，当時，精華尋常高等小学校時代の訓導だった山路吉兵衛だった。山路峯男氏の資料に依れば，山路吉兵衛は三重県多気郡に明治19年（1886年）に生まれている。1901年地元の尋常高等小学校を卒業後，1904年京都府師範学校に入学，そこを明治41年（1908）卒業，教員免許を取得して，京都府天田郡上夜久野村の田村が在籍していた精華尋常高等小学校に赴任している。山路吉兵衛は，この学校で大正3年（1914）まで務めた後，京都府内の別の尋常小学校に転勤となるが，それまでの6年間を精華尋常高等小学校で教育にあたっていた。田村が1902年から1910年まで過ごしたわけだから，そこで二人は師弟関係だったということになる。そして1915

年に田村は専検をパスして山路吉兵衛が卒業したと同じ京都府師範学校に入学するが，その進路を決めるにあたって山路吉兵衛の影響が大きかったに相違ない。山路吉兵衛の長男富士夫が記述した「弟阿蘇男を偲ぶ」のなかで，「…昭和十一(一九三六)年三月卒業したが（自分は）おもわしい就職先もなく，意を決して渡満した。親父が京都師範学校を卒業して赴任した先で，京都府下天田郡上夜久野村字直見出身の田村敏雄さんと師弟関係にあり，当時満洲国新京で活躍された同氏を頼っての就職であった」（山路峯男氏　東京都世田谷区在住　2014 年 11 月 5 日の著者宛書簡より）とあるから，山路と田村の関係は，生涯にわたって長く継続したものであったと思われる。

少年期

少年期の田村敏雄はどんな少年だったのか。家は貧しかったが，成績優秀な生徒だったことは間違いあるまい。それは甥の秋夫の証言でも裏付けられる。後に田村は，東京帝国大学を卒業後に大蔵省官吏を経て満洲国高級官吏として活躍するまで尋常高等小学校時代の恩師山路吉兵衛と田村敏雄の交際関係が継続したことをみれば，山路は田村の才能を十分に認めたうえで，その将来に期待をかけたであろうし，田村は田村で貧困さゆえに勉学の機会が途絶えがちな自分の少年時代に何かと面倒を見てくれた山路に感謝の気持ちを持ち続けたであろうことは疑いない。

とりわけ，山路が田村に与えた影響は，教育問題の重要性とそれへの興味であったと思われる。田村は，その後教師を目指して京都府師範学校，さらには高等師範学校へと進むが，その進路を決定するにあたって山路が与えた影響は大きかったと思われる。無論，貧しかった田村家にとって学費が極端に安い師範学校への進学は，高等教育を受ける数少ないチャンスであったことは間違いないが，同じ官費で教育が受けられるとしても，幼年学校から士官学校へという軍人の道ではなく，師範学校から教員の道を選んだ大きな理由としては山路の影響があったものと思われる。さらに田村は，後に満洲国官吏として活動するなかでも満洲国の官吏養成機関の大同学院で教授を務め，教育関係の著作を出版するように，後々まで教育問題には強い関心を寄せていた。それだけではなく，戦後も『進路』なる月刊誌を発刊するが，この誌面も教育的色彩が強く，かつこの雑誌の目的も，総理となる池田勇人を教育する機関誌といった色彩が強かった。こうした田村の活動の原点は，そうした少年時代の山路の影響が根底にあったように思われる。

第 2 節　師範学校，東京高等師範から東京帝大へ

京都府師範学校へ

専検に合格した田村敏雄が京都府師範学校第二部に入学したのは，1915 年のことだった。ちょうど大戦景気が徐々に日本にも影響を与え始める時期である。彼は，第二部であったため 1 年で京都府師範学校を卒業している。『京都教育大学百二十年史』によれば，京都府師範学校が設立されたのは 1876 年で 1878 年に第 1 回卒業生を出している教育界の名門で，現在の京都教育大学の前身である。この京都府師範学校に新制度として二部が併設されたのは，明治 41 年（1908 年）のことであった。明治 40 年（1907）に小学校令が改正され，翌明治 41 年より小学校の義務教育年限が 4 年から 6 年に変更されるに伴い，教員が不足する事態が生じ，優秀な教師を早急に育成する必要性が生まれ明治 40 年改正されて第二部が新設されたのである。第二部というのは，中学校もしくは高等女学校卒業

者を入学させて，1年の教授訓練を受講させて正教員を養成するもので，入学資格は，中学校卒業か17歳以上でそれと同等の学力を有するものとなっていた。授業費は年額22円とし，全寮制で，卒業後は2年の奉職義務があった。田村は，この京都府師範学校へ1915年に入学したのである。二部が発足したのは明治41年であるが，開始5年後の大正元年にその総括と評価がなされているが，「第一部生と同じ寄宿舎に収容し後半年には第四学年生同様に役員を命じ居れり　第一部生との折合いは至極円満にして二部設置以来折合上につきて問題を惹起せしことなし」とし，音楽，図工以外では第一部と遜色なく，礼儀作法などは一部生より優るとしていた（『京都教育大学百二十年史』第三章第二節）。速成コースではあるが，卒業生は一部生とそん色なし，と評価され問題なしというお墨付きを得たのである。

東京高等師範学校へ

1916年に田村は東京高等師範学校へ入学，1920年までそこで過ごしている。中等学校の教員養成機関として設立された高等師範は明治35(1902)年から東京高等師範学校と称され1929年に東京文理科大学と名称を変更するが，長く中等学校教員育成機関として重きをなした。

田村は文科乙組（修身・教育・法制）に入学，京都を離れ東京に出てくると，現在の文京区大塚のキャンバスで4年間を過ごすこととなる。世は第一次世界大戦の好況期である。物価高に苦しみながらも，田村は大塚の桐花寮で4年間を過ごした。

ここでも田村に関する情報は，さほど多くはない。しかし，第一次世界大戦が終了した後社会問題が噴出してきたこの時期に，田村の視点は教師志望から次第に社会問題へと視野が広がっていったと考えられる。第一次世界大戦後の日本は，社会運動の幕開けの時期だった。1919年4月には月刊誌『改造』が創刊され，労働争議特集を組むとたちまち売り切れて，その後の『改造』の名を不動なものにしていく。そして，1920年1月には東京大学経済学部助教授の森戸辰男が『経済学研究』に「クロポトキンの社会思想の研究」を発表し，クロポトキンの思想を紹介したことで休職となる「森戸辰男筆禍事件」が発生している。森戸が取り上げたピョール・クロポトキンとはロシアのアナーキズムの思想家である。この時期，また，同月社会主義者の堺利彦が雑誌『新社会』を『社会主義』と改題して日本社会主義同盟の機関誌としている。2月には八幡製鉄所で1万数千人のストライキが起きている。3月には平塚らいてう，市川房枝らが新婦人協会を結成，『女性同盟』を発刊している。くわえて5月には日本初のメーデーが東京の上野公園で開かれている。社会問題が，多くの人々の関心を集め，「時の話題」となったのである。東京に出てきて数年の間に田村は，強烈な「時代の洗礼」を浴びて，教師志望を持ちつつも，次第に社会問題へとひかれていった。高等師範時代の田村の姿を知る手掛かりは，1920年に起きた高等師範の大学昇格問題の時であろう。1919年11月に早稲田，慶応などの私学の大学昇格が発表されたが，その時高等商業（後の一橋大学），高等工業（東京工業大学），高等師範（東京教育大学）の名前はなかった。これをきっかけに高等師範の大学昇格運動が盛り上がる。田村が3年生の時の出来事である。田村と同学年の市村清次は茗渓会『教育』（第443号1920年3月20日）に「陞格運動経過の報告」を寄せている。「師範入学志望者の激減，教育者の転職[ママ]劇増，悲しむべき教育界の現状に吾人の眼の盲ひた筈はない。加ふるに思想界の混沌物質勢力の圧迫，労働問題，普選問題と世界大戦がもたらした怒涛は大塚の学窓にも押寄せて我等をして徒に，

痛ましき眼をあげてのみ観望するを許さなくなった」（32 頁）という切り出しに続けて「我等は如何になすべきか」と問い，「我等の学校を大学たらしめよ，教育者たらんとするものに修養の最高機関を与えよ」と叫び，1919 年 12 月からの学生大会の模様を克明に記述している。加納治五郎校長を巻き込んだ運動はマスコミの注視するところとなり，新聞雑誌紙上で賛否両論渦巻く中で教育界の重鎮澤柳政太郎の反対論まで飛び出すことになる等々。この運動は，今後も検討を続ける点の確認でひとまず終結するが，澤柳の見解に対して「学生大会の席上で本科三年田村敏雄の如き博士の説に冷静なる批判を加へて完膚なからしめた」（36 頁）とある。田村の冷静沈着，論理整然とした発言を連想させる一節である。教育者たるもの，高い教養を得るべしとするこの運動の神髄を田村は，大学進学，それも東京帝国大学進学という形で実現しようとしたのではないか。同じ時期に高等師範に在籍した大和資雄は，1921 年に卒業すると「（大学）昇格は実現されそうになったが，待ちかねて私は東大の英文科を受験し，入学したら同じクラスに茗渓出が故高田力君，百瀬甫君，小川欽君と私と四人だった」（「『桐の葉』の歌」『茗渓』854 号　1962 年 7 月　1 頁）と述べている。これから推察すると，田村もまた高等師範の昇格を待てずに東京帝国大学への進学を選択したのではないか。もっとも田村の場合は，1920 年に高等師範を卒業するといったんは熊本県第二師範学校へ就職している（東京高等師範学校「校報」第 388 号　1920 年 4 月 10 日　5 頁）。しかしそれも僅か 1 年間だけで，早くも翌 1921 年には，東京帝国大学へと進学するのである。

東京帝国大学入学

田村が東京帝国大学文学部社会学科に入学したのは 1921 年で，ここで 3 年間を過ごして 1924 年に卒業した。当時の社会学科がどんなところであったかを田村自身は記録として残してはいない。しかし，当時田村と同時に東京帝国大学に入学した斎藤晌は，田村の葬儀の際の弔辞の中で「毎日机を並べて講義を聴いた」（『進路』第 10 巻第 7 号　1963 年 9 月　13 頁）と述べていたから，比較的真面目な学生生活を送ったものと思われる。また，池田勇人の後を継いで宏池会の会長となった前尾繁三郎は，その弔辞の中で，田村は「西原借款で有名な郷里の先輩，西原亀三の家で家庭教師をしておられた」（同上誌，22 頁），そして「家庭教師をして大学を出られた」（同上誌，23 頁）とあるから，同じ京都府の福知山出身の西原亀三家の支援を受けていた。1920 年代といえば，西原は，40 歳代後半の働き盛りで，段祺瑞政権との間で西原借款と称された借款を結び中国政治に大きな発言権をもって田中義一担ぎ出し運動を展開する（山本四郎編『西原亀三日記』1983 年　解題）など日本政治で活動していた頃で，東京に屋敷を構え郷土の英雄として著名な存在だった。田村は，同郷人として書生として彼のもとに身を寄せていたわけである。

またこの間 1923 年 9 月には関東大震災が東京を襲うが，東京で生活をしていた田村も震災そのものの衝撃とともに，震災の混乱の中で起きた一連の事件の影響を受けた。この震災と関連してアナーキストの大杉栄，伊藤野枝，さらには伊藤の甥の橘宗一少年が憲兵隊に扼殺され，古井戸に投げ込まれる憲兵隊の「甘粕事件」が発生し，混乱の中で共産主義者や朝鮮人の虐殺事件も発生している。田村は，この間の記録をほとんど残していない。しかし，この社会的混乱にどう対処すればいいのか，を苦悩していたのではないか。田村より若干遅れるが，1928 年から 1931 年まで同じ東京帝国大学社会学部に所属した社会学者の清水幾太郎が，その在籍談を語っているので，それを参考に当時の状況

を見てみることとしよう。清水は，この在籍3年間「霧に包まれて」すごしたと回想している（大河内一男・清水幾太郎『わが学生の頃』三芽書房　1957年）。しかし彼の読書遍歴をみると，東京帝国大学文学部社会学科に入ったころ，彼は，社会学科の学生だったころを回想して，1年生のころに「社会学の祖」と称されるオーギュスト・コントに接し，これに熱中し，卒業論文も「オーギュスト・コントにおける三段階の法則」なるタイトルで400字で200枚程度のものを書いたとしている（清水幾太郎『私の読書と人生』要書房　1951年）。社会発展の法則性を把握したいという清水の青年らしい短兵急な探求心を先輩の田村も併せ持っていたに相違ない。田村も社会学科に入学はしたものの清水以上に「霧に包まれて」先が判然としない生活を送ったことは，その学生生活から垣間見ることが出来る。まずは，東京帝国大学社会学研究室で田村は目立った活動はしていない。社会学研究室がほぼ毎月教授や著名人を招いて開いていた潜龍会という社会学の研究会に田村はほとんど出席していないのである。この潜龍会は，1925年に日本社会学会に発展的解消をとげるが，日本での社会学研究の中核的組織だった。

そこに田村の名前がでてくるのは1921年12月開催の第160回例会からである。このときは建部遯吾教授の「潜龍会会員諸君に告ぐ」，本田喜代治の「犯罪の社会学的意義について」なる講義のあと討論が行われた。建部遯吾は東京帝国大学教授で社会学の草分けで，翌1922年には退官している，いわば社会学の大御所である。本田は1924年に『犯罪と刑罰』をテーマの卒業論文を仕上げてアカデミズムの仲間入りをし，戦後は名古屋大学文学部教授をつとめている。いわば，新進気鋭の社会学者として社会学研究室で，卒論発表を兼ねた研究報告を行ったのであろう。その研究発表会の参加者の中に田村の名前が記載されている。1922年では1月開催の第161回例会にも顔を出している。このときは新年会を兼ねて樋口艶之助（陸軍）教授の「裏面より観たる西伯利亜」なる講演のあと討論が行われたが，田村の参加はこの2回だけで，後には田村の名前は出席者名簿にはない（『社会学研究室の100年』429–430頁）。田村は，1920年代の時代の息吹を大きく呑み込み，それを咀嚼しつつも，己が身の振り方を悩んでいたのではないか。それは田村が選択した卒業論文のテーマにも表れている。田村の卒論は「大土地所有と社会問題」だった。清水幾太郎の卒業論文「オーギュスト・コントにおける三段階の法則」とは著しく異なる。清水は，学部時代は「霧に包まれて」すごした，とはいっていても，清水の卒論の選び方はあくまで社会学の学術的枠のなかでの課題設定であるのに対して，田村のそれはその枠を超えている。田村の方が霧ははるかに深いことを連想させる。田村の卒論は残されていない（2015年9月25日に東大社会学研究室にメールにて確認）ので内容は推察するしかないが，当時の社会状況から判断すれば，頻発する小作争議に焦点を当てた農村問題研究だったに相違ない。事実，日本での小作争議をみれば，1920年に408件だった争議数は，翌1921年には1,680件へと一気に4.1倍へと増加し，1923年には1,917件，1925年には2,206件へと増加する。しかも年と共に争議の中心は，不在村地主に対する村あげての小作争議から在村地主に対する小作争議へと移りはじめ，件数の増加と共に争議は小粒化し，激烈化した（1920年代史研究会編『1920年代の日本資本主義』東京大学出版会　1983年　282–284頁）。まさに「土地所有問題」が「社会問題化」していたのである。田村は，この社会事象をとらえて卒論の課題とした。彼の卒業論文が現存していない以上，その中身に関して穿鑿することはできないが，この「大土地所有と社会問題」を社会学的手法で解明したとは思えない。田村の東京帝大時代の学友だった斎藤晌が，田村への弔辞のなかで，「私

はあなたと同じ時期に東京帝国大学文学部にあって毎日机を並べて講義を聴いた。あなたは社会学を修め私は哲学を学んだが，同時に卒業の日を迎えると共に，あなたは改めて経済学部に移られ」（『進路』第10巻第7号　13頁）た，とあるから，田村は，1924年に「大土地所有と社会問題」を書き上げたあと，社会学に飽き足らぬものを感じて，さらにこの問題を深堀するために経済学部へと学士編入したのであろう。もっとも，この課題を学問的にアカデミックに追及すようとしたようには思えない。なぜなら田村は，1922年に高等試験（高文）に合格し，官僚への道を歩むことを決めていたからである。彼は，「大土地所有と社会問題」を解きほぐす道を官僚の道のなかに求め，そこに進む準備の一環として，関連領域として経済学の分野に歩を進めたのである。

高等試験（高文）へ

田村は，東京帝国大学社会学科在学中の1922年11月に高等試験（高文）の行政科に合格している。『官僚の研究』（講談社　1983年）を著した秦郁彦は，「高文」を「日本の科挙」と称し，行政科合格者総計9,565名中東大出身は5,969名で，全体の62.4％を占めたと指摘している。しかもその大半は日本の官庁に就職し，幹部候補生として出世階段を昇って行ったという。むろんなかには病気や事故で涙をのんだものもいたであろうが，厳しい競争を勝ち抜いたものには大臣，国会議員のポストが待っていた。まさに「日本の科挙」そのものである。東大卒が高文合格者の半数以上を占めるとはいえ，それは予備試験が免除されていたというだけで，試験そのものは学外の頭脳優秀な者に広く門戸を開放していたわけだから，立身出世を夢見た多くのものが受験した。高文や司法試験を受ける多くの受験生に愛読された雑誌『受験界』には，受験情報以外にそうした受験生の体験談が紹介されている。実は，1922年に高文をパスした田村敏雄もこの『受験界』に「高等試験行政科受験記　一一年及第者　田村敏雄」と題する一文を寄稿している。「受験するならば一度で合格し度いものであります」という書き出しで始まり，約1年で集中的に1日5時間を当てて勉学した。その際試験科目にない学科でも周辺領域は一通り勉強した。何故なら，行政科試験は，司法試験と違うから，問われるのは「行政に関する確認行為」であり「条文の細かな穿鑿はやらない様に常に大局へ大局へ」進むべしと，受験の勘どころをアドバイスしていた。さらに筆記試験は，「要領」よく，時間配分を上手に，口述試験では「試験委員に対して禧を失はない様に」（『受験界』第4巻第3号　1923年2月　56–59頁）すべしと，なかなかきめ細かい。彼の場合には，比較的淡々と入試準備を回想しているが，同じ1922年に高文をパスした野村義男の場合には，19歳で逓信官吏練習所を出たあと7年がかりでやっと26歳で合格したが，7, 8月の2か月は朝の8時から夕方の5時まで汗だくで勉強し，そのため体重は一貫目やせ，試験には通ったが，精神的負担から共稼ぎの妻は嫁して六個月で過労で死去したと苦渋の告白をしている（同上誌　第4巻第1号　1923年1月　37–40頁）。当時の高文の試験問題は，本試験では憲法，刑法，民法，行政法，経済学，国際公法が必修，行政学，商法，刑事訴訟法，民事訴訟法の中から1科目選択となっていた（岡本真希子『植民地官僚の政治史』三元社　2008年235頁）。試験は，4日間，7科目に及んだ。受験場には100人ほどずつ収容され，出題を待つ。「開始の鐘と共に試験官が綱を切るとその時間丁度巻物のようにしてある問題を書いたのが，降りるのだ，その時の光景は何とも云えないシーンだ」（奥村勝子『追憶奥村喜和男』1970年，232頁）とは，田村より1年遅れて高文をパスした後の逓信官僚奥村喜和男が郷里に送った手紙の一節である。

1922年の高文の行政科に合格した者は全部で262名。1910年代は大体100から200人の間を上下していたのだが，1920年代に入ると200人から300人台へと増加する。1930年代は再び100から200人の間へと縮まり，1942年から43年にかけて一挙に400人から500人へと増加する。つまり，田村の時代は合格者が増加する時期に該当する。とはいっても，高文は，難関中の難関試験であったことに変わりはない。

1922年の高文行政科の合格者のなかで東京帝国大学卒業者の数は168名で全体の64.1%を占めていた。田村もその一人であったことは言うまでもない。高文卒業者で官庁に入省したものを見ると，第1位は内務省で93名，第2位が大蔵省で28名，第3位は鉄道省で27名だった。第1位から第3位までの入省者の中に占める東京帝国大学生の比率を見ると，内務省が73.1%，大蔵省が85.7%，鉄道省が74.1%だったから上位3位の中では大蔵省入省者に占める東京帝国大学生の割合は大きかった（『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』）。それだけ，東京帝国大生には大蔵省は人気が高かったといえるのだろう。田村は，なぜ大蔵省に入省したのかに関しても何ら記録は残していない。しかし，官僚システムの中枢に入ることで，学生時代から抱いていた「大土地所有と社会問題」，つまりは土地所有を根幹とする社会問題への解決策を探ろうとしたに違いない。

これら大蔵省入省組は，27名全員だったわけではなく，1, 2年のずれがあるが，田村と同じ1922年高文合格組で，同期で大蔵省にはいったもののなかには大蔵省から関東庁税務課長そして満洲国財政部で田村と共に満洲国税制の改革に取り組む源田松三，大蔵省から田村と共に渡満し満洲国理財司長となった田中恭などがいた。

第3節　大蔵省の官僚に

大蔵省入省

大蔵省へ入省したのは1925年のことだった。同期には後に総理大臣になる池田勇人やその他錚錚たるメンバーがそろっていた。1963年8月にとり行われた田村の葬儀に当時総理だった池田勇人は出席し，弔辞を読み上げたが，そのなかで「君とは大蔵省の採用が同期で山際君や植木君など多士済々な大正一四年組だった」（『進路』第10巻第7号　1963年9月）と述べていた。池田がいう「大正一四年組」にはどんなメンバーがいたのか。同期の1人で，池田から「植木君」と呼ばれた植木庚子郎は，池田勇人への追悼文「若き日の新年会」のなかで，「君と私の交友は，大正十四年の春からはじまった。君は京大を，私は東大を卒業して，ともに大蔵省へはいったときからである。当時のクラスメートは，故浜岡達郎，故水本高明，故毛里英於菟，故深沢家治，故宇川春景，故坂口芳久，故田村敏雄，山際正道，杉山昌作，塚越虎男，小林末夫の諸君に，君と私を加えた十三人だった」（松浦周太郎『池田勇人先生を偲ぶ』1967年　29頁）と述べている。このとき大蔵省にはいった13人の同期生は，エリート候補としてそれぞれが己の道をあゆんでいる。

同期生の面々

入省後に皆は一斉に出世競争に飛び込んでいる。毛里英於菟は専売局から宇治山田，熊本，下京税務署の税務署長を経て1933年満洲国国務院総務庁の事務官となっている。その後興亜院を経て1941年には企画院調査官として戦時経済統制の要の位置で活動していたが，戦後の1947年に死去してい

る。深沢家治は，入省後に英仏駐在を経て 1929 年に帰国後は沼津税務署，淀橋税務署の税務署長を務めたあと本省に戻り課長，部長を歴任した後 1945 年印刷局長を最後に退職している。宇川春景は入省後英仏駐在から 1929 年帰国，その後水戸税務署，永代橋税務署の税務署長を経て 1935 年から 1939 年まで米国駐在，帰国後本庁の課長局長を歴任，1944 年の大阪地方専売局長を最後に退職している。坂口芳久は入省後は宇治山田税務署，奈良税務署，京橋税務署の税務署長を経て本省の課長，部長を歴任，45 年東京財務局長を最後に辞職している。戦後は日銀理事から中小企業金融公庫総裁を務めている。山際正道は入省後は米国駐在のあと 1929 年に帰国したあと高崎税務署，京橋税務署を経て本省の課長，局長に就任，1945 年大蔵次官を最後に辞職している。戦後は日本輸出入銀行総裁から日銀総裁を務めている。杉山昌作は入省後専売局畑を歩み専売局長官で戦前を終えている。戦後は東北興行会社副総裁から 1950 年に参議院選挙で当選，2 期務めている。塚越虎男は入省後は大分税務署，長崎税務署，和歌山税務署，亀戸税務署の税務署長を経て本省へ戻り，本省の課長，局長を経て宮内省皇室経済主管で退任している。戦後は会計検査院長などを務めた。小林末夫は入省後は専売局畑を歩み大阪地方専売局長を最後に退官，戦後は民間に転じて事業活動を行った（大蔵省百年史編集室編『大蔵省人名録　明治・大正・昭和』大蔵財務協会　1973 年）。

彼等は皆一様に入省後，基礎訓練を受けたあと地方の税務署長に出るか，もしくは海外駐在を経験したあと税務署長を経験，その後本省へ戻り課長，部長を経て出世階段を昇っていくことがわかる。そして敗戦を前後して退官するものが大半だが，運のいいものは戦後も復活し，出世街道を歩み続ける者もいた。池田はその代表ともいえる人物だったが，同期の山際正道は，後に 1956 年 11 月から 1964 年 11 月まで日銀総裁を務めるし，植木庚子郎は 1960 年 12 月の第二次池田内閣時と 1970 年 1 月の第三次佐藤内閣時の法務大臣，1972 年 7 月の第一次田中角栄内閣時の大蔵大臣を歴任することとなる。

入省，結婚，山形税務署長に

田村敏雄は，1925 年 4 月入省後どんな歩みをしたのか。田村はまず理財局に配属され，1925 年 12 月に専売局にさらに 1926 年 4 月に預金部に移った後 1927 年 7 月に山形税務署長に就任している。

大蔵省入省直後の 1926 年に田村は宮川久次郎の長女千枝子と結婚した。千枝子は 1907 年生まれで，1925 年に東京女高師（現お茶の水女子大学）付属高女を卒業し，1 年後に田村と結婚し新婚生活をスタートさせた。田村敏雄 31 歳，千枝子 19 歳であった。そして 1926 年には長女美智子が，1929 年には長男浩一郎が生まれた。田村は，結婚直後の 1927 年 7 月家族をひき連れて山形税務署に赴任することとなる。

もっとも田村の名前が山形税務署の『職員録』に所長として登場するのは翌 1928 年 1 月だから着任は若干遅れたのかもしれない。部下は 28 名だから県庁所在地の税務署ではあったが，さほど大きな規模ではなかった。すでに紹介したように，当時の在籍中の高文合格者で大蔵省入省組の「エリート」は大抵入省数年で，各県の税務署長として本省からいったん外に出ている。つまりは，当時の税務署長というのは，大蔵官僚のキャリア組が一度は通らなければならない関門だったのである。同期の池田は 1927 年から 1929 年まで函館税務署長，1929 年から休職する 1931 年まで宇都宮税務署長を務めている。植木もまた同時期に松本税務署長，岐阜税務署長を務めていた。戦後でも大蔵省の

キャリア組は，入省後5年程度で本省の係長に到着した後地方の税務署長に出て，数年で本省課長補佐で戻るというのが一般的昇進経緯だったようだ（秦郁彦『官僚の研究』講談社　1983年　229頁）。キャリア組でない税務職員は，定年間際になってやっと税務署長のポストに到達するが，高等文官試験のパス組は，20歳台にして税務署長のポストに就く。ここで1か所の税務署を2年ほどで勤めあげながら，いくつかの税務署長ポストを歴任するなかで，官僚トップとしての能力を磨くと同時に，組織の指導者としての特性を持ったものが，さらに選抜されて上のポストに進むこととなるのである。したがって，この段階で，田村は大蔵省のエリート街道を一歩一歩進んでいたことがわかる。

税務署長の日常

当時の山形税務署長の生活がどんなものであったか，について田村は何も残してはいない。しかし，ほぼ同時期に東京帝国大学法科大学を卒業し，在学中に高文をとって大蔵省入りした松隈秀雄が『私の回想録』（平和厚生会　1982年），内政史研究会『松隈秀雄氏談話速記録』（上）（第1回～第3回　1971年2月～3月）で当時の税務署長の生活を回顧しているので，それに代えて当時の税務署長の生活を紹介することとしたい。

まず，松隈秀雄の経歴を簡単に紹介しておこう。松隈が入省したのが1921年だから入省年では田村よりは四年ほど先輩ということになる。入省後のコースを見ると，米国駐在を経て田村が入省した1925年に帰国，その後宇都宮税務署，水道橋税務署，神田橋税務署の各署長を経て本省へ戻り課長，部長，局長を歴任，大蔵次官，外資金庫理事長を経て東拓副総裁で1945年に退官している。戦後は公職追放解除後に日本専売公社総裁を務めている。この経歴からわかるように田村の入省が松隈の米国留学からの帰国と重なっていることを考えれば，税務署長時代はほぼ同時か松隈が若干早かったとみて差し支えないであろう。

さて，その税務署長就任の気分であるが，宇都宮税務署長に就任した松隈は「初めて“長”とつくものになり，しかも本省を離れて独立部隊の“長”になったということで，私は緊張と誇りが錯綜した気持ちでありながら，勇躍して宇都宮市に赴任したのである」（『私の回想録』48頁）と記しているが，時期，赴任場所こそ若干違うとはいえ，山形税務署長に就任した田村もおそらく同じ気持であったに違いない。署長は官舎が用意されている場合もあるが，「そのころ，大蔵省関係では官舎は稀有の例とされていたし，況や税務署長などに官舎がありようはずがなかった」（同上書，54頁）と回想していることから判断すれば，山形に赴任した田村の場合も借家住まいだった可能性が高い。新米署長には万事すべてに通じた庶務課長がついていてサポートしてくれるので，問題はなかった。月給は約150円前後であるが，ボーナスが年2回で2か月分約300円支給されたというから，月に家賃を30円払っても結構贅沢な生活が出来たという。松隈の場合には，月給のうち家賃を除いて1日2円と見積もって月60円を細君に渡していたので，残り60円を小遣いに使うことが出来た。料亭の支払いが1回3円から5円だったので足りないときはボーナスで清算できたという。そのボーナスの300円だが，忘年会費用に75円ほど出して署員20人ほどが飲み食いして楽しんでも十分御釣りがきたという（同上書，64頁）。

職務関係で宴会が行われると偉い順に席が決まる。最上席は親補職の師団長が座り，以下裁判長，知事，検事正が続く。そして市長，郵便局長，郡長と座り次に税務署長が座を占めた。いわば，その

地方での有名人だったわけである。しかも 20 歳代の若さで地方の名士の体験をしたのである（同上書，65 頁）。

仙台税務署長に

田村は，1928 年 8 月からは仙台税務署長を務めている。先の松隈の記録から類推すると，仙台税務署長に補すという発令をもらうとまず後任者に事務引継ぎをし，関係各処にあいさつ回りをした後山形から仙台へと移り，前署長との引き継ぎ業務を行ったあと，関係各処にあいさつ回りをして仙台税務署長としての活動を開始する，という段取りだったと想像される。仙台に転勤すると早速家さがしを行い，生活を整えるということも山形税務署時代と変わらぬことだったと思われる。当時の仙台税務署は総員 33 名で，山形税務署長時代と大きくは変わらないが，その中に 4 名の酒造技手が含まれていた点が山形税務署長時代と違っていた（『職員録』）。当時は，酒税が税収の多くの部分を占めていたわけで，税務署の間税課が大きな比重を占めていた。松隈が最初に勤務した宇都宮税務署も酒税収入が大きかったというが，仙台税務署も似たようなものだった。前述したように仙台税務署には四名の技手がいて，醸造技術の向上やその鑑定の実地指導を行っていた。田村もそうした技手を連れて酒庫巡りをしたのであろう。田村は，仙台税務署長時代の記録を何ら残してはいない。ここでも重要な行事の一つが毎年 3 月下旬に行われる新酒の利き酒会で，これは税務署単位の酒造組合が催すのだが，会長は税務署長で，優等，一等といった賞状を渡すというのが恒例だった。また，これに備えて税務署長は管内の酒庫をまわり，指導激励するというのが年中行事だった。税務署長が行くとなると特別待遇で，庫人一同が一列に並んで，手を膝まで下す最敬礼で迎えてくれたという。こんな経験をしながら田村も税務署長として次第にその地位にふさわしい風格を備えていったのであろう。

恐慌の嵐の中で

田村が仙台税務署長を務めた 1929 年 8 月以降の東北地方は，金解禁から世界恐慌の嵐の中で不況の激流の中に突入する。最初に打撃を受けたのは，農村地帯といっても山間部に近い養蚕農業地域だった。養蚕地域は 1929 年 10 月のウォール街での株暴落から始まるアメリカ経済の破綻と対米生糸輸出の激減の中で壊滅的打撃を受けたからである。しかし，不況の影響はこれにとどまらなかった。1930 年になるとそれは平野部の米作農業地域に広がっていく。この年は豊作だったが，それゆえ米価が低落して農家経済を苦しめる結果となった。逆に翌年の 1931 年は未曽有の凶作で，米作地帯だった東北の農村は困窮の淵に叩き込まれた。東北や北海道では冷害と凶作で負債を抱えた貧農の農家の娘の身売りが急増し社会問題化した。この社会世相の悪化に軍部はその解決策を軍事独裁と満洲侵略に求めた。1931 年 3 月には陸軍の橋本欣五郎や民間の大川周明らが宇垣一成首班内閣の擁立を策してクーデタ未遂事件を起こした（「三月事件」）。続いて 10 月には橋本らは荒木貞夫を擁して軍事独裁政権の樹立を図った（「十月事件」）。

これらの国内クーデターは，いずれも未遂の失敗に終わったが，関東軍の起こした 1931 年 9 月の満洲事変は，中国東北を戦火に巻き込む形で満洲国の誕生を生み出した。この満洲国の出現が田村敏雄の運命を大きく変えることとなるのだが，その点は次節で詳しく論ずることとしよう。1932 年になってもクーデターとテロの動きは収まらなかった。1932 年 2 月には若槻内閣の時の蔵相井上準之

助が井上日昭率いる血盟団の小沼正に射殺される血盟団事件が発生し，3月には三井合名理事長の団琢磨が同じ血盟団の菱沼五郎に暗殺された。そして5月には海軍青年将校らによる五・一五事件が発生し，首相の犬養毅が射殺された。1932年になると国内でのテロの混乱の中で，中国の東北地方では，次節で述べる満洲事変とその後の満洲建国が次々と具体化されていった。

第4節　満洲国官吏として

満洲事変の勃発

1931年9月18日突如満洲事変が勃発した。関東軍の第二師団と鉄道守備隊合わせて1万余の日本軍は，奉天軍閥が満鉄の鉄道線路を「爆破」したことを口実に北大営に攻撃をかけた。奉天軍閥主力は張学良に率いられて長城線以南に展開しており，東北には留守部隊が配置されていた。留守部隊とはいえ重火器を装備した10万余の軍勢が満洲に屯していたのである。関東軍は，24センチ榴弾砲を分解してひそかに奉天に持ち込み，威嚇射撃と夜襲で北大営を攻略した。当時北京にあった張学良は，蔣介石の指示もあり，彼自身も日本軍の挑発に乗らぬよう無抵抗を指示した。当初張学良は，日本軍が満洲全面占領作戦を展開するとは予想していなかったという（NHK取材版・臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』 角川書店　1991年　123–124頁）。事変勃発以降，関東軍は，奉天から21日には朝鮮軍の越境攻撃に呼応して早くも吉林を占領，28日までには袁金凱を奉天地方自治維持会会長に，熙洽を吉林省長官に引き出して，彼らを使って奉天および吉林省の張学良からの独立を宣言させた。熙洽引き出しに当たっては，吉林に進駐した第二師団師団長や参謀長，そして関東軍参謀たちが「独立宣言か死か」と拳銃を突きつけて彼を脅迫したという（石射猪太郎『外交官の一生』，読売新聞社　1950年　187頁）。さらに関東軍は，吉林省で抵抗する張作相系の軍閥軍隊（反吉林軍）を追撃しつつ，他方で洮索で張学良から独立を宣言した張海鵬を使って黒龍江省の占領を狙い，早期の占領は無理だと判断すると，急遽黒龍江省首席代表の馬占山と妥協し，北満の治安の安定を図り，返す刀で1932年1月には張学良の対満反抗拠点の錦州を占領したのである。1932年1月には戦火は上海へと拡大し，激しい戦闘は5月まで継続した。そんななかで各省の主要都市を占領した関東軍は1932年2月以降は連日のように「新国家建設幕僚会議」を開催し，建国構想を具体化すると同時に，味方にし得る旧奉天軍閥領袖を担ぎ出し，清朝最後の皇帝溥儀を執政という名でトップに据えて1932年3月満洲国の建国を内外に宣言したのである。

満洲国の成立

満洲事変後主要都市を占領した1932年2月以降関東軍は次々と当初の占領計画に従って満洲国の国つくりの骨格を整備していった。もっとも当初は関東軍参謀の石原莞爾は，満洲直接占領構想を持っていたが，しかし事変直後「日本軍に真に協力する在満漢民族其の他を見，更にその政治能力を見るに於いて」（前掲『石原莞爾資料国防論策』91頁）早々に独立論へと転換するといった重大な変更も見られた。関東軍は味方になし得る旧奉天軍閥系将領を担ぎ出し，宣統帝溥儀を「執政」という名の「頭首」にそえて，国際連盟派遣のリットン調査団が調査報告書を作成する前の1932年3月に満洲国の樹立を内外に宣言したのである。こうして，「国首」は「執政」に，「国号」は「満洲国」に，「国旗」は黄色を旗地に左上の角を紅，青，白，黒の四色とした「新五色旗」に，年号は「大同」と

した満洲国が誕生した。満洲国は，それまでの奉天軍閥時代の奉天，吉林，黒龍江三省の連合自治的性格の統治機構を払拭して「執政」を頂点とし，参議府，立法院，国務院，監察院を軸とする強力な中央集権的機構を作り上げたのである。しかし，それは表面上のことで，皇帝の諮問機関である参議府は形式的で，立法を担当する立法院は一度も開かれず，上意下達の協和会にとってかわられ，中心的行政機関だった国務院は日系官吏が実権をもつ組織と化し，監査を担当する中国の伝統的機関である監察院は旧老臣の集合場と化し，1936 年には廃止された。これらの機関のなかで唯一積極的に活動したのは国務院であったが，初代国務総理の鄭孝胥は，溥儀をお飾りの皇帝と扱う関東軍のやり方と対立して帝政移行後の 1935 年 5 月辞任，後を継いだ二代目の張景恵は，「好々おじさん」と称されたように関東軍の傀儡そのものとして立振る舞った。結局，実権を持ったのは，国務院の中核を占める総務庁だった。後述するように，ここに日系高級官吏が結集し，関東軍と一体となって満洲国の政治を支配した。

関東軍からの要請と選抜

満洲国に大蔵省の秀俊を出してくれという関東軍からの要請があったのは 1932 年 6 月のことだった。関東軍からの要請を受けて大蔵省内では早速人選が行われた。派遣要請は，全部で 6 名，派遣者の中心人物には当時大蔵省総務部国有財産課長だった星野直樹が選抜された。星野に一任された派遣者の選抜で指名されたのが大蔵省の営繕管理局総務部で星野のそばで働いていた田中恭，宇都宮税務署長で将来関税課長間違いなしといわれた永井哲夫，星野の補助をしていた営繕管理局事務官の古海忠之，主税局事務官だった松田令輔，岐阜税務署長だった阪田純雄，札幌税務監督局総務部長の寺崎英雄，そして仙台税務署長だった田村敏雄もこの一行にくわわることとなった。大蔵省の将来を担う「エリートの卵」だった地方税務署長が多数選抜されたことは，彼等の多くが前途有望な若手官僚だったことを物語る。彼らのなかで田村を選抜した理由を星野は次のように述べていた。

「国税課長としては，当時仙台の税務署長をしていた田村君（敏雄，後に満洲国民政部教育司長，浜江省次長，宏池会の中心，故人）を選んだ。田村君は高等師範から東大哲学科を出て，文官試験を通り大蔵省に入ってきた変り種。若い時には苦学した経験もあり，大蔵省の若い人たちの仲間では，視野が経験の範囲を超えている出色の人物」（星野直樹『見果てぬ夢』ダイヤモンド社　1963 年　12 頁）だったからである。「若い時には苦学した経験」をもち，大蔵省の若手から「視野が経験の範囲を超えている出色の人物」と評されていたことは，これまでの彼の歩みを言い得て妙である。もっとも星野は，田村は東大哲学科出身と書いているが社会学科が正確である。星野が，あまたの税務署長クラスの若手エリート候補の中から，あえて田村を引き抜いたということは，中央にも彼の優秀さや非凡さが伝わっていたということであろう。他方，田村がこれに応じた理由は，彼を引き付ける「何物か」が新生「満洲国」にあったからに相違ない。貧困の嵐が吹き荒れる東北の農村の事態を税務署長の目で厳しく見ていた田村にすれば，その打開の「解」を日本国内よりは「満洲国」の将来に求めたとしても不思議はない。関東軍の掲げる日・朝・中・満・蒙の「五族協和」や帝国主義の植民地支配と異なる東洋的「王道楽土」の建設というスローガンも，田村にとっては事変直後は新鮮に見えたことだろう。東北の現実に絶望的だった田村は，星野からの指名を積極的に受け止めたのである。

派遣選抜から外れた池田勇人

1932年6月に関東軍から満洲国へ秀俊派遣の要請があった時，田村と同期の面々は何らかの意味で派遣対象者となったはずである。田村の同期（大正一四年組）の主だったものをあげれば毛里英於兎，深沢家治，宇川春景，浜口芳久，山際正道，杉山昌作，塚越虎男，小林末夫，植木庚子郎，池田勇人らであった。彼らの多くは，将来を嘱望されて地方の税務署長の任についていた。田村が仙台税務署長だったことは前述したが，同期の毛里は熊本税務署長，深沢は沼津税務署長，宇川は水戸税務署長，山際は高崎税務署長，杉山は坂出地方専売局，塚越は和歌山税務署長，小林は金沢地方専売局，植木は岐阜税務署長，池田は宇都宮税務署長である。彼らの中から田村が選抜されて満洲へと渡ったわけだが，実は池田もその候補の一人であったといわれる。しかし池田は1930年9月に皮膚・粘膜がびらんし出血する「落葉性天疱瘡」なる奇病に取りつかれ，1931年5月から1933年5月まで2年間休職を余儀なくされた。大蔵省からの渡満官吏の人選が行われたのは，ちょうど池田が病気療養中のことだった。もし，池田が奇病を患っていなかったら，田村ではなく池田が選抜されて渡満した可能性は少なくない。実は，池田は自らを「赤切符組」（列車で一等が白切符，二等が青切符，三等が赤切符）と称して自らの出世の遅れを揶揄していたからである。いずれにしても田村が選抜されるときは，池田は闘病中でその選に名が挙がることはなかった。

その後も出世競争で後れを取った池田だが，1941年池田は第一国税課長となる。やっと主流コースに入ったかと思われたが，その後が続かない。「課長にはなったが，なかなかつぎへすすめそうもない。何度もけ落とされそうになる。当時，満州国にいて総務長官をやっていた古海忠之が，池田の苦境をみて，満州にこないかと誘った。古海は大蔵省で池田の一期か二期上だった。決めかねているうちに終戦になった」（伊藤昌哉『池田勇人　その生と死』1966年　至誠堂　58頁）という。彼が満洲へ行っていたら，首相の座はおろか，戦後の歩みもなかっただろう。運命の不思議さを感ずる一こまである。

満洲国へ

星野を筆頭とする大蔵省派遣の満洲組は，1932年7月12日東京駅を発った。東京駅からの晴の門出は，「特急一等に乗って，展望車で堂々と出かけることにした」という。星野は「立派な折目をつけてやることが必要」（同上）だと考えたからである。ところが出発当日の切符はすでに売り切れていて入手できない。そこで鉄道次官の久保田敬一に掛け合って大阪までの展望車席を確保して東京駅で盛大な壮行式を行った（『見果てぬ夢』18頁）。出発6日前の7月6日に星野の父親が他界するといった予想外のこともあってのあわただしい出発だった。出発時その模様を「東京朝日新聞」は，展望車で出発する一行をホームで見送る家族や関係者の写真を掲載すると共に「『平和の義勇兵』きょう満洲へ　大蔵省少壮高等官等　職を擲って出発」と題するタイトルを掲げて以下のように伝えていた。

「身を満洲国に埋めようと新満洲国に永住の決意から職を投げ打った大蔵省若手高等官星野国有財産課長以下9名のうち7名が11日午前九時超特急つばめ号で賑々しく出発した，早朝から乗車口ドームには出勤時の同僚後輩が詰めかけて名刺の山を築き『平和の義勇兵』星野課長，田中，古海両事務官，山梨専売局副参事，田村，永井，坂田各司税官七名は口を真一文字に結んで友情を受ける

中にリーダー格である星野課長が厳父を失ったばかりのこととてフロッグに喪章を巻いている姿が，その使命と覚悟とを語っていた　◆一行は特に助役の案内でホームにはいれば，待ち構えた親兄弟が抱き合わんばかりの騒ぎ，見送り人の中に軍人の姿が多く見られたのも，もっともである，一行は展望車の後に乗り込んでいよいよ出発となれば，群衆から歩み出た兵士が『兄さん，しっかり，さようなら』と叫んでホームの人々をしいんとさせた　◆尚他の二人―松田国有財産課事務官，寺崎税務監督局書記官とは京城で落ち合い，一七日いよいよ満洲新国家に入る予定である」（「東京朝日新聞」1932 年 7 月 12 日）。

田村敏雄の妻千枝子も娘の美智子の手を引き，息子の浩一郎を抱いて，この送迎の人波のなかにいた。そして，千枝子たち留守家族も敏雄からの満洲への呼び寄せの報を東京で待つこととなる。

星野直樹ら一行は，東京を出発後に大阪，京城（現，ソウル）を経て 7 月 15 日に奉天（現，瀋陽）に到着，ここで事変直後に東拓ビルに司令部を構えていた関東軍の本庄繁司令官を筆頭に橋本虎之助参謀長，板垣征四郎参謀らの軍首脳と会見，本庄から「思う存分働いてくれ」（星野直樹『見果てぬ夢』21 頁）との励ましを受けた。この時，参謀の石原莞爾は不在だった。彼らが関東軍を訪問した東拓ビルというのは，正式には東洋拓殖株式会社奉天支店のビルで，満洲事変直後から 1934 年まではこのビルに関東軍司令部が置かれていた。本庄司令官の激励を背に受けて，16 日には満洲国の首都の新京（現，長春）に着いている。当時は，まだ新京に現存する旧関東軍司令部，現中国共産党吉林省委員会の建物は完成していなかった。この建物の建設が始まったのが，星野らが新京に就いた 1932 年で，完成するのは 2 年後の 1934 年のことである。星野らが新京に着いた時期は，建国事業が始まったばかりで，新京は満洲の新開地だった。建設途上とは言え，駅の周りは一面原野で，荒涼とした雰囲気が街全体を覆っていた。だから，新京についたのだが，そこは「出迎え少ない新京駅頭」（同上，22 頁）で，寂しい限りの新興都市だった。さらに宿泊の旅館は，ローカルな満蒙旅館で，騒音と蝿，蚤に悩まされて到着一夜を過ごした。翌日車で満洲国財政部に向ったが，発足当初の財政部の建物は，旧東三省官銀号長春支店の建物だった。東三省官銀号というのは奉天軍閥が支配していた基幹銀行の一つで奉天（現瀋陽）に本店を，満洲各地に支店をもって満洲経済に絶大な影響力を振るっていた。星野ら大蔵省からの派遣組は，まず臨時に満洲国財政部が置かれていた東三省官銀号長春支店に赴いたというわけである。

満洲国の初代財政部総長は毅治だった。彼は日本の陸軍士官学校騎兵科の出身で，吉林省を基盤とする軍閥の領袖の一人だった。彼は，満洲国建国に参加した張景恵，馬占山，蔵式熙と並ぶ建国「四巨頭」の一人で，「吉林系」と称された満洲人脈の頂点に立つ人物だった（浜口裕子『日本統治と東アジア社会』勁草書房　1996 年　87 頁以下）。1928 年 6 月張作霖爆殺事件が起きたときは混乱する奉天軍閥の中枢にあってこれを巧みに処理し関東軍に付け入るスキを与えず，死去した張作霖から張学良に家督を継ぐうえで重要な役割を演じた（林久治郎『満洲事変と奉天総領事』原書房　1978 年）。その後彼は吉林省に在って満洲事変をむかえた。満洲事変は 1931 年 9 月 18 日に勃発するが，3 日後の 21 日には関東軍は朝鮮軍の越境に呼応して吉林を占領，28 日には毅治を吉林省長官に引き出して張学良からの独立を宣言させた。彼は，満洲国建国後は財務部総長として建国に参加することとなる。

もっとも，彼は，普段は彼の根拠地である吉林にいて必要なときに新京に出てくるというのが実態

だった。したがって，彼は普段は吉林にいたため，現場を仕切っていたのは関東庁から横滑りしてきた総務司の司長の阪谷希一と税務司の司長の源田松三だった。満洲国は建国直後で，まだ組織がきちんと整備されておらず，日本の税務署に該当する税捐局が治安悪化の中で機能せず，したがって租税が徴収できず，そのため国家予算も組まれておらず，通貨も各省で様々な異なる通貨が流通している状況で，混乱を極めていた。

満洲国財政部で予算編成

田村たちが新京に着くや否や超多忙な生活が待っていた。1932年7月田村は国税科長として関東庁財務課長から満洲国入りをし税務司長に就任した源田松三の下で働くこととなった。当時まず満洲国が当面した課題は，財政の基礎確立のための財政制度の確立と予算案の作成だった（『満洲国史』総論　303頁）。

張学良時代の東北地域の財政は奉天，吉林，黒龍江の三省が，それぞれ自治体制をとって別個の財政体制を築いていた。三省の中心に位置していた奉天省を例にとれば，1924年ころから張作霖の中国東北から華北地域への進出，軍事支出増加と連動して財政規模は急速に拡大を開始する。歳入の大半は統捐と称された農産物移動に課せられた出穀税，通貨税，鎮場税で，特産大豆取引から派生した税だった。歳出の中心は軍事費だった。1924年以降の張作霖の関内での軍事作戦の展開で軍事費はうなぎのぼりに上昇し，これに合わせて歳入の増加が図られたため，国家財政は極端な赤字財政となっていた。

田村たちの作業は，まず，満洲国の予算制度を確立することから始まった。満洲国の予算年度をどうするか，満洲国の年間総予算額はどの程度か，各省で異なる予算項目をどう調整するかなど，満洲国出発にあたって解決せねばならない問題は山積していた。

満洲事変前の張学良統治下の東三省では奉天，吉林，黒龍江の三省が奉天省を頂点に緩やかな連合自治制を敷いており，それぞれ独立した財政制度を持っていた。満州事変後は，そうした連合自治制を解体し満洲国政府のもとに再統合したため，新しい財政制度と予算制度の確立が求められたのである。

歳入の最大項目は租税であるが，それが満州事変後の混乱で正確な実態がつかめなかった。星野直樹は，「均衡予算を編成するとして，いったいどれだけの金額と歳入としてあげることができるであろうか。それを計算するのは，税務司（日本の主税局）の仕事である。そこで源田君に租税収入予算をつくってもらった」（星野直樹『見果てぬ夢』65頁）。ここでいう源田君というのは，田村の上司の税務司長の源田松三である。田村もまた源田の下で租税額確定作業にあたったことは言うまでもない。しかし，租税総額を把握することは困難を極めた。日本と徴税制度が全く異なるからである。満州で徴税を担当するのは税捐局だが，事変後の戦乱のため税の徴収が円滑には出来ないだけでなく，徴収額の予測が出来なかった。星野直樹の回想によれば，全満152の税捐局のうち連絡のつかないものが多く，したがって事変前の租税額は7,000万円とし，平均を40％として2,800万円と推定した。これに塩税と関税，専売収益を加えて約1億円としたのである（星野直樹『見果てぬ夢』66–67頁）。田村は，源田の下でこうした厄介だが，しかし国作りの基本となる徴税作業と徴税額の予測作業を行ったのである。さらに田村たちは，確実な収入源であった塩税と税関接収による関税をもとに月間

の予算を組み，それをもとに旧政権時代と同じ会計年度の 7 月開始翌年 6 月締めの年間予算を作り上げた。関税，塩税に各種租税を加えておよそ 9,650 万円というのが 1932 年度の歳入総額だった（『満洲国史』総論　305 頁）。

予算制度の整理統合

田村たちは，こうした予算編成作業と並行して各省ごとに異なっていた税務機構，税制，会計，国庫金，起債，官業，会計年度などに関する一連の統一作業に着手した（同上書，309–312 頁）。

出発時は，奉天軍閥統治期の租税制度を踏襲したが，満洲国建国当初から租税制度の改革に着手し，満洲国成立 5 年後の 1934 年末までにはその制度の整備を完了したという（田村敏雄『満洲帝国経済全集』租税編前篇　1938 年　はしがき 1 頁）。

制度改革は三段階で行われた。田村によれば，奉天軍閥下の租税制度は，三つの特徴を有していたという。それは，まずは「収入第一主義」であったこと，そして「各省ごとに租税制度を異にしていたこと」，さらに「請負的徴税制度なりしこと」であった。まず，「収入第一主義」とは，「厳格なる法制に依ることなく専ら課税上の便宜に即し課税の容易なる方面に集中的に重課」する方式であったことである。つまりは，税金を取れるところ，取りやすいところから徴収してきたということである。第二の「各省ごとに租税制度を異にしていたこと」というのは，東北三省があたかも「独立国家の如き状態にあった為，税制も各省に依って異つたのみならず，同一省内に於ても地域的に不統一のものあり，従って他地域に於て課税せし物件に対し更に課税するは当然のこととせられ，何等怪まるるところがなかった」というのである。三つ目の「請負的徴税制度なりしこと」というのは，奉天軍閥下では，徴税機関に対しては所要経費を支給せず，徴税責任額のみ指定し，その超過額の一定部分を割きそれを諸経費，給与に充てることを許すシステムだったことである。したがって，「徴税機構は只管税収の増加に専念し恰も徴税の請負を目的とする営利機関と択ぶことなく，その為，各種の悪弊は半ば公然と行われ」（54 頁）たという。

田村たちは，まず第一期計画としては，奉天軍閥時代の旧制度を基本的に踏襲しつつもその整理改善を図ることを課題とし，国税と地方税の区分の明確化，負担の公正化，省中心の徴税機構を満洲国政府中心に統合すること，に置いた。続く第二期計画は，租税制度そのものを合理化すること，これまでの請負的租税徴収をやめることであった。そして，第三期計画は国税と地方税の有機的結合，税体系の調整・合理化を目指すことであった。こうして「租税整理計画は，建国当初樹立せられたのであるが，計画通り着々進捗し，国税・貯法税を通じて昨年（1937 年―引用者）末を以て一応完成し，茲に我国の租税制度は旧来の面目を一新するに至った」（前掲書　はしがき　1 頁）のである。

この作業の過程の 1936 年 7 月に田村は，財政部税務司国税科長から同じ財政部の文書科長兼人事科長となる。そしてほぼ税制に関する制度的整備のめどがついた 1937 年 7 月には新設された通化省の次長に転勤することとなる。後に彼の上司だった古海忠之は，葬儀の弔辞の中で友人代表として「最初君は財政部税務司国税科長として紊乱した税制を建直し厳正な徴税体制を作り上げ満洲国財政の基礎を固める大任を果たし，後に国税司長として税務行政にいささかの渋滞不安も感じさせませんでした」（『進路』第 10 巻第 7 号　1963 年 9 月　11 頁）と述べているが，これは誇張ではなかろう。事実，彼は財政整備という課題を達成し，その実績を担いで通化省次長のポストに就くのである。

第5節　満洲国政府の中枢へ

「満洲国産業開発五箇年計画」

田村が通化省の次長のポストに就く意味を理解するためにも，1930年代半ばの満洲国の状況に関して説明しておく必要がある。建国後の満洲国が目指した課題は，官僚主導の統制経済体制のもとで，ソ連に対抗して鉄鋼業を主体にした重工業産業の開発計画を推進することだった。1935年に立案され1937年から実施に移された満洲国の「産業開発五箇年計画」は，総予算27億円，日本の国家予算の2年半分の資金を投入して，満洲での鉄鋼業を中心に石炭と鉄鉱石の増産を図り，さらにこの鉄鋼業を基礎に兵器，輸送機器産業の発展を図るというソ連の計画経済を意識した大規模な重工業化計画だった。そして，この計画を推進する企業として，それまでの満鉄に代わり1936年12月日産が満洲へ移駐し，満洲国との折半出資で満洲重工業開発株式会社（満業）が設立された。資本金は4億5,000万円，内満洲国が2億2,500万円，日産が同じく2億2,500万円を出資した。その傘下には，満洲鉄鋼業の中軸企業の昭和製鋼所，自動車組立の同和自動車工業と満洲自動車，撫順炭鉱以外の在満炭鉱の採掘，売炭を行う満洲炭鉱，アルミニウム生産を行う満洲軽金属製造，鉱物採掘を行う満洲鉱山，航空機の組立を行う満洲飛行機製造など，主力企業が含まれていた（満洲重工業開発株式会社『満州重工業資源の開発と満業の使命』1939年）。

通化省次長に

1937年7月新たに吉林省の5県と奉天省の4県を合わせて通化省が作られると，そこの次長として田村が派遣された。目的は通化地域の資源開発だった。ほぼ時期を同じくして，牡丹江省も新設されている（『満洲国史』各論　12頁）。新設された通化省は，「匪賊の本拠地たる観を呈し」，吉林，奉天両省にあっても「特殊地帯の感」があった（満洲国通信社『満洲国現勢』康徳五年版）。この地域は事変直後の1932年には唐衆伍を指導者とする反満抗日運動の拠点であり，日本軍警は，1932年10月に討伐作戦を展開した。唐衆伍は，張学良の部下で，満洲事変後は張学良と連携しつつ土着の抗日組織の大刀会，紅槍会と提携して抗日運動を展開した。討伐の結果，撃破された唐衆伍とその部隊は日本軍の追撃を振り切って逃亡した（『戦跡を顧みて』兵書出版社　1934年　第一篇）。その後，満洲国資源調査隊が同地を踏査した結果，「最近（1937年）の実地踏査によつて資源の優良豊富なことが確認され，就中鉄鉱の如きは記録的な七〇余％といふ良鉱が発見されて，本省の将来を一大鉱産省として約束づけるに至った」（満洲国通信社『満洲国現勢』康徳五年版）。この資源開発の目的のために，旧来の奉天，吉林両省にまたがる山岳地帯に新たな一省が新設され，その立ち上げの責任者として田村がこの地に派遣されたのである。

満洲工業化の拠点と期待された通化省

当初，東辺道は，満洲工業化の一大拠点と考えられていた。抗日ゲリラが討伐されて治安が安定さえすれば，満洲国が掲げた「満洲産業開発五箇年計画」の鉄鋼部門の基軸産業地帯になるべく予定されていたのである。当初は，「富鉱約1億トンの埋蔵は確実にして貧鉱は数億トンに達する」と想定され，ドイツの鉄鋼拠点に模して「東洋のザール」とまで称され，その開発を当て込んで満洲重工業開発株式会社（満業）傘下の準特殊会社として1938年9月に東辺道開発株式会社が設立された。公

称，払込ともに資本金は3,000万円，満業が2,000万円，満業傘下の満洲炭鉱株式会社（満炭）が1,000万円出資で成立した会社で，「通化省管内における鉄鉱石，石炭，製鉄用鉱産物の採掘販売，製鉄鉄鉱等の生産」を事業目的にしていた（満洲重工業開発株式会社編『満洲重工業資源の開発と満業の使命』1939年付表）。後の事だが，この通化省は，ソ連軍が満洲に侵攻した折，満洲国防衛の最後の拠点として皇帝が移る場所として想定されており，現に満洲国皇帝溥儀は，ソ連軍が満洲へ侵攻を開始すると新京（現長春）から通化省に移動し，大栗子溝の鉱山事務所を仮の皇居とした。そして日本がポツダム宣言を受け入れたあとの8月18日ここで溥儀の退位式が行われた。ところで，話を先の東辺道開発に戻せば，「満洲経済開発五箇年計画」の最重要企業の一つとして，大栗子溝，七道溝の鉱山開発を目指していった。しかし，この東辺道には，1930年代前半に活動した唐衆伍に代わって，共産ゲリラの楊靖宇が活動を開始し，「唐衆伍無き後の東辺道密林の王者」（東辺道開発株式会社『東辺道』第4号　康徳7〈1940〉年7月　78頁）が活動し治安が動揺したこと（彼は1940年2月に日本軍警により殺害された。同上『東辺道』第4号　78–82頁），および「その後この資源をだんだん調査した結果，初めの宣伝通りはないという決着」（『第一次満洲産業開発五箇年計画』　134頁）となり，結果的には，「僅かながら日鉄兼二浦，昭和製鋼所および内地」（東洋経済特集『満洲』1940年　62頁）に鉄鉱石を供給するにとどまった。

田村が赴任した時，通化省の省長に就任したのが呂宣文で錦州出身で明治大学卒。満洲国では，外交部文書科長，通商司長，国務総理大臣秘書官を経て初代通化省長に就任している。田村は，呂と組んで通化省の立ち上げ業務を担当したのである（『満洲国現勢』康徳五年版）。田村は1937年7月から12月までで，それ以降は栗山茂二にそのポストを譲っている。田村は，鉄鋼業の生産拡大を最重要目標に置いた「満洲産業開発五箇年計画」のスタート直後の時期に，満洲鉄鋼産業の基盤をなす鉱物資源の「宝庫」である通化省を任されたのである。彼の行政能力への期待がいかに大きかったかは想像に難くない。しかし，通化の街は山間の奥地に在って，山また山を越えていく僻地であった。『満洲国現勢』（康徳五年度版）には康徳5年（1938年）1月通化省を訪れた記者の現地レポートが掲載されているが，雪深い山間地域を1日1往復しかない連絡列車に乗って6時間かけてやっと通化の町に到着したことが記述されている。それでも通化の町は，数年前と比較するとずっと近代化されたと記述されているから，初代通化省次長として2年前の1937年から約半年間かけて省政の基盤を作り上げた田村の行政力量の一端が示されているともいえよう。当時の通化の街を想像すれば，新京（長春）の町から来た田村自身にとっては，さぞかしうらぶれた町に見えたであろう。『満洲紳士録』（1937年度版）の田村敏雄の項を見ると現住所は通化省公署，とあるから，通化省の官舎に住んでいたのであろう。

田村は，1938年1月に通化省次長のポストを辞して経済部税務司長に就任し，古巣に戻っている。しかしそのポストも短期間で同年9月には民生部教育司長に就任した。東京帝国大学入学前に教師の道を志し高等師範で過ごした田村にとってみれば，教育部門は，税制部門に次ぐ得意分野だったといえよう。

満洲国の教育部門で活動

田村は1938年9月に民政部教育司長として満洲国の教育行政に携わることとなる。田村は元々が

京都府師範学校，高等師範学校出身である。その経歴からすれば，民政部教育司長は彼にふさわしいポストだったといってよい。

田村は，1941 年 1 月には大同学院の教官に就任する。大同学院の起源は 1931 年 11 月に設立された自治訓練所にある。同訓練所は満洲事変後に満洲青年連盟や大雄奉会が中心となって 1931 年 11 月に自治指導部が組織されるが，そのもとで 1932 年 1 月に自治訓練所は開所式を実施した。訓練期間は 5 か月であった。自治指導部の指導員が地方自治組織に指導者として入り活動するというのである。その訓練組織として作られたのが自治訓練所だったのである。1932 年 3 月に自治指導部が解散し，新に国務院資政局がこの業務を引き継ぐこととなり，先の自治訓練所も資政局訓練所と名称を変更した。第一期生は資政局訓練所卒業生として巣立っていった。しかし，国務院資政局も 1932 年 7 月廃止されたため，それに伴い資政局訓練所も大同学院と改称され 5 月に入学した資政局訓練所二期生が，大同学院の一期生となった。満洲事変直後の混乱期を象徴する名称変更だが，大同学院はその後満洲国中堅官吏の養成機関として活動することとなる。（大同学院史編纂委員会『碧空緑野三千里』1972 年　大同学院同窓会 45–51 頁，大同学院史編纂委員会『大いなる哉　満洲』大同学院同窓会 1966 年　2–61 頁）田村は，大同学院の教官に就任した 1941 年の 11 月に彼の教育理念を著した『教育国家論』（1941 年　満洲有斐閣）を上梓している。そのなかで，田村は「教育国家論」を展開する。論点がきちっと整理されているわけではないが，その意図することは，現在教育問題が国家的課題となっていること，それを良く達成するためには，「全面的，立体的，歴史的に考えるだけでなく，さらに世界的に考えなければならない」こと，具体的には「東亜全体」「日満一体」で考えるべきだ，と主張していた（20 頁）。時あたかも太平洋戦争突入直前のことである。満洲国が日本の後方にあってその軍需物資の生産基地として大きくクローズアップされてきた時期である。すでに通化省次長として，鉄鋼産業の原料基盤づくりの最前線に立ってきた田村は，今後はそうした産業を育て，運営していく戦士ともいうべき若手官僚の育成に乗り出したのである。1938 年 9 月から 1942 年 4 月まで，3 年 8 カ月田村は教育職に携わることとなる。時あたかも「満洲産業開発五箇年計画」が全力稼働しているときであった。彼は，この事業の人材育成に全力を挙げたのである。

大同学院の教え子たち

田村が大同学院で教鞭をとっていたときに手掛けた教え子も数多い。田村が大同学院で教鞭をとっていた 1938 年 9 月から 1942 年 4 月までというと大同学院では，第 9 期から第 13 期で，「学院中期」（大同学院史編纂委員会『大いなる哉　満洲』大同学院同窓会　1966 年　534 頁）と称される時期で，荒々しい建国期は過ぎて制度が整備され，「建国精神に満ちた冒険型」から「建国精神を体した能吏型」（同書，535 頁）の養成に切り替わる時期であった。田村の『教育国家論』などもそうした大同学院の当面した課題に応える著作だったのだろう。当時は，多くの院生が教員宅に押し寄せて，談論風発夜を徹して語り合ったという。『第三版　満洲紳士録』（1940 年）に記載された田村敏雄の項目を見ると，母サト，田村夫妻，美智子，浩一郎の五人家族で，新京北安南湖に居を構えていたことがわかる。母親のサトを呼び寄せる余裕が生まれてきていたのだろう。そして，趣味としては野球，スキー，スケート，読書とあるから，家族や教え子と共に夏は野球，冬はスキー，スケートそして学生との討論や読書と，満洲での四季の趣味と教員生活とを満喫していたに相違ない。スキーは，田村の

趣味のなかでは最も好んだスポーツで，日本にあっても山形税務署長の時は，蔵王などで大いにスキーを楽しんだという。学生との談論の最中，学生の一人が「女房と畳は新しい方がいい」というと，田村は「うちに限って言えば古ければ古い方がいい」と冗談を言って皆を笑わせた，と同居していた山路富士夫（田村が京都府夜久野尋常高等小学校で世話になった山路吉兵衛の長男）は回想している（沢木耕太郎『危機の宰相』99 頁）が，田村の家には学生が集まり，「勉強会とも雑談会ともつかないものが開かれていた」（同上）という。円満な充実した家庭生活であればこそ，学生の出入りを許容できる雰囲気だったのであろう。田村のところに集まった学生は，大同学院生だけではない。後述する新京法政大学生もそうだし，吉林師道大学生もいた。戦後も深い付き合いをし，田村に弔辞を送った孫亦濤もその一人であった。彼に関しては，また田村の死の項で再び触れよう。

そんなこともあってか，大同学院での生徒と学生の結束は固く，卒業した後でも母校への郷愁捨てがたく，多くの卒業生が卒業後も同窓会を組織して活動していたようで，1933 年第 2 期生として入学した福島鶴太郎のように卒業後 5 年たってから大同学院へ赴任した田村に対しても「よき理解者」だったという謝辞を送っている（『あゝ満洲』764 頁）。卒業後も母校とのつながりを欠かなかった証左であろう。

こうした卒業生の中で，戦後の日本の高度成長政策に深くかかわる人物の一人に藤崎信幸がいた。藤崎は 1910 年台湾の新竹に生まれている。台湾一中から慶應義塾大学文学部予科に入り 1936 年 3 月卒業，同年 5 月満洲国大同学院に入学，同年 11 月卒業し，満洲国官吏として勤務し，大同学院の教訓を体した「王道楽土」「民族協和」に邁進し，1941 年には龍江省副県長，1942 年には国民勤労奉公局第一科長を務めている。おそらく藤崎は田村と満洲国の政府関係会議で顔を合わせたこともあったであろうが，藤崎は 1944 年応召，1945 年 4 月所属部隊と共に済州島へ移動し，そこで終戦を迎えている。同年 10 月藤崎は佐世保に復員している。戦後は満洲での夢を断ちがたく，日本の財界人，政界人を説いて 1951 年にはアジア問題調査会を結成，事務局長に収まると共に岸信介と連携してアジア経済研究所〈現ジェトロ・アジア経済研究所〉を設立し，日本の高度成長を支えた東南アジア市場の開拓に邁進することとなる。藤崎と田村は，戦後の高度成長の中で再び相まみえることとなる。

「満洲国」時代の教員仲間　香川鉄蔵

大同学院時代に田村は福島鶴太郎や藤崎信幸といった生徒だけでなく，多くの教員とも交流を深め，それが戦後の活動の財産となっている。そのなかで，戦後の宏池会の結成，下村治との交流を考える際に大きな役割を果たした人物として大同学院時代の友人である香川鉄蔵の名を忘れることはできない。香川鉄蔵は 1888 年に東京の浅草に生まれている。一高から東京帝国大学文学部哲学科へと進学するが，中退し全国を放浪する。キリスト教に心を向けていた香川は，指導教官だった井上哲次郎の国家主義的立場からのキリスト教批判には納得できないものがあったようだ（『香川鉄蔵』389 頁）。放浪中にスウェーデンの女流作家セルマ・ラーゲルレーブの作品（『ニルスの不思議な旅』）を翻訳『飛行一寸法師』（大日本図書　1918 年）として出版した。1919 年には大蔵省臨時調査局金融部嘱託として欧米諸国の財政調査などを行っている。嘱託として小部屋の片隅に机を置いての調査業務だったが，「わからないことがあれば香川に聞け」といわれるように一目置かれ，局長，次長，課

長の中に「香川門下生」を自称するものが出てきたという（『香川鉄蔵』74–80 頁）。1938 年彼が 50 歳の時大蔵省をやめて満洲は新京に単身赴任し，星野直樹の斡旋で，総務庁企画処参事官のポストに就き，大同学院と新京法政大学の教授を兼任した（『香川鉄蔵』208–209 頁）。大同学院に関しては，前述したとおりだが，新京法政大学に関しても紹介しておかねばならない。創立は 1934 年だが，1938 年に校名を新京法政大学とした。校舎は大同学院の隣に在って，未来の司法官の育成機関であった。各期 60 名が定員だったが，人気があり募集人員も少なかったので，狭き門であった，という（新京法政大学同窓会編『南嶺慕情続編』1997 年　90–91 頁）。当時，総務庁の総務長官は星野直樹，総務庁次長は岸信介である。ここでも香川は調査活動を忘れず，企画処に調査室が設けられると香川はそこに所属して全満調査活動を実施した。香川は，大同学院，新京法政大学で教鞭をとる傍ら満洲の地方を視察し，その成果を『満洲で働く日本人』として発表している。この『満州で働く日本人』には高級官僚はでてこない。満洲の地方で働く下積みの日本人が主に取り上げられている。彼は 1940 年初頭に満洲各地をまわり，主に地方で活躍している日本人の姿を追っている。新京（現長春）を振り出しに鉄嶺，間島省，吉林，ハルビン，大連，奉天，撫順，鞍山，阜新，弥栄・千振〈第一次・第二次満蒙開拓団入植地〉，熱河，赤峰，興安嶺の彼方，黒河・北安をまわり新京へ戻っている。新天地満洲に夢をかけた若者たちに面談し，彼等の活動実態を伝えようとしたのである。香川は，名誉や欲を捨て満洲国の「見果てぬ夢」にかけた若者に何か共感するものを求めていたのかもしれない。

前述したように田村は，1938 年 9 月に民政部教育司長として満洲国の教育行政に携わり 1941 年 1 月には大同学院の教官に就任している。香川は 1939 年から田村と協力して新京法政大学に特修科を設けた。この間の事情について当時同じ総務庁調査室に所属していた鈴木敬人は「総務庁調査室・新京法政大学特修科のことなど」で次のように回想している。「この特修科の開設には〈香川〉先生の一方ならぬお骨折りがあったと聞いている。当時の民生部教育司長は大蔵省出身の田村敏雄さんであったから，先生の働きかけにも効果的な共鳴が生じたことであったろう」(『香川鉄蔵』211–212 頁)。この特修科というのは昼間は官庁に勤めながら夜間に学ぶという勤労学生に門戸を開いたもので，授業は「午後六時から夜半九時半まで」（新京法政大学同窓会編『南嶺慕情』1993 年　134 頁）で教師も昼間は官庁で実務を担当しているものが就任した。かつて苦学生だった田村は，夜間学生をわが身になどらえてみていたに相違ない。

香川は田村が大同学院教授に就任する 1941 年 1 月には満洲を離れ，「国務院企画処嘱託・東京勤務」の肩書で東京に移転するので，二人の交流は短いものであったろうが，満洲在住時代を含めれば，2 年余に及んだ。しかも田村は東京帝国大学社会学科で，中退とは言え香川も同じ東京帝国大学の哲学科出身と同学，隣接分野の専攻という近さに加えて，両者ともに満洲国が掲げる「王道楽土」「五族協和」には懐疑的であった。香川は，それに幻滅を感じて早々に満洲国を退去するが，田村も高級官僚としては珍しく「王道楽土」「五族協和」に納得してはいなかった。帰国後の香川は，満洲国への懐疑もあったのであろうが，1944 年 2 月に満洲国官吏を辞任し，大蔵省外資局嘱託となり敗戦をむかえている。敗戦後の香川は 1946 年 4 月大蔵省主計局，49 年には大蔵省理財局に籍を変えていた。そして 1950 年 7 月には国会図書館の参事に就任している。そして 1951 年 8 月には国会図書館を辞して開国百周年記念文化事業会理事に就任，同時に大蔵省で外国財政調査を行い，1957 年 5 月からは防衛庁に移籍している。（香川節「父香川鉄蔵のこと」『植民地文化研究』第 2 号 2003 年 7 月）。

1957 年前後の時期から大蔵省関係で田村との交流が再開されるが，この点は後述することとしたい。

大連税関長から浜江省次長としてハルビンへ

田村は 1942 年 4 月に大連税関長に就任する。大連は自由港だが，関東州から満洲国へ物資を搬出入する時は関税が発生する。だから満洲国へ入国するものは，事前に大連税関で通関手続きを完了しておくのが通例だった。だから，大連税関は，中国の東北最大かつ最重要な税関署であった。田村は，家族と共に大連市楓町に移り住む（『第四版　満洲紳士録』1943 年）。そしてこのポストを 2 年間務めたあと 1944 年 4 月に濱江省次長に就任する。濱江省というのは，満洲北東部に位置してハルビンを中心に西北は龍江省・北安省と接し，東北は牡丹江省と接し南部は吉林省と接する北満の要衝である。特に同省の中心都市のハルビンは，古くは旅順，大連と並ぶ東支鉄道のロシアの拠点として重きをなし，交通と物流，金融の拠点として繁栄を遂げてきた（『満洲国現勢』康徳 9 年，10 年）。したがって，ハルビンには多くのロシア風の建物が残されていた。ロシア風の建物が軒を連ねるキタイスカヤ，聖ソフィア堂など数多くのギリシャ正教の教会，そして，ゆったりと流れる松花江。敗戦色が次第に忍び寄る北満の緊張感を含みつつもハルビンは，未だ静けさを保持してきた。田村は，1944 年 4 月から 1945 年 8 月の敗戦までの 1 年 4 カ月間をこのハルビンで過ごしたのである。

飯塚浩二の訪問を受ける

田村が濱江省次長をしていた 1945 年 5 月にハルビンの彼のもとを訪れた人物がいた。東京帝国大学教授の飯塚浩二である。彼は 1945 年 2 月から 6 月まで約 4 カ月間，主に北満地域を中心に調査旅行を続け，この地域の敗戦間際の貴重な記録を残している。彼はこの旅の途中で 5 月末にハルビンの田村を訪問し，その記録を『満蒙紀行』のなかに残している。「五月三十日　浜江省の田村次長に会う。北京で橘樸先生からお勧めがあったので，面会を申込む気になったのだが，かえって先方からホテルへご来籠ということになった。談論風発の蔭に満洲国の高級官僚として納まっているには具備していなければならぬ条件が一つの枠としてほのみえ，興味ある人物である」（238 頁）と記述している。もってまわった表現だが，田村の言葉の節々に満洲国への不満とそれを超える彼の夢が表現されていたのであろう。少なくとも彼は表向きの「五族協和」に飽き足らず真の「五族協和」の夢を追い求めていたのだろう。戦後になって雑誌『進路』の随想のなかで，彼は「病院がいらず」，「軍隊もいらず」「監獄も不要な」社会の実現を夢として語っているが，おそらくそうした彼の「夢」と満洲国の現実のギャップの一端を飯塚浩二と語ったのではないか。

飯塚は，引き続き翌 6 月 1 日には，田村の案内で，ハルビン近郊の阿城地域の灌漑溝の造成地の通水式を見学している。中国人青年を動員した勤労奉仕隊を使っての灌漑事業を見学したのだが，中国人青年看視の中での神主による神式の式典と日本酒・するめでの乾杯は飯塚の「民俗学的視覚教材」として格好の材料を提供してくれたことであろう。しかも田村が振る赤旗一閃，ポンプが稼働，水がほとばしるはずであったが，在満日本企業製の揚水ポンプが故障して慌てるおまけまでがついた（同書，238–241 頁）。

敗戦直前のハルビン

敗戦間近のハルビンについて田村は何も語っていないが，飯塚浩二は，克明に記述している。彼は時局に敏感なロシア人に驚かされる。ハルビンで昨年と変わったことといえば，盛んにヨットの修繕や新造をやっているというのである。彼らは，「この夏のシーズンにはまず間違いのないところ，日本人が威張れなくなって，われわれの存分にヨットを楽しめる世がくるんだと，その準備に怠りない」（241 頁）からである。彼らの祖国愛は強いもので，帝政ロシアであろうとソ連であろうと，ナチス・ドイツに攻められスターリングラード危うしとなれば，祖国防衛の為に多くのハルビン在住のロシア人の若者が国境を越えて祖国の防衛にはせ参じたというのである。亡命一世のロシア人が「従軍するために出発する息子たち，頑張ってくれと激励しながら，別れを惜しむ光景が，当時のハルビン駅頭でいくらも見られたという」（242 頁）のだ。逆に呑気極まりないのが日本人である。飯塚は，こんな話を紹介している。「彼らのあいだで，満洲国紙幣の価値喪失にそなえて，換物運動がさかんなことは勿論であり，キタイスカヤ街に白系露人が三人集まっていれば必ず，日系が敗れたときの善後策を話題にしているという。そして，戦況があんなだのに君たち，そんなに何一つ対策を考えず，呑気にしていていいのか，われわれには君たちの神経がわからないと，ロシア人が日本人に問いただす」（242 頁）というのである。ほぼ，同じようなことを当時ハルビンに住んでいた杉山公子も回想している。当時女学校を卒業し，満鉄ハルビン鉄道局に勤めたばかりの杉山公子は，ハルビンに忍び寄る戦争の影を次のように回想していた。「私がまだ満鉄にいた（1944 年）7 月末，鞍山にアメリカ空軍によるはじめての空襲があった。12 月こんどは，奉天が空襲をうけた。いずれも中国の基地から出撃した B29 爆撃機によるものだった。それでもハルビンは何ごともなく昭和 19 年の冬を迎えた。この冬，わたしの記憶にのこることが二つある。一つはモデルン劇場でハルビン交響楽団の定期演奏を聴いたこと。たしか指揮は朝比奈隆氏だった。ひととき，人びとは戦時色の中のハルビンを忘れることができた。もう一つは平安座で宝塚歌劇の公演をみたこと。春日野八千代一行だったが，このときは入場券を求めて雪道に数時間も並ばねばならなかった。1945（昭和 20）年を迎えたハルビンは表面的には平穏だった。鞍山，奉天には米軍機による空襲があったが，一度も敵機をみないハルビンにはそれほどの緊迫感はなかった」（杉山公子『哈爾浜物語』地久館　1985 年　186 頁）。おそらく正直な感想だろう。日本本土の空襲が始まると安全を求めて満洲へ疎開してくる家族もあったというから，満洲は安全という神話が広がっていたに相違ない。しかし，歴史の目に見えないところで，この安心神話を打ち砕く動きが静かに，そして急速に進行していたのである。

ドイツの敗北とソ連の日ソ中立条約不延長

1942 年以降になると，ハルビンを包む全満洲の平和を大きく揺るがす戦局の変化が，欧州と太平洋の両地域で起きていた。1941 年 6 月に始まった独ソ戦は，1942 年夏からドイツ軍はモスクワを攻略するも挫折，続いて 8 月スターリングラード攻略を開始したが，逆に 11 月にはソ連軍のスターリングラード反撃が開始され，これにより包囲されたドイツ軍は 1943 年 2 月に降伏に追い込まれた。さらに 1942 年 9 月北アフリカではドイツ軍が英軍に敗北，1943 年 5 月には北アフリカからドイツ軍が駆逐され，9 月にはイタリアが無条件降伏をした。そして 1944 年 6 月には連合軍がノルマンディ上陸作戦を実施し，8 月にはパリが連合軍の手で解放された。米・英・ソの連合軍は，東西からドイ

ツへの攻撃を強化していった。この間 1943 年 11 月にはカイロでチャーチル，ルーズベルト，蔣介石の三者で日本の無条件降伏を謳った「カイロ宣言」が，同じ 11 月にはチャーチル，ルーズベルト，スターリンがテヘランで会議を開き，ソ連の対日参戦を協議した。1945 年に入ると連合国側の攻勢は勢いを増し，1 月にはソ連軍はワルシャワに到達し，ドイツ国内への攻撃態勢を整備した。そして 2 月にはヤルタでローズベルト，チャーチル，スターリンが会談し，ドイツの無条件降伏，非軍事化と賠償，連合国による分割統治などが決定されたが，秘密協定では，ドイツ降伏後にはソ連が対日戦に参加すること，日露戦争後に日本が獲得した南樺太や満鉄の返還などが盛り込まれた。

他方，日本でも 1941 年 12 月のハワイ真珠湾奇襲攻撃以降半年足らずで東南アジア全域を占領したものの，1942 年 6 月のミッドウエー島沖海戦での海軍の大敗北，続く 8 月のアメリカ軍のガタルカナル島上陸とニューギニア進攻で始まった日本攻略作戦は，ニューギニアからフィリピンへ北上する陸軍と太平洋諸島を攻め上がる海軍の前に 1943 年 5 月のアリューシャン列島のアッツ島での玉砕，11 月の南洋群島タラワ・マキン島での玉砕，1944 年 6 月のサイパン島での玉砕と 6 月のマリアナ沖海戦の敗北，10 月のレイテ沖海戦での敗北，1945 年 2 月の硫黄島での玉砕が続くなかで，1945 年 3 月には，サイパン島を基地とする米軍の B29 およそ 300 機による東京空襲が実施され，以降米軍機の本土爆撃が本格化した。1945 年 2 月には前述したようにヤルタでルーズベルト，チャーチル，スターリンによるヤルタ会談が開催され，スターリンは対日参戦を約束した。4 月には関東軍からの抽出部隊を含む日本軍が防備を固めた沖縄島に米軍が上陸し民間人を巻き込んだ激戦の中で 6 月末には玉砕した。

他方，欧州戦線では 1945 年 5 月にはベルリンが陥落し，ドイツ軍は連合軍に無条件降伏をした。それに先立つ 4 月にソ連は日ソ中立条約の不延長を一方的に決定し，日本に通達した。対日戦の前触れだった。しかし日本は，それに気づかず 6 月にはソ連を当てにし，その斡旋での終戦工作を開始した。7 月には近衛文麿をモスクワに派遣する案が浮上した。しかし，7 月にはポズダムでトルーマン，チャーチル，スターリン三者による会談が持たれ，日本に無条件降伏を迫るポズダム宣言が発表された。近衛のソ連派遣に対する回答を心待ちに待っていたモスクワの日本大使が，8 月 8 日ソ連当局に呼び出され，そこで通達されたのは，近衛のモスクワ招聘ではなく日本に対して発せられた宣戦布告だった。

第 6 節　敗戦からシベリア抑留

ソ連軍の越境攻撃

ソ蒙軍がソ満国境から突然侵入したのは 1945 年 8 月 9 日午前零時のことだった。突然という言い方は正確ではない。すでにその予兆はいたるところに現れていたからだ。開戦 4 か月前の 1945 年 4 月日本のモスクワ陸軍武官室は，補佐官だった浅井勇中佐をシベリア鉄道経由で帰国させているが，浅井は，シベリア鉄道の車中いたるところで欧州戦線から極東戦線へ移送される兵員や戦車，装甲車両を乗せたおびただしい数の軍用列車の群れを目撃している（防衛庁防衛研修所戦史室編『関東軍』2　325 頁）。しかも彼はチタから満洲国入りした後の 5 月関東軍総司令部に赴きその実情を報告したが，関東軍側は，ソ連軍の兵力を浅井の 3 分の 2 程度に見積もっていた（同上）。その分，関東軍はソ連軍の増強状況を過小評価していたことになる。8 月近くになると西部，北部，東部の国境守備軍

司令官は国境に充満するソ連軍の将兵の展開を目撃して，開戦の危機間近しとする報告を関東軍参謀総長あてに打電していた。

こうした報告は，すべて無視されていた。しかし 1941 年の太平洋戦争以降主戦場は南太平洋と東南アジアの英米戦に移り，北辺の対ソ戦線は副次的となった。関東軍は，1943 年以降熾烈化した南方戦線を防衛するため次々と主力師団を南方へと抽出していった（関東軍部隊の南方戦線抽出状況に関しては拙著『関東軍とはなんであったのか』末尾付表を参照）。迫りくる緊迫した緊張状況の中で，関東軍中枢は開戦が近いという判断は共通だったが，何時戦闘が始まるか，という時期の予測には相当の幅があった。1945 年 8 月から 9 月までと読む第五課（ロシア課）と米軍の本土上陸開始後の 1946 年秋頃とする第一二課（戦争指導課）が鋭く対立した。全体的に総司令部は，ソ連軍の攻撃は早くて夏，遅ければ 1946 年春と推測していた。

一方，ソ連軍は 1945 年 6 月に対日戦略基本構想を決定したが，それによれば満洲進攻作戦の開始は 8 月 20 日から 25 日とされていた。ところがアメリカが 7 月 16 日に原爆実験に成功し，その報がソ連のスターリンに伝えられると，彼は極東ソ連軍総司令官ワシレンスキーに電話し，対日攻撃日を 10 日間繰り上げることを要請した。当初無理と回答していたワシレンスキーも 8 月 6 日に広島に原爆が投下されると，その報を受けて対日攻撃を 8 月 9 日から 10 日に実施すると変更した（中山隆志『ソ連軍侵攻と日本軍』）。日本が降伏する前に満洲へ侵攻しこの地域を占領，奪取する必要があったからである。

ソ連軍がソ満国境に集結した兵力は総勢 174 万名，砲 29,835 門，戦車・自走砲 5,250 両，航空機 5,171 機，対する関東軍は，総勢 70 万名，砲 1,000 門，戦車・自走砲 200 門，航空機 200 機（同上）であった。兵員数こそ日本 1 に対しソ連は 2.4 と 3 倍以内に収まったものの，砲は 1 対 30，戦車・自走砲，航空機はいずれも 1 対 26 とその差は隔絶していた。ソ連軍は満洲国の西正面を主戦場に，東からがそれに次ぐ戦場であり，北正面からが東西両決戦軍を支援するという作戦を展開した。

ソ連軍の満洲進攻図

ソ連軍のハルビン進駐

すでに述べたように，ソ満国境での日ソ両軍の緊張状態とその動きを知っていた日本人は，関東軍上層部の一握りの軍の上層部だけであった。否，当時の在満日本人は戦争の気配すら感じられなかったという。しかし中国人や朝鮮人，そして白系ロシア人などは，事前に日ソ両軍の戦争勃発の情報を入手してその対策をとっていた。しかし，ソ連との戦闘状態になった 8 月 9 日のその日に至ってもまだ日本人が具体的動きを見せていなかったという記述に接すると関東軍の情報統制の強さに驚愕するし，在満日本人の頭の中に刷り込まれた「無敵関東軍」の宣伝の徹底ぶりにこれまた驚く。

例えば，先に紹介した杉山公子の回想によれば，ハルビンでは戦端が開かれた 8 月 9 日の夕方から中国人は家財を大車に積み上げて，ハルビンの中国人居住地区である傅家甸へと移動を開始した。その動きは時を追って激しくなり，深夜になっても大車の騒音は絶えなかったという。白系ロシア人も商売などそっちのけでキタイスカヤを行き来する日本人を興味深げに観察していたという（杉山公子『哈爾浜物語』地久館　1985 年　189–190 頁）。しかし，日本人には対ソ戦に備える個人的動きも組織的行道も何ら見られなかった。

ソ連軍が侵攻した際，関東軍のハルビン防衛司令官は，日本人の疎開を勧告したが，宮川舩夫総領事が残留を決定したため集団的疎開は実施されなかった。しかし，浜江省の周辺地域からソ連軍に追われた避難民がハルビンへ殺到し，瞬時にその数が 8 万 8 千人に達したため，浜江省次長としてハルビンにいた田村は，救済不能状況で混乱に陥ったという（満蒙同胞援護会『満蒙終戦史』1962 年 136 頁）。崩れ出すと一気に崩れていく状況が垣間見られる。

混乱の中で 1945 年 8 月 15 日田村は，重大放送があるというのでハルビン総領事の宮川舩夫のもとを訪れ，そこで日本政府がポズダム宣言を受け入れ連合国に降伏した旨の「玉音放送」を聞いた。田村は当時を回想し，「重大放送を聞いて宮川総領事の公邸で共に手を取って男泣きに泣いた」，「自分の夢がガラガラと崩れた」（『進路』第 3 巻第 7 号　1956 年 7 月　15 頁）と述べている。外務省きってのロシア通でロシア語が堪能だった宮川は 8 月 19 日に秦彦三郎総参謀長，瀬島龍三参謀と共にジャリコーウオのソ連極東第一方面軍司令部に赴き，ソ連極東軍総司令官ワシレンスキー元帥ら軍首脳と停戦会談を行っている（防衛庁防衛研修所戦史室編『関東軍』2466 頁）。

ソ連軍に拘束される

ソ連軍は 1945 年 8 月 20 日にハルビンで関東軍の武装解除を実施し始めた。そして 22 日にはソ連軍本隊がハルビンに進駐し，満洲国政府機関の機能は停止した。9 月 7 日田村はハルビンで GPU（ゲーペーウー　国家政治保安部　ソビエト秘密警察）に逮捕され，日本憲兵隊地下室の留置所に放り込まれ，4, 5 人の白系露人と同居をしたという（『進路』第 3 巻第 7 号　1956 年 7 月　15 頁）。

進駐したソ連軍の紀律は悪く，略奪や強盗行為などが日常茶飯で，多くの日本人が被害を受けた。ソ連軍進駐下のハルビンで難民救済に当たった元満洲拓殖公社開拓部長の益満四郎は，ソ連兵に時計，万年筆を略奪され，シベリア送りの日本人「男狩り」の混乱のなかで，北満から流入する日本人避難民の激増，近づく冬の寒さと物資不足，病人の増加のなかで「栄養失調に陥ったり，下痢患者がふえて，抵抗力の弱い乳幼児の死亡が目立ってきた」と回想している（『あゝ満洲』823 頁）。

一家離散

ハルビンは混乱のさなかにあった。田村がソ連軍に逮捕された後，妻の千枝子は，子供を連れて引揚げを開始した。千枝子は 38 歳，長女美智子は 19 歳，長男の浩一郎は 16 歳だった。妻の千枝子は，生活環境が激変するなかで，病気となり，1945 年 12 月にハルビンで病死することとなる。帰国後田村が記した「引揚者在外事実調査票」（1956 年 8 月 31 日）には「田村千枝子　妻　三八歳　昭和二〇年一二月一八日死亡　死亡場所　ハルビン市」とだけ記述されている。『満蒙終戦史』の記録は，以下のように綴っている。「避難者は（ハルビン）市内 300 個所を超える収容所に入り，在住一般人約 7,300 人とともに越冬したのであったが，越冬中に凍死，疾病で難民の死亡者は約 12,000 名の多数に上り，在住日本人からも約 3,000 人を出し，合計 15,000 名の死亡者を出した」（136 頁）。いかに悲惨な状況だったかは，その死亡者の数値が物語る。

田村の子供たちは，想像を絶する厳しさの中でを 1946 年 8 月に葫蘆島から永徳丸で佐世保へ引揚げてきた。帰国後，長女の美智子は母親の実家がある東京に身を寄せ，長男の浩一郎は，一時父親の実家である京都府夜久野の田村秋夫のところに身を寄せた。「煤で顔を真っ黒にして現れました。列

車の長旅の苦労が顔に出ていました。2年ほどこちらにいて，炭焼きや畑仕事など手伝っていましたが，1950年に田村敏雄が帰国したという報を受けて東京に戻っていきました」と秋夫は当時を回想する。

中央アジアへ

他方で1945年9月初めにハルビンでソ連軍に逮捕された田村は，しばらくハルビンの収容所に留め置かれるが，1945年12月満州国政府関係者とともに一団をなしてシベリアに送られることとなる。最初は「ダモイ（帰国）」という言葉に騙されて，喜び勇んで貨物列車に乗車した。すでに北満は冬の真っただ中で，雪の嵐の極寒のなかでの列車移動であった。狭い貨車に荷物のように詰め込まれ睡眠はおろか用便もままならぬすしづめ状況での汽車移動だった。汽車は東満国境の綏芬河を通過したので，そのままウラジオストック経由で帰国するものとすべてのものが信じていた。12月13日に沿海州のグロデコヴォに到着，そこでの収容所に入れられた。グロデコヴォというのは，ソ満国境の綏芬河からソ連領に入ってすぐの町である。しかし，ここには数週間程度とどまっただけで再び貨車で旅を続けることとなる。しかし，東進して日本海に向かうと思いきや，田村たちの期待を裏切って，逆に汽車は西方へと向きを変えて，シベリアの荒野をひた走りに走り続けた。中途で車窓に海と思しき広大な水面が現れ，全員が日本海に到着したと思い歓声を上げたが，日本海ではなくシベリアを代表する湖，バイカル湖だった。琵琶湖の46倍の広さを持つアジア有数の巨大な湖を日本海と勘違いしたのも無理はない。ましてや望郷の思いに固まっていた抑留者たちがそう思うのは無理からぬ話であろう。

汽車の西行はここで止まらない。田村たちを乗せた汽車は，シベリア鉄道をさらにチタから，イルクーツク，クラスノヤルスクを経てノボシビルスクまで行き，そこから分かれて南下してカザフ共和国に達し，1945年12月中にカザフ共和国のウスチ・カメノゴルスク収容所に送られている。

ウスチ・カメノゴルスク収容所

1945年暮れに到着したウスチ・カメノゴルスクの現在名はオスケメン。ここはカザフ共和国の東端でモンゴル共和国との国境に近く，ザイサン湖から流れ出るエルティシ河とウルバ河のほとりの町である。この河は合流してオビ河となって北極海へと注ぐ。田村は，ここで1945年12月から1946年9月までの9カ月間を過ごしている。

田村は，このウスチ・カメノゴルスク収容所に収容されたときの状況を戦後のシベリア抑留手記として残している。やや長くなるが，紹介しておこう。

「1946年4月中旬，ウラルの伐採地区から，カザヒ共和国のウスチ・カメノゴルスクのラーゲリに移って間もない頃のことだ。雪のウラルから，大地の肌のあらわな土地に来てどんなにうれしかったか，ダモイ〈帰国―引用者注〉だと白系ロシア人たちから羨ましがられ，ハルピンの家族への伝言を頼まれたことが，フイになった失望はすぐにあきらめがついて，何よりも暖い土地へ来た喜びが大きかった。特に一冬中，青い野菜に全く飢えていた一同にとって，ラーゲリ内に目を出して来る雑草は，天与のたまもののように思えた。カランチン〈検疫期間で二，三週間の休暇があり，この間柵外労働がない暇なとき〉中は，誰も彼も小さなへらをもって，草の芽を掘り取って食べた。やがて営外作業

がはじまると，あかざ，あおざの類をつみとって，ゆがいて食った。小銭のある連中は，ねぎの青いのを買って来て，生のまゝかじった。あおざによく似た草を喰って中毒して，頭が変になったものも出た。とにかくビタミンCが足りぬ，ビタミンCを補いたいというような栄養学的な気持ちもあったろうが，何よりもただで，もしくは極めて安価に腹のふくれる食物として，雑草や青ねぎが大変重宝がられたわけである。収容所側では雑草を喰って中毒したものが出て以来，草をくってはいけないと厳命したが，われわれはそんな命令には一顧も与えず，依然として青草をあさった」（田村敏雄「捕虜と食物」『ソ連研究』第5巻第5号　1956年5月　40頁）。

田村は，「ウラルの伐採地区から」ウスチ・カメノゴルスク収容所へ来たこと，そして「雪のウラルから，大地の肌のあらわな土地に来てどんなにうれしかったか」，と書いていることを考えると，田村は，1945年暮れから1946年初頭にかけてウラル地域の収容所に送られ，そこにしばらく労役に服した後で，1946年春にウスチ・カメノゴルスク収容所へ来たことがわかる。したがって，ウスチ・カメノゴルスク収容所に移動した時期を1946年4月中旬と記述しているが，後の梅里助就の記述などと照合してみるともう少し早い時期ではないかと思われる。とまれ，田村は，この手記の中で「ひもじさと寒さと恋をくらぶれば恥ずかしながらひもじさが先」といった幕末の志士の獄中歌を紹介したり，食糧分配の際の兵隊の真剣なまなざしを「匙もとに一千人の眼が光り」と評したりして，食へのこだわりを語り，他の抑留者同様，田村も飢えの苦しみを味わっていたことがわかる。

同じシベリア抑留者の梅里助就もウスチ・カメノゴルスク収容所に収容されている。彼は，1946年3月にウスチ・カメノゴルスク収容所に到着し同年9月までここで過ごしている。梅里たちが収容所に着いたとき，すでに「ハルピン組と称する約五百人の一団が到着していた」（梅里助就『ソ連抑留回想』1986年　56頁）というから，それは，おそらく田村たちの一団を指すのであろう。梅里は，この収容所で，川を使って上流から運ばれてくる木材の揚陸作業を行っていて，その作業中に両股骨折の大けがをしている。ここで田村がどんな作業に従事したかは定かではないが，おそらく梅里同様，こうした材木運搬の様な労務に従事したのではないか。その後田村たちは，1946年9月から翌1947年5月まで8カ月間をウズベク共和国シーバス（Chivas）収容所で過ごしている。

フェルガナ収容所へ

田村は，1947年5月からフェルガナ収容所へ移され1948年10月まではここで抑留生活を送った。フェルガナは，ウズベクスタン東端の地域であり，天山，パミール山系に囲まれた盆地で，ウズベキスタン，タジキスタン，キルギスの3カ国が入り組んだ境界地域である。そして，ここは，かつてのシルクロードの重要拠点であり，かつ漢の時代から名馬を産した土地としても知られていた。田村はこの地に約1年半を過ごしたことになる。先に紹介した梅里もフェルガナで過ごしている。付近のアルコール工場やコルホーズに作業に行ったという（梅里　91頁）。このフェルガナで，梅里は，闘病中に「民主運動」の機関紙「日本新聞」が送られてきて，ここフェルガナでも「何人かのグループが運動を始めかけているようであった」（96頁）という。梅里は，このフェルガノの街は，「街路には石が敷きつめられ，街全体が大きな森林のようで，主にアカシヤに似た大木が，街路の上空で枝を交叉する程に繁っており，家は其の樹木の間から所々に姿を見せていた。又何条かの清流がさらさらと音をたてて流れている所もあり，日本では見られないような一種独特の風致をもつ静かな街だった。

遥か東南の方には，天山山脈であろうか，或はパミール高原の山々であろうか，雪を頂いた青い山並みが鋸の歯のように延々と連なっているのが見える」（97–98 頁）街であった。田村は何も記録を残してはいないが，彼も梅里同様にあるときは工場労働者として，またある時はコルホーズへ農作業の手伝いに行ったのではないだろうか。

中央アジアの収容所を転々

そのあとタシケント収容所に移っている。ここでの収容期間は数日間から 10 日前後とごく短く，次にウズベクのペガワード収容所に移っている。ここでは 1948 年 10 月から 2 か月ほどいて，再びタシケント収容所を経て 1948 年 12 月からアングレン収容所へ移動し，ここで 1949 年 6 月までの半年間を過ごしている。この間，例によって田村は何の記録も残してはいない。

しかし，タシケントには，現在日本人捕虜が建設したアリシェル・ナヴォイ劇場が遺されている。今でもソ連時代に建設された街路樹の軒並みが続く広い道路を抜けるとこのナヴォイ劇場に行き当たる。正面には噴水が湧き出た 3 つの大きなアーチの門を持つこのナヴォイ劇場の左側の壁にはめ込まれたレリーフには建設にまつわる一文が残されている。それによれば，この劇場は 1945 年から 1946 年にかけて極東から強制移住させられた数百名の日本人によって建設されたことが刻まれている。バレエやオペラが楽しめるこの劇場は，多くの日本人抑留者の汗と涙の結晶物なのである。この建物を一躍有名にしたのは，1966 年にタシケントを襲った地震である。多くのソ連時代の建物が倒壊するなかで，このナヴォイ劇場はびくともしなかったといわれている。むろん，田村がタシケントに来たのはこのナヴォイ劇場が完成した 2 年後のことだから彼はこの劇場の建設にはかかわってはいない。しかし，タシケントの街には，この地に命を落とした日本人戦争捕虜の墓地がある。田村の友人の何人かもこの墓地に眠っているのであろう。

田村は，タシケントのあとアングレン収容所に移動している。このアングレンには炭鉱があり，多くの日本人捕虜がここで就労していたが，ここに収容されていた村上修二によれば，アングレン収容所では，土煉瓦班，住宅建設班，運河掘削班，架橋班，鉄道敷設班，炭鉱班，石割班，パン工場班，電工班，運転手班などの班別編成になっていて，抑留者たちは様々な作業に従事していたという。土煉瓦班は，住宅の壁用の煉瓦をつくる作業だし，住宅建設班はロシア人用の住宅を建設する作業だった。石割班というのは，建築石材をとり出す砕石作業で，作業機械が導入されていたとはいえ，重労働で作業に伴う危険性は高く死亡事故を起こすこともあったという（『捕虜体験記』中央アジア 262–266 頁）。

そのあと田村は，1949 年 9 月からガラガンダ収容所に移動し，1949 年 11 月までの 2 か月間をここで過ごした。ガラガンダは，ソ連有数の埋蔵量を誇る炭田地帯であり，ガラガンダはその中心都市で，「炭都」（同上書，71 頁）であったから，田村は，炭坑関連の作業に従事したのであろう。このあと 1949 年 11 月にはナホトカに移動して，ここで 2 か月過ごした後，海路帰国の途についている。

限界の抑留生活

こうした目まぐるしいばかりの移動は，田村だけではなく，他の高級軍人や政府高官たちも同じだった。瀬島龍三なども頻繁に移動をしていた。しかし瀬島たちは，1945 年暮れから帰国する 1956

年 8 月まで，東京で開催された極東国際軍事裁判に出廷するために日本に帰還した 1946 年 9 月から 11 月までの一時期を除けば，ハバロフスクとその郊外の収容所を転々とする抑留生活を送っており，遠く中央アジアまで連行された田村らとは違っていた（瀬島龍三『瀬島龍三回想録　幾山河』290–291 頁）。この間の具体的生活に関する田村の記録はない。しかし，多くの著作や回想録が指摘するように，田村もまた黒パンと水のような薄いスープの支給で餓死の脅威と闘い，体力を消耗させながらの木材伐採や道路建設，鉄道敷設，採炭といった重労働と「作業ノルマ」の達成，シベリアや中央アジアの冬の寒気を防ぐにはあまりに粗末な衣服とシラミと蚤がまつわりついた不潔な下着，そして丸太小屋の宿舎とその中の狭い蚕棚のような数段構えのベッドのなかでの生活，そんななかでのわずかな余暇を利用した芝居，音楽会，絵画展，句会などの文化活動，といった生活を余儀なくされたことは疑いない。そうした劣悪な衣食住環境のなかで，「民主化闘争」という名の共産主義教育の嵐が吹きまくった。その時田村がいかなる対応をしたのかは定かではない。ただし，満洲国高官だった田村は，ソ連側から捕虜のリーダーとして何らかの期待をされていたことは間違いない。しかし，彼はソ連式の共産主義にはついていけずに疑問視をし続けていたことは『進路』の随想のなかで知ることが出来る。

ソ連のエージェントに

田村は，収容所に入れられていた間に 3 回ほどソ連側の尋問を受けたといわれる。NARA の田村敏雄関連資料に依れば，ソ連軍の少佐の将校が朝鮮人の通訳を同伴して尋問を行なったという。調べられたことは主に協和会関係のことで，戦犯として認めさせようとしたものと思われる。村田は協和会とは直接関係はしていないが，満洲国政府の高官としては，何らかの接触があったことは間違いあるまい。その過程で，村田はソ連のエージェントになることを強要され，エージェントに従事する誓約書に署名することを求められている。田村は，限界の抑留生活の中で，その署名が持つ意味など深く考える余裕がないままにサインし，帰国後の連絡の合言葉を確認約束させられて，帰国が確定されることとなる。

田村と同じような呼び出しを受けたシベリア抑留経験者に鈴木省五郎がいる。彼はシベリア抑留中に「民主化運動」に参加したが，帰国後ソ連のエージェントとして活動することを求められた，とある。田村と同じような状況だったと思われる。彼は，その間の事情を次のように記している。コムソモリスク近くの収容所にいたころ，午後の作業に出かけようとしていたとき，ソ連軍の中尉の将校に急に呼び出されたという。そこで帰国後に反米活動をすることを求められたという。「…中尉はゆっくり汗を拭いて，一枚の書類をとり出した。みれば，日本文で書かれた誓約書である。私はていねいに読み返し，文中，意味の通じない部分を修正し，次に肝心の私の主張する協力のための前提条件，すなわち，ソ連の日本民族の解放方針が飽くまでも日本民族の利益を主とする私の考えと一致するものならば，という文章を補足させて署名した」（鈴木省五郎『ダワイ・ヤポンスキー』創造　1976 年 161 頁）。そのあと鈴木との合言葉を決めて会見は終了したという。おそらく田村の場合も同じように誓約書に署名を求められたのではないか。そして彼は，帰国と引き換え条件でソ連に協力する誓約書に署名をしたのであろう。

第7節　帰国そして冷戦の激流のなかで

高砂丸で帰国

田村は，1950年1月にナホトカを出港し舞鶴に入港した引揚船の高砂丸で帰国した。日本を離れたのが1932年7月だからその後折にふれて帰国することはあっただろうが，本国に戻ってきて祖国の土を踏むのは18年ぶりのことだった。帰還船が日本に近づくと，あるものは船窓から，またあるものはデッキに走り出て水平線に浮かび上がる日本の山々の景色を見つめた。そして，「お伝えします，船首前面に見えますのが母国の山影です」という船内アナウンスに全員が心躍る思いだった。そんななかに田村の姿もあった。高砂丸はゆっくりと入りくんだ湾を舞鶴港に向かって進み，桟橋に横付けとなった。まず，病人が担架で運び出された。そのあとで皆はタラップを踏みしめて下船し，そのあとの検疫でDDTが吹きかけられて全身が消毒された後大浴場で大陸の垢を落とした。入浴後新たに支給された下着，衣服を着用して援護局で事務手続きをし，3日から4日引揚げ援護局の寮に泊まって事務手続きを終えると，現金800円と郷里までの旅費と2, 3日分の食料の支給を受け，舞鶴からの引揚列車で故郷へと散っていった。この高砂丸での帰国に関して，1950年1月22日付『朝日新聞』は，「高砂丸入港　今日上陸」に続いて「引揚者二千五百名を収容した本年初のソ連引揚船」だと報じていた。この引揚船では「歌わず，踊らず　高砂丸の引揚者　静かな帰還ぶり」（同紙1950年1月30日）と報じていた。そしてこの引揚船に乗船した引揚者たちは全体的に保守的で「手に胸に『日の丸』　今日全員上陸」（同紙　1950年1月23日）だったと伝えていた。というのは，1年前の1949年6月同じ高砂丸は2,000人の復員者を乗せてナホトカから舞鶴に入港したが，その時は，労働歌を歌い，隊列を組んで出迎えの肉親に挨拶もせずに仲間とともに行進する「筋金入り」の帰還者たちが多く，彼らのうち240人が帰国後そのまま日本共産党に入党した。「われわれは筋金入りのコミュニスト」と演説したことから「筋金入り」が時の流行語となった。こうした1年前の喧騒の帰還時とは一変して静かな雰囲気での帰国だったというわけである。舞鶴から田村の故郷の京都府夜久野まではさほど遠くはない。しかし，彼は郷里に寄ることもなく東京へ直行したのである。

一変していた祖国に落ち着く

田村が，舞鶴に入港する帰還船から久しぶりに眺める日本の風景はいかがなものだったか。いまは彼の心境はうかがい知れないが，一変していた祖国に驚愕の感情を抱いたに相違ない。汽車で舞鶴から東京に向かう車窓に映る景色はあまりに違っていたので，別の国に帰ったかの感を抱いたかもしれない。東海道線の沿線は，米軍の空襲で家は焼け落ち，橋は破壊され，主要な駅の周辺は焼け野原となり，わずかに駅前の闇市の雑踏だけが，復興の息吹を感じさせるだけだった。敗戦から5年が経過していたが，戦争の傷跡は日本の国土に深く刻み込まれていた。

東京に着いて最初に手掛けたのが家さがしだった。空襲で焼け野原となった東京での借家探しは困難を極めたが，やっとのことで杉並区井荻に借家を見つけ旅装を解いたのは帰国後ほどなくたってからだった。しかしこの家に住んだのも数か月足らずで，田村は中野区江古田に新しい借家を見つけてそこに移り住んだ。そして1952年7月に大蔵省財務協会に職を得たときには，渋谷区代々木山谷町に一軒家を購入して，そこに家族と住むこととなる。

田村が落ち着いた場所は渋谷区代々木山谷町101（現在の代々木1–5）。丁目や番地の変更が激し

かったなかで，この地区だけは現状のままである。代々木駅の東口を出てまっすぐ TIME24 を左に折れた坂道をそのまま行って神宮外壁にぶつかる右側の一角が代々木 1–5 である。ビルの間に比較的古い家が残っているが，そこを訪ねて田村敏雄のことを尋ねても，知る人はいない。東京オリンピック頃から住んでいるという住民が数軒残っているが，いずれも田村のことは皆知らないというのだ。時間の経過をいやというほど認識させられる瞬間である。いずれにせよ，満洲育ちの長男と長女は，ハルビンで母を亡くしたあと苦労して満洲から引揚げてきたが，やっと家族一同同じ屋根の下で過ごすことが出来るようになった。そこで田村は，再婚した。

CIC の呼び出しを受ける

田村は，日本帰国後に GHQ の CIC（参謀第二部の対敵防諜部隊）から呼び出しを受けている。田村の場合は CIC の調書がナショナルアーカイブスに残っているので，その概要を知ることが出来る。CIC から呼び出しを受けたのがいつであったかははっきりしないが，引揚げ後さほどの時間はたっていなかったと思われる。CIC の事務所に呼び出しを受け，壁の前に立って前，横から写真撮影を受けたあと，シベリア抑留時期の概要や活動状況に関して細かい尋問を受けた。NARA の田村敏雄関連文書から判断するとシベリア抑留期間中の収容所移動状況やその間に起きた事件や動きに関する事情聴取だったと思われる。

田村と同じように CIC から呼び出しを受けたシベリア抑留経験者に先にあげた鈴木省五郎がいる。彼も田村同様シベリア抑留中にソ連のエージェントになることを強要され誓約書に署名した人物の一人だった。呼び出しを受けた彼は，郷里の宮城県から上京し東京の郵船ビル 5 階の大会議室に呼び出されたという。そこには 100 人近いシベリア帰りの軍人，軍属，民間人が集められ，尋問を受けていたという。尋問の内容は，彼の 3 年間のシベリア暮らし，収容所での概況説明や収容所があった街の概況，さらにはそこにあった建物の大きさなど細かい質問も含まれていた。そして尋問は 3 日に及んだという（前掲『ダウイ・ヤポンスキー』（280–287 頁）。

大蔵財政協会に就職

帰国後の緊急課題は職探しであった。満洲から無一物で引揚げてきた田村にたくわえがあるわけではなく，また強力なツテがあった訳ではない。頼むとすれば，かつての古巣の大蔵省しかない。彼は大蔵省同期の山際正道が日本輸出入銀行の専務理事であることを知り，面談を乞うと，「同期の池田勇人が大蔵大臣だから池田に頼んでみろ」とのアドバイスを受けた。後日池田に連絡すると「大蔵省財務協会」の理事長ではどうか，という返事が届いた。池田の強力な推薦で，田村は 1952 年 7 月大蔵財務協会に理事長として就職する。今でこそ大蔵財務協会といえば出版，公益事業などを通じて日本の経済発展，租税教育活動を行うことを目的とする大蔵省の有力な外郭団体の一つであるが，田村が理事長に就任した 1952 年ころは，さほど制度的に整備されていたわけではなく，大蔵省の共済活動などを担当する一組織で，多くは本庁の課長クラスのスタッフが理事長を兼任していた。しかしシベリアから帰国後に何の手ずるもない彼にとって，このポストは，定収を確保できたという意味で，まずは一安心できることとなったのである。

当時の大蔵財務協会は，週刊紙で「税のしるべ」「国税速報」を，月刊誌『ファイナンス』を発行

していた。田村は，その総責任者として，理事長の地位についたのである。つまり当時の理事長は，定期発行機関誌の編集長といったポストだった。

ソ連側との接触

田村は，帰国後は東京に居を構え，最初は杉並区井萩，それからほどなくして中野区江古田，そして渋谷区代々木に居を変えたことは前述した。これを前後してソ連側の接触が始まるNIRAの田村敏雄関連文書によれば，1951年4月にコーカサス人2名が中野区江古田の自宅を訪問し，その後はソ連大使館二等書記官のラストボロフが直接田村に接触してきたという。田村はラストボロフから入手情報の指示を受け，その後田村が集めた日本側の情報をラストボロフに手渡した。毎月第三木曜日が接触日だったという。ラストボロフとは1951年4月から9月までは帝国劇場前の路上で，1951年10月から1952年11月までは信濃町駅前の路上や新宿の日活劇場付近で，1952年12月から1953年2月までは千代田区の三菱ビル付近の路上で接触，情報を提供すると同時に次回までに提供すべき情報の種類などの指示を受けた。1951年10月から1952年11月まで毎月平均2万円，合計26万円の報酬を受けていた。多くは路上での接触で，田村が狸穴のソ連代表部で指示を受けたのは僅かに2回に過ぎなかった。そのうち1回は，田村が富士山ろくに小コミュニティ風の国際問題研究所をつくる予定で50万円を3か月以内に返却する予定で借用するためだった。

ソ連側は，田村に大蔵省や財界関係の情報の提供を求めた。田村は，大蔵財務協会で得た情報を提供し，政府要人の名をあげて提供情報の重要性を強調した。また時には新聞情報を重要情報だと強調して彼に手渡した。ソ連側は，しばらくして田村の提供資料が機密価値のないことに気づき1953年2月ころに田村との接触を断った。

ラストボロフ事件

田村と接触していたソ連大使館のラストボロフが失踪事件を引き起こし，「ラストボロフ事件」としてマスコミの注目を浴びたのは，田村とラストボロフの関係が切れた1年後の1954年1月のことだった。事件の発端は，彼が突然東京から姿を消したのである。1954年1月28日の「朝日新聞」は，三面下段にラストボロフの写真を掲げ，「元在日ソ連代表部書記官，姿消す」と題して彼の失踪を報じた。新聞報道によれば，1月27日に麻布狸穴にあったソ連代表部のザベリエフが警視庁防犯部を訪ね，ジュリー・A・ラストボロフの捜索願を出したことを報じた。捜索願によれば，ラストボロフは，1月24日夕刻から行方不明となり，消息がつかめないというのである。ラストボロフは，最近神経衰弱気味で，自殺の恐れがあるとのことであったが，政治亡命の可能性もあるという見方で捜索を開始したことを報じていた。

警視庁は，このラストボロフ失踪事件に関して，①捜索願通りラストボロフは神経衰弱で失踪した，②ソ連内で副首相兼内相として権力をふるっていたラヴェンスキー・ベリアの失脚にともない彼も処分される危険性を察して政治亡命した，③ラストボロフは以前から米軍情報機関と接触しており，それをソ連情報機関に追及されるのを恐れて米情報機関に身柄を預けた，という三つのシナリオを想定している，と新聞記事は報じていた。

その後の動向は，ようとして行方知れずであったが，同年8月に彼はアメリカのワシントンで記者

会見を行い，アメリカに亡命したことを明らかにした。同年 8 月 14 日の「朝日新聞」が突如「ラストボルフ事件の真相　外務省・公安調査庁共同発表」なる記事を掲載した。その中身は，失踪したといわれたソ連大使館のラストボロフ二等書記官は，実はソ連軍の陸軍中佐で，日本で情報任務にあたっていた。しかし，1 月 24 日自発的に米当局に保護を求めてきた。米当局は 1 月 26 日同人を米軍用機で海外に連れ去った。この点は，27 日に米側から日本側に連絡があった。この件と関連して若干の日本人が自首してきたが，その中には政府高官はいない。これが新聞発表だった。アメリカはラストボロフの政治亡命を承認すると同時に同氏の出国に関して日本政府と事前に協議しなかったことに関して日本政府に遺憾の意を表明した。そして記者団との間で以下のような質疑が交わされた。

田村と関連するところを抜粋すれば以下の通りであった。(「記」とは記者団,「ラ」とはラストボロフ)

(記) 問―情報はどこからとっていたか
(ラ) 答―日本政府を含む各種団体の人々からだ。日本の新聞を読んで判断したことも多い
(記) 問―政府というのは官吏か
(ラ) 答―そうだ
(記) 問―どういう官吏か
(ラ) 答―余り高級とは言えない。中級といっておこう
(記) 問―日本共産党とは連絡取っていたか
(ラ) 答―とっていなかった(「朝日新聞」1954 年 8 月 14 日)

ラストボロフは，情報提供者としては官吏だが,「余り高級とは言えない。中級といっておこう」と述べているが，彼等のなかに田村がいたことは間違いない。彼は，この一件で米軍と日本の警視庁から取り調べを受けており，その記録の一部は，NIRA の田村敏雄関連文書のなかに残されている。しかし，この事件では自殺者も出ている。

8 月 28 日に元外務省事務官だった日暮信則が取り調べ中の東京地検の 4 階の窓から飛び降り自殺を遂げたのである。彼の友人や妻は自殺の動機は不明，というコメントを残しているが(「朝日新聞」1954 年 8 月 29 日)，地検の見解は「二重スパイの疑い」(同上紙) をかけていたという。

田村も取り調べのなかで，シベリア抑留中にスパイを強要された事実を語っていた。

ラストボロフ事件と日本人エージュント

先の NIRA の田村敏雄関連文書によれば，1954 年 8 月 14 日に警視庁幹部による尋問を受けたという記述が残されている。ラストボロフ事件が表面化したのが，まさに 8 月 14 日であるから彼はその当日に警視庁の尋問を受けたわけである。尋問の内容は定かではないが，CIC で尋問を受けた際の質問事項とほぼ同じ質問内容が訊かれたという。

先にあげた鈴木省五郎の場合には，ラストボロフが日本から失踪した 1954 年 1 月 24 日にラストボロフとおぼしき人物と神宮外苑映画館前で待ち合わせる予定だったと述べている。ところが，待ち合わせ時間になっても彼が現れず約束をすっぽかされたというのである。そして 1 月 27 日になって

鈴木は自分と会う予定だった人物がラストボロフであり，彼がその日に行方不明となったという事実を知ったというのである（『ダウイ・ヤポンスキー』288–290 頁）。鈴木も田村と同じように警視庁から尋問を受けたことが想定できる。

ラストボロフが接触したシベリア帰還組には元関東軍参謀だった志位正二がいる。敗戦時に少佐で関東軍参謀だった彼は，その後シベリアに抑留され，ソ連のエージェントになることを強要され承諾して帰国している。ここまでは鈴木や田村とほぼ同じ軌跡をたどっているので，繰り返すことは避ける。帰国後の行動は，先に紹介した二人とはやや異なる。『週刊読売』（1954 年 9 月 12 日号）の彼の手記によれば，志位は，1948 年 10 月に帰国した後，翌 1949 年 2 月から GHQ に勤務し引揚者からの情報収集に従事する。朝鮮戦争勃発後の 1951 年 9 月にソ連側からの接触が開始され，日本の政治情報，特に再軍備情報の収集を命じられ，1 か月に 1 回程度の頻度でソ連代表部員にメモを渡したという。1953 年 2 月彼は GHQ を解雇されている。米軍機関に勤務中ひそかに上司の写真撮影を受けていたというから，ソ連機関との接触を疑われていたのであろう。その後ソ連側との接触を続けながら 1953 年 11 月から彼は外務省アジア局調査員となる。ラストボロフ失踪が報じられたのは翌 1954 年 1 月のことで，このとき彼は自分と接触していたソ連側の人物がラストボロフだということを知ったという。志位は，この事件の直後にソ連側の怪人物から自殺せよという脅迫を受けるが，その後警視庁に出頭，保護を受けている。

第 8 節　宏池会事務局長と高度成長政策立案

『進路』の発刊

ラストボロフ事件との関わり合いで，田村が大蔵財政協会の理事長を辞任したのは 1954 年 2 月のことだった。すでに朝鮮特需の好景気も休戦と共に過ぎ去り，不況の風が日本中に吹いていた。この年 58 歳で老境の域に近づいていた田村に就職の機会がそう多いはずはなかった。このとき田村に出来ることといえば，大蔵財政協会時代の経験を活かして出版事業に乗り出すことくらいだった。

こうして自宅を事務所に雑誌『進路』の発刊を始めたのは 1954 年 5 月のことだった。ラストボロフ事件が起きた半年後，田村がこの件で警視庁高官から尋問される 3 か月前のことである。

発刊の動機は，「日本は一体どうなるのだろう？こういう心配をしている国民は少ないと思う。日本は何処へ？ということは実は自分はどうなる？ということであり，同時に，一方で世界は何処へ？という問題と興味につながっているのである。……世界につながる日本，日本に固く結びついている『われ』このわれは如何に進むべきか。その進路の発見と着実なる前進とは現代青年の自ら解くべき課題でなければならない」。これは田村敏雄が本誌発刊の辞で述べている言葉である。

やっと田村にも戦前からの悪夢を払拭して，新しい戦後の世界に生きる覚悟と喜びが生まれてきたことがわかる。そのなかで，彼は日本の歩むべき道の模索が始まったというべきであろう。『進路』というタイトルは，日本国民が歩むべき進路を見出したいという本誌発行の意図が示されている。定価は 30 円。送料は 4 円。総頁数は 30〜40 頁。当時ビール 1 瓶が 107 円，入浴料が 15 円の時代である。入浴料 2 回分といえば高くはないが，食うのが精いっぱいで，教養は二の次といった時代であれば，安かったとは言えない。しかし，出版業を始める田村にとって朝鮮特需の終焉で絞りかけていた不況風がこの時期わずかながら回復の兆しを見せ始めていたというのが救いといえば救いだった。

田村にとって，雑誌発行は，生活していくための糧だからそれこそ随筆のテーマは，教育，食糧，健康から国際情勢まで広範な範囲に及んだ。「白昼夢」と題する随筆の連載（『進路』1954 年 10 月から 1955 年 1 月）では，夢を語る，というタイトルで「健康国家」「教育国家」の夢を描いていた。これは，田村の満洲国時代からの「夢」で，そんな国家を満洲国で作りたいと願っていたのである。戦後スタートするにあたって，日本でそんな夢を実現したいという想いが『進路』発刊に垣間見られる。

何時の時代でもそうだろうが，雑誌発行で生計を立てるというのは，かなり厳しい生業だったことは間違いあるまい。『進路』が毎月何部配布されたのかは定かではないが，旧満洲国時代の友人や旧大蔵省関係の知人を執筆陣に依頼してかろうじて経営を維持していたというのが実態ではなかったか。

深まる池田との関係

そんななかで池田との関係が深まる。池田との再会は，田村が舞鶴についた直後の新聞で池田勇人が大蔵大臣に就任していると読んで，かつて大蔵省の同僚だった池田が吉田内閣の大蔵大臣に就任していることを知る。田村は，かつての大蔵省同期入省の山際正道（後の日銀総裁）に連絡すると池田に会いに行けと言われ，池田を信濃町の池田邸を訪問したというのである（木村貢『総理の品格』25 頁）。それがいつだったかははっきりしないが，『進路』の第 4 巻第 3 号（1957 年 3 月）に初めて池田が 1957 年 1 月日比谷公会堂でおこなった講演「千億減税と完全雇用」が掲載されることから推察すると，1956 年秋から暮れのことではなかったか。当時，池田は第一次岸内閣の大蔵大臣だった。日比谷公会堂での講演内容は，速記をおこしたもので，生活の安定と完全雇用を実現するためには減税と社会保障が不可欠だと強調していた。池田は，この講演の中で，「私は嘘は申しません（拍手）」とあるから，早くもこの段階で，「私は嘘は申しません」という彼のキャッチフレーズが生まれていたことになる。池田は，引き続き第 4 巻第 4 号（1957 年 4 月）にも「私はこう考える」というタイトルで池田勇人の「インフレ問題」「物価問題」「財政規模」「景気の見通し」に関する国会答弁内容を掲載している。この段階で，『進路』は，それまでの総合月刊雑誌から池田の個人機関誌的色彩を濃厚にし始めたのである。

宏池会の発足

池田勇人を中心とした政策勉強会である宏池会の誕生は，1957 年 11 月にさかのぼる。1957 年 7 月に岸総理は内閣改造を実施し，外相に日本商工会議所会頭の藤山愛一郎を，郵政大臣に田中角栄を，大蔵大臣には池田勇人に代えて「法王」と称された金融界の実力者で日銀総裁の一万田尚登を就任させた。池田が閣外に出たこの年の 11 月に池田派の宏池会は結成されている。すでに『進路』を通じてしばしば池田に接触してきた田村は，直接池田から勉強会の組織化と会の事務局長就任を依頼された。このころから池田は，ポスト岸の総裁の座を意識し始め，その準備の一環として政策立案を支援する政策勉強会の必要性を感じていたのである。

依頼を受けた田村は早速準備に着手するが，まず問題になったのは会の名称である。田村は，池田と親しい大平正芳，桜田武と語らって池田派の面々が集まる新橋の割烹旅館の栄屋に陽明学者であり，思想家でもあった安岡正篤を招き意見を聞いた。その席で，安岡は，後漢の碩学である馬融の「高光のうてなに休息して宏地に臨む」から「宏池会」と命名したという。池田の池という字が一字入っ

ているように，池田勇人を総理にするための勉強会だった。本部は，アメリカ大使館に近い溜池の日本自転車会館ビルに置かれた（木村貢『総理の品格』23–24 頁）。

『進路』の変身

『進路』が池田を中心とした政策集団である宏池会の機関誌となるのは 1957 年 10 月の第 4 巻第 10 号からである。編集発行人が田村敏雄であることは以前と変わりはないが，発行所は宏池会に変わった。田村は「宏池会機関誌としての出発を記念して体裁を改め増頁致しました。次号から従来通り六四頁の予定です。編集方針には変更在りません」と述べているが，たしかに編集者は田村で変わりはないが，田村が宏池会の事務局長となったのだから，雑誌の性格が大きく変わったことは疑いない。

まず，池田の登場回数が急激に増加する。ほぼ毎号といってよいほどである。池田が『進路』に登場する号とタイトルと簡単な内容を記したものを一覧表にしてみたが，1957 年 11 月の宏池会発足以降『進路』が同会機関誌となったことが改めて確認できる。それは池田の登場回数に端的にあらわれている。宏池会の機関誌となる 1957 年 10 月以前は，池田は 4 回しか登場していない。ところが宏池会の機関誌となった 1957 年 10 月以降田村の死でこの機関誌が発刊を停止する 1963 年 9 月までに池田が登場した回数は，実に 32 回に及び，ほぼ毎月何らかの形で池田は誌面に登場していた。

変化は内容面にも表れている。内容もこれまでの池田の講演概要や国会答弁内容の紹介といった軽度のものから，次第に池田の政策内容の紹介や政策発表の場といった重度なものへと変わり始めている。1958 年 3 月の「日本経済の基調をどう見るか」では，国際収支に注目し，国際収支の黒字基調を背景に国内需給の供給力を推進力として成長を実現すべしという主張を明示する。1958 年 5 月の「景気問題所見」になると当面景気低迷はあるが，日本経済は病弱体ではないこと，経済拡大成長の要因が充実していること，これらを勘案すれば，「健全なる積極策と減税」（18–19 頁）が重要だと強調していた。1959 年 4 月には「私の『月給二倍論』再論」と翌 5 月には「私の『成長論』と『月給二倍論』の根拠」を発表する。「私の『月給二倍論』再論」は，「日本経済新聞」の 1959 年 3 月 9 日発表の「月給二倍論」が不十分だったので，再論するというものだが，いずれも日本経済の基調は強化されているので，加熱論は根拠が薄く，国際収支の黒字は確実なので，金利を下げて成長政策を進めれば，インフレになることなく「月給二倍」は実現出来るというものであった。この池田の「月給二倍論」は，同年 1 月 3 日の「読売新聞」の中山伊知郎の「賃金二倍を提唱」からヒントを得ていた（塩口喜乙『聞書　池田勇人』1975 年　188 頁）という。中山の主張は，チェコスロバキアの中央計画庁を訪問した際の話から始まる。そこでの問題は，戦後復興が基本的に終了した後，何を課題に長期計画を立てるかにあるというのだ。考えてみれば日本もほぼ同じ時期に戦後復興を終了している。経済企画庁が「もはや戦後ではない」と日本経済の技術革新を強調したのは 1956 年 7 月の経済白書『日本経済の成長と近代化』においてであった。中山は言う。福祉国家実現が今後の目標となるが，問題はその実現の手段である。そこで，「賃金二倍の経済」を提唱するのである。今後，賃金は上昇するだろうが，であるとすればあらかじめこれを目標に計画を立てるべきだし，それは「生産を伸ばせば夢ではない」という主張だった。池田はこれを読んで，「月給二倍論」を主張し始めたというのである。

確かにこれ以降，池田は毎号の中で成長と所得倍増の主張を展開し続けるのである。そして 1959

年 11 月には「日本経済の進路―世界と共に繁栄へ」の中では，英文季刊誌「ジャパン」1959 年秋季号への寄稿論文の原文を掲載し，「日本経済の現況」「日本経済発展の要因と条件」「戦後日本の歴史的自覚」「日本経済の進路」を述べ，最後の「日本経済の進路」では，日本は世界の平和，国際的自由交流の維持，拡大により存続できることをあげ，今後の日本の経済発展は極めて明るい（11 頁），と述べていた。

図表　『進路』の池田勇人登場号数とタイトル

「他山の石―2 大政党論に寄せて」第 2 巻第 10 号　1955 年 10 月
「統一と合同―現実化した 2 大政党」第 2 巻第 11 号　1955 年 11 月
「家庭料理のうまいわけ」第 4 巻第 1 号　1957 年 1 月
「千億減税と完全雇用」第 4 巻第 3 号　1957 年 3 月
「財政について」第 4 巻第 10 号　1957 年 10 月
「池田勇人大いに語る」対談　第 4 巻第 11 号　1957 年 11 月
「金融について」第 4 巻第 12 号　1957 年 12 月
「昭和三十二年の経済を顧みて」第 5 巻第 1 号　1958 年 1 月
「日本経済の基調をどう見るか」第 5 巻第 3 号　1958 年 3 月
「次期総裁論」花見達三　臨時増刊号　1958 年 4 月
「景気問題所見」第 5 巻第 5 号　1958 年 5 月
「選挙と選挙演説」第 5 巻第 6 号　1958 年 6 月
「景気演説」第 5 巻第 8 号　1958 年 8 月
「池田勇人氏は語る　民主政権の在り方について」第 6 巻第 2 号　1959 年 2 月
「国民の力を伸ばせ―政権のねらいとあり方について」第 6 巻第 3 号　1959 年 3 月
「私の『月給 2 倍論』再論」第 6 巻第 4 号　1959 年 4 月
「私の『成長論』と『月給 2 倍論』の根拠」第 6 巻第 5 号　1959 年 5 月
「政治のねらいは国民生産の向上である」第 6 巻第 7 号　1959 年 7 月
「入閣は政局の混迷打破」矢田貞二と対談　第 6 巻第 8 号　1959 年 8 月
「月給 2 倍論と日本経済の将来」第 6 巻第 9 号　1959 年 9 月
「日本経済の進路―世界と共に繁栄へ」第 6 巻第 11 号　1959 年 11 月
「世界平和共栄主義」第 6 巻第 12 号
「還暦を迎えて」特別増刊　池田勇人還暦祝賀号　1959 年 12 月
「年頭に思う」第 7 巻第 1 号　1960 年 1 月
「日本政治の課題」対談　第 7 巻第 2 号　1960 年 2 月
　＊第 7 巻第 3 号から調査部の調査レポートが掲載され始める
「日本経済の将来」第 7 巻第 7 号　1960 年 7 月
「所信を述べて国民の皆様に訴える」第 7 巻第 8 号　1960 年 8 月
「政治の姿を正す」特別増刊　正姿勢の池田内閣　1960 年 10 月
「青年に語る」第 7 巻第 11 号　1960 年 11 月
「農業基本法の根本精神について」第 8 巻第 5 号　1961 年 5 月
「真の意味での大国になろう」第 9 巻第 1 号　1962 年 1 月
「池田総理に聞く　経済十問」第 9 巻第 7 号　1962 年 7 月「」
「池田総理訪欧報告」臨時増刊号　1962 年 12 月
「経済成長の目標とその歴史的意義」第 10 巻第 1 号　1963 年 1 月
「弔辞」第 10 巻第 7 号　1963 年 9 月

出典：『進路』各号目次より作成。

下村治との邂逅

田村が主宰する『進路』に池田が頻繁に登場する背後には，池田が主張する経済政策の理論的支援集団が池田の周りに形成され始めたことを意味する。そして，その組織的中核が田村であったとすれば，その理論的中心人物は下村治だった。田村は宏池会の勉強会に大蔵官僚だった下村治を呼び込んだのである。

田村と下村の出会いを当事者の下村は『進路』のなかで次のように回想している。

「わたくしがはじめて田村さんに会ったのは昭和二十七,八年頃ではなかったか，と思う。当時わたくしは健康を害して大蔵省の調査部で専門調査官として不完全な勤務をしていた頃である」。あとで詳しく説明するようにその頃，下村は，大蔵省代表日銀政策委員として，当時大蔵省で外国財政調査を実施していた香川鉄蔵の肝いりで定期的に若い連中が集まって懇談会のような会合を下村の部屋で行っていた。そんな時満洲国での大同学院時代の香川の友人として田村は紹介され，この会に参加した。前述したように田村は，満洲国時代に大同学院で教鞭をとっており，香川はその時の同僚だったのである。そうした関係で田村は下村の研究会に参加したわけである（『進路』第10巻第7号　1963年9月 1963年9月　14–16頁）。つまり，田村，下村の両者は，田村の満洲時代の友人の香川鉄蔵の紹介で知り合ったというのである。

下村の回想によれば，その後，田村から「経済問題に関する一般的，総合的な研究会をもちたいという相談を受けたのは昭和33年（1958年―引用者）の夏頃，池田総理が当時の内閣を去られ，通産大臣に復帰される前だったように思う。後に世間で七人のサムライなどといわれるようになった人々の会合が，田村さんのこのような企画によって始まったのである」（『進路』第10巻第7号　1963年9月　16頁）と述べていた。

前述したように池田は1957年7月に第一次岸内閣の内閣改造時に大蔵大臣のポストを一万田尚登に譲って閣外に去り1959年6月には第二次岸内閣の内閣改造時に高崎達之助の後の通産大臣に就任している。宏池会の発足は1957年11月だから，下村の記憶には少しズレがあるように思われる。宏池会の発足と同時に事務局長に就任した田村は，下村たちを巻き込んで高度成長に関する研究会を立ち上げることとなる。田村は宏池会の事務所に池田のブレーンたちを集めて研究会を開催し，そこに池田も顔を出したというわけである。

香川鉄蔵と田村敏雄の共同研究会

ところで，下村治は，香川と田村の交流を『香川鉄蔵』のなかで次のように述べている。やや長いがこの当時の状況を具体的に述べているので，そのまま引用することとしよう。

「大蔵省が四谷の仮庁舎から虎ノ門に引っ越したころ，わたくしは日銀政策委員をしていた。三階のエレベーターホールのすぐ横の大きな部屋を一つもらってそこに一人で入っていた。部屋の片隅に事務机があり，その横に応接セットがあるだけの，がらんとした部屋であった。

わたくしは，まだ，毎日は出勤していなかったかも知れないが，週に二日，政策委員会のある日に日銀に出向く以外は，この部屋でボンヤリしていたものである。

そういうわたくしの部屋に，香川さんはチョクチョク顔を見せられた。時々大きな風呂敷包などを抱えてきて，何分でも，何時間でも，話込んでゆくのである。

そのうち，こんな部屋を遊ばせておくのはもったいないということになったのかも知れない。香川さんのきもいりで，この部屋が若い人達の定期的な集会所になったのは，それからしばらくたったころからである。何曜日であったかは，忘れてしまったが，昼間の時間に，香川さんのお弟子さん達が集まってきて，勝手に議論することになったわけである。……この会合では，香川さんはほとんど発言されなかったようである。若い人達の発言にまかせて，黙って傍聴するという風であった。」（『香

川鉄蔵』340–341 頁）

「そのうち，いつごろからか，田村敏雄さんがこの会合に顔を見せるようになった。田村さんは，当時，宏池会の事務の責任者ということであった。かつて，満洲国の要職におられた田村さんは，建国大学時代の香川さんと親交があったという因縁で，香川さんが口をかけられたようであった。

田村さんは，大変活発に議論に参加された。時には，もっぱら田村さんが話題を提供して話をはずませるという風であった。

資本主義経済が，いかに不況を克服することができるか，資本主義の経済が，いかに成長の中で国民生活水準の向上を実現できるか，そのような問題に対するケインジアン的な解答が，強く田村さんを印象づけたようである。後でしったことであるが，田村さんはマルクス経済学の大家であったらしい。おそらく，そのことが，一層，失業のない経済，不況のない経済の可能性に関するケインジアン的証明に田村さんが強い印象をうけられた理由であったかもしれない」

「後から考えると，田村さんは，その頃，すでに池田勇人さんを総理大臣にするつもりで働いておられたらしい。しばらくたってから，わたくしは，田村さんから池田さんの勉強会を持ちたいので，それに参加してほしいという申し出をうけた。別に自信はなかったけれども，承諾することにした。

第 1 回の会合が持たれたのは，昭和 33 年 7 月 10 日である。赤坂プリンスホテル旧館二階の一室であった。集まったのは池田さん，田村さんのほかは，星野直樹，高橋亀吉，櫛田光男，平田敬一郎の皆さんと，私だったと記憶する。やがて，伊原隆さんや稲葉秀三さんが加わって，後に，ジャーナリズムなどで『七人のサムライ』などと呼ばれた顔振れが出来上がったのである。」（同上，342 頁）

「池田さんの『月給二倍論』は，おそらくこの会合における討論と無関係ではなかったのではないかと思う。すくなくとも，池田さんの『所得倍増政策』が，この会合の中から生まれたものであることは，事実である。池田さんの考え方を支えたバックデータは，この会合のためにわれわれが作成したものであることは，まちがいない」（同上　343 頁）

「池田さんの所得倍増政策が，日本経済の運命に大きな建設的な貢献をしたことを，わたくしは疑わない。そして，わたくしがその制作誕生の過程で内面的に関係できたことは，またとない幸運であったと思う。

このような幸運は，しかし，田村さんとの出会いがなかったならば，ありえなかったことだし，その出会いは，香川さんの仲立ちがなかったら，おこりえなかったにちがいない。大げさに言えば，香川鉄蔵という人物が，大蔵省に関係していなかったならば，日本には所得倍増政策を押し立てて邁進する総理大臣は生まれなかったかもしれないのである」（『香川鉄蔵』343 頁）

所得倍増計画

池田勇人の所得倍増論は，田村が組織した宏池会の勉強会の中から生まれ，宏池会の機関誌『進路』を通じて世に流布されていった。池田の秘書であった伊藤昌也は，『池田勇人　その生と死』のなかで，池田の高度成長理論は，宏池会の研究会で深められ，その勉強会で「財政家としての池田の勘と下村の理論とが，がっちりとからみあった」（60 頁）と述べている。伊藤昌哉は，「池田の月給二倍論の核心は田村を介して導入された下村の成長論で，これが所得倍増計画の根底となった」（伊藤昌哉『池田勇人』148 頁）とも述べている。

その研究会を組織したのが田村だった。研究会の名称は土曜研究会と称され，毎土曜日ごとに宏池会の事務局があった短波放送協会が入居していた日本自転車協会ビルの五階の会議室で開始された。当時の模様を池田の秘書から宏池会事務局に入り田村の後に同事務局長を務めた木村貢は次のように回想している。

研究会は「メンバーは多少の出入りはあったものの，おもな人たちは下村治（国民金融公庫理事，開発銀行設備投資研究所長などを歴任したエコノミスト），星野直樹（元満洲国国務長官），高橋亀吉（在野のエコノミスト），稲葉秀三（エコノミスト，後に産経新聞社長），平田敬一郎（日本開発銀行総裁），井原隆（大蔵省理財局長），櫛田光男（不動産研究部長）のいわゆる『七人の侍』のほか，神谷克己（東北福祉大学名誉教授），あるいは東淳，円谷秀男といった大蔵省の若手官僚たちであった。経済政策に関しては一家言ある人たちをそろえていた」（『総理の品格』40 頁）。

ここで，満洲国国務長官だった星野直樹が登場することに留意したい。星野は，前述したように田村敏雄らを率いて 1932 年 7 月渡満し，満洲国の総務長官として日系官吏の頂点に立って主に財政面での制度作りの中心人物となり，1936 年から渡満した岸信介らとともに満洲の工業建設を推進した。田村にとっては，満洲国時代の上司だった。星野は，その後 1940 年 7 月には第二次近衛内閣の国務長官として満洲を離れ，続く東條内閣の書記官長をつとめ，敗戦とともに A 級戦犯として終身禁固刑で巣鴨刑務所に服役した。星野が田村の誘いで研究会に参加したのは 1958 年に釈放された後のことだった。

高橋亀吉が参加していたというのも興味深い。高橋亀吉といえば大正期後半の 1920 年代から昭和の 1970 年代まで 50 余年にわたって日本経済に関する論評活動を継続した在野の経済研究者である。早稲田大学卒。石橋湛山に近く，彼の積極財政を支持してきた高橋は，1950 年代中葉からの日本経済の復興と設備投資の拡大は，過剰設備をもたらすものではなく，国際競争力，経済成長の基盤となるという発想を強く抱き（鳥羽欽一郎『エコノミスト高橋亀吉　生涯現役』東洋経済新報社　1992 年　292–294 頁），設備投資推進策を強力に主張した。これは下村治と同意見であり，日本経済に対する共通の認識を共有していた。高橋もまた田村が組織した研究会の一員となったのである。

田村は，こうした研究会の成果を絶えず池田に報告していた。田村は，信濃町の池田邸に日参し，研究会の動向を報告していた。「田村の池田邸詣で」と称された年中行事である。池田の妻の満枝によれば，ほぼ毎日のように田村は池田邸に通っていたようだ。満枝は言う。「田村さんはいろいろと本を読むんです。池田は朝，お客さんに会うのが忙しいものだから，夜，池田がゆっくりしているときにいらして，いっしょに食事しながら，こういう本にはこう書いてる，外国にはこういうケースがある，と耳学問してくれるんです」（塩口喜乙『聞書　池田勇人』191 頁）。いわば，田村が池田の政策立案や判断の基礎素材を提供していたことになる。

ところで，『進路』に池田の月給二倍論が登場するのは 1959 年 4 月のことである。池田の名前で，「私の『月給二倍論』再論」が掲載された。これは「日本経済新聞」3 月 9 日の記事が不十分なので再論する目的で掲載されたものであった。池田は，ここで日本経済の基調は整った。伸びる力が抑えられている。国際収支の赤字を気にするのは取越し苦労である。成長を続けてもインフレにはならない。正しい政策のリードがあれば月給は二倍，三倍になる，という論旨である。池田は，「月給二倍論」はサラリーマンを対象とした表現で農民や中小企業者を外した表現ととられかねないので，「所

得二倍論」，さらには「所得倍増論」へと表現を変えていく。

下村治

ここで，田村と協力して池田の高度成長政策を支えた理論家の下村治の経歴を簡単に紹介しておくこととしよう。下村は，1910 年父利禰，母ヒサの次男として佐賀県に生まれている。父親が海軍軍人だった関係で海軍兵学校を目指すが，健康面での問題からそれを断念し，佐賀中学から佐賀高校，そして 1930 年には東京帝国大学経済学部経済学科に入学している。当時の日本では，マルクス主義経済学全盛の時代で，近代経済学は傍流で，大学で下村を満足させるような講義はすくなかったという。下村は，満たされぬ気持を残しつつも在学中の 1933 年に高文に合格し，1934 年に大蔵省に入省した。そして 1936 年にアメリカに駐在し翌 1937 年に帰国している。その後彼は大蔵省にあって調査畑を歩むなかで敗戦をむかえている。

戦後はインフレ調査を中心に調査活動を展開し，1946 年 8 月に物価庁が設置されると同庁調査課長に，続いて 1947 年 5 月に戦後経済復興の司令塔として経済安定本部が設けられると同本部の物価政策課長に就任している。下村は 1948 年に結核にかかり病床に伏した。病床にありながら，彼は学位論文『経済変動の乗数分析』（1952 年）をまとめている。その後，1950 年から病状の好転に伴い大蔵省調査部専門調査官として徐々に業務に復帰し，『金融財政事情』に論文を発表し始めている。彼は，日本経済分析から始めて次第に日本の高度成長論へと研究を進めている。その成果は，田村が主宰する宏池会が出版した『経済成長実現のために』（1958 年）や，『金融財政事情』1959 年 2 月 16 日と 2 月 22 日の二度にわたって連載された「日本経済の基調とその成長力」になって表れ，所得倍増政策として結実していくこととなる。

『経済成長実現のために』（1958 年）

宏池会内に田村が組織したいくつかの研究会の一つに木曜会があった。毎週木曜日に開催されたからである。この研究会での「論争はいつも下村治が中心であった。下村は，ケインズ，ハロッドらの近代経済学につき日本で最も先駆的な研究を進めていてその理論的な分析は定評があった。研究会の論争と結論は，田村を介して池田に報告されていた。これが池田の発想に大きな影響をあたえていったことは疑い入れない」（伊藤昌哉『池田勇人』1985 年　時事通信社　142 頁）という。

この研究会での下村の理論は，田村により宏池会が発行元となって 1958 年『経済成長実現のために』というタイトルで出版されることとなる。田村は，この本の序文で次のように書いている。「ひるがえって，こんにち日本経済のおかれた実情はどうであろうか。日本経済はこの必要な成長をとげる能力と条件とをそなえている。経済の健全な成長発展は可能なのである。労働力，技術，経営等人的諸条件も充実しているし，設備の近代化，合理化等物的諸条件も進んでおり，すでに中進国的状況を脱して先進国の塁に迫っている部門もあるのは周知の通りである。設備過剰との観方もあるが，この設備によって生産力が充実され，日本経済の競争力も強化されていることは否定できない。さらに昭和三十二年下期以来の景気の停滞が，有効需要の抑制に因る供給超過を主たる原因とすること疑いなしとすれば，この際有効需要増加の政策をとっても，その節度と方法を誤らぬ限り，インフレーションを惹おこしたり，輸入の激増を招いて，国際収支の赤字をきたす恐れはない筈である。すなわ

ち，いまの日本経済は健全な成長をとげる可能性があるのである」（2 頁）

これまでの日本の政策立案者たちは「ほとんどカンによって判断し行動しているのが実情」（3 頁）だったが，下村治は統計データーで，乗数分析を駆使して正確な「予測」を行ってきた，とするのである。田村は，下村の理論を「日本生まれの強じんな実際に役立つ理論」（5 頁）と称して，その普及を目指して，下村の論文集を編集したのである。時に 1958 年 12 月のことであった。

第一部は賃金と物価と為替レート，第二部は金融引締め政策―その正しい理解のために，第三部は経済成長と循環をめぐって―「在庫論争」，第四部は経済成長実現のために，第五部は乗数理論と金融理論から構成されており，下村がそれまで発表してきた主要論文，これまで論争してきた主要な論争と反論，再反論の関連論文が整理されて掲載されていた。序文の最後を，「そもそも編者のことばなどは，無用であり，おこがましいと思いつつ，ついペンをとると，こういう長談義になり，むしろ下村論文の価値を損するようなことになったかも知れないが，これはいつに，下村博士に対する編者の敬愛の念と，たまたま論文集を発行したいという編者の願いを快諾され，未発表の論策まで提供して下さったことに対する感激のさせたわざで，博士と読者の御諒恕を願う外ない」（5 頁）という言葉で締めくくっていた。田村の下村への入れ込み具合がわかる一文である。

すでに経済成長始発の条件は満ちている

下村が言わんとしたことは，1950 年代後半の日本経済は非常な勢いで上り調子にあるので，これを抑え付けるのではなく上手に手助けしてリードしていけば，高度成長は可能であるし，実現できるという主張である。つまり，「すでに経済成長始発の条件は満ちている」というわけである。彼は，1958 年に『経済成長実現のために』を上梓した後も，機会あるごとに己の主張を展開し続けた。

例えば，下村は，1959 年 2 月に発表した「日本経済の基調とその成長力」のなかで次のように述べている。

「設備投資の状況と国際収支の状況からみて，日本経済にどのような余力が残されているか……この結論をきわめて大数的に表現すれば，日本経済は，現状において，年々一兆円程度の GNP の増加を実現し得るような状況にあるということである。設備投資の年額が一兆五千億円前後であれば，供給能力は，年々一兆数千億円の GNP を実現するに足る程度に増加するはずであるし，年々二億五千万ドル程度の輸出増加があれば，年々一兆円の GNP の増加によって引き起こされる輸入を決済するに十分である。……日本経済の成長力の実情は，いつの間にか，このように大きな GNP の伸びを実現しうる段階に到達しているのである」（『金融財政事情』1959 年 2 月 16 日，2 月 23 日）

さらに下村は，池田内閣が発足した直後の 1960 年 11 月に以下のような論文を発表している。

「日本経済は，いまや歴史的な勃興期にある。国民の創造的能力の解放が，このような歴史的高揚の原動力である。昭和三十四年度の経済成長率が十七パーセントに達したという事実，およびこのような急激な経済膨張にもかかわらず，経済は極めて安定な状態で推移しているという事実は，日本経済のたくましさを実証するものである。民間企業家・経営者・技術者・労働者の合理化・近代化・生産向上への意欲と能力は，すでにこのような実績を示している。この力をさらに育成強化する努力を怠らないかぎり，日本経済は引き続き高速度の成長を続けるに違いない。われわれは今後十年間に国民総生産を二倍より二・五倍～三倍に近づける可能性があるものと判断する。このような高速度成長

は，経済活動の全領域にわたって革命的な変化をもたらすに違いない」(『金融財政事情』1960 年 11 月 7 日号)。

繰り返しになるが，下山が言わんとしたことは，日本経済は上昇機運にあるので，これをうまく利用すれば日本経済の高度成長は可能であるということである。こうした下山の理論は，田村を通じて池田の政策の中に具体化されていくこととなる。

田村の満洲時代の「見果てぬ夢」

前述したように，田村には，一つの夢があったと思われる。田村は，1945 年 8 月 15 日に満洲国で玉音放送を聴いたとき，この「重大放送を聞いて宮川総領事の公邸で共に手を取って男泣きに泣」くとともに，「自分の夢がガラガラと崩れた」と回想していた。

では，田村は，どんな夢を持っていたのか。彼は満洲国にどんな理想を託していたのか。それは，戦後の日本がどんな道を歩むべきかという，日本の進路に対する「解」を求める事でもある。その理想は，『進路』に掲載された彼の随想のなかに垣間見ることが出来る。田村は，「白昼夢」(『進路』第 1 巻第 5 号　1954 年 10 月）と題する随想の中で，三つの夢を語っている。一つ目の夢は，「病院のない社会」を実現する夢である。田村は語る。「皆人が健康になって，病院などは無用だというような世の中になったら，どんなに楽しく，幸福なことだろう」と。二つ目の夢は，「刑務所のない国が実現できないものかという夢」である。そして三つ目の夢は，「兵営のない国，兵隊の要らない世の中，世界が出来たら！という，実にはかない夢」である（11 頁)。田村は満洲国時代に大連で，「壮大な大連病院」を，奉天（現瀋陽）や吉林で「模範監獄」をみながら，こうした夢を描いていたという。田村は，続けて「白昼夢（健康国家の夢)」(『進路』第 1 巻第 6 号　1954 年 12 月)，「白昼夢（教育国家の夢)」(同上誌第 2 巻第 1 号　1955 年 1 月）を語っている。「健康国家の夢」では健康国家体制を整備するため健康官制度を整備し健康区，分区，支制度を作り国民皆健康制度をつくることを，また「教育国家の夢」のなかでは，教育義務法を制定し，大卒者はすべからく一定年限，初等教育教師となることを義務付け，以て教育国家を実現することを提唱している。一言でいえば，豊かで教養あふれた健康な国家の実現であろう。田村は，満洲国のなかに託したこの夢を戦後の日本社会の中に実現せんと池田内閣の中枢深く入り込んだのである。

池田の秘書の伊藤昌哉の満洲での「見果てぬ夢」

池田の秘書をつとめ，池田の高度成長政策をはじめ幾多の政策を支えた秘書の伊藤昌哉もまた満洲で生まれ満洲で青年期を過ごした（『池田勇人　その生と死』)。したがって，池田の前の総理の岸信介はむろんのこととして，池田の高度成長政策の背景には満州国時代の人脈とイメージが色濃く投影されていた。

よき政治家は優れた秘書によってよりよき政治家となり，よき秘書は優れた政治家の手で抜群の働きをなす，といわれる。とりわけ総理として名を成すには優れた秘書は不可欠という。池田を支えた伊藤昌哉もそうした一人だったといってよい。読売新聞の政治記者だった渡邊恒雄は伊藤を称して「非常に気の利く名秘書」(『渡邊恒雄回想録』）と述べていた。伊藤は 1917 年に満洲は大石橋で生まれている。父親の伊藤謙二郎は，満蒙開拓で活動したという。満洲で育った伊藤は，奉天中学，旧制

一高を経て1942年に東京帝国大学法学部を卒業している。戦後は政治記者として活動した後，1955年に池田勇人の秘書，池田が総理になった後は首席秘書官として活躍した。彼は，「民族の栄光に重大な関心をもつ人間として成長した」（『池田勇人　その生と死』）と抽象的にしか満洲での回想の記を残してはいないが，満蒙開拓の先駆者としての父をもち，敗戦を中国で経験し引き揚げた彼の経歴は，何らかの形で宏池会事務局長の田村敏雄と重なりあう思い出を持っていたに相違ない。事実，池田が総理になって以降は，田村は伊藤らと共同して池田政権の政策作りに協力したと田村の死後宏池会の事務局長に就任した木村貢は回想している（木村貢『総理の品格』59–60頁）。

満州派の結集

田村敏雄の周辺には，戦前満洲国で活動していた多くの人物が結集してきていた。むろん満洲国で活動していたといってもいくつかの人脈に分かれて必ずしも一本化されていたわけではない。しかし，戦後の高度成長に関わる動きを見ただけでも，星野直樹を筆頭に大蔵省から派遣された大蔵省系の人物は，大きく見れば田村敏雄と何らかの関連を有していた。それは，同じ満洲派といっても岸信介を頂点とする商工省系とは人脈的には異なる系譜を持っていたといってもよい。田村は戦後分散していたそうした人物を丹念に集め，再結集させて宏池会の資金蒐集組織を作り上げていったのである。したがって，田村が組織した政策研究会や田村が編集していた宏池会機関誌『進路』は，そうした人物たちの結集の場でもあった。そのなかには北海道の函館に生まれ，函館商業を卒業後満洲へ渡り，ハルビンで終戦を迎えたあと帰国しアートフレンドアソシエーションを設立，ドンコサック合唱団やボルショイサーカスを日本に招致して一躍有名になった神彰なども，満洲帰りの関係でその名を連ねていた。神が立ち上げたアートフレンドアソシエーションの理事には田村敏雄が就任していた。神は，外貨ワクを獲得するために田村の政治力を利用し，田村は，見返りに池田を総理にする総裁選のため数千万円の政治資金を求めたという（大島幹雄『虚業なれり』）。田村は，宏池会事務局長として，池田政治活動を支える資金調達の要の位置にもいたのである。

第9節　池田内閣と高度成長政策の展開

安保闘争の激流

岸政権を短命に追い込んでいったものに安保闘争がある。岸は，首相の座に就くと日米対等の条約を，と称して安保条約を改定する動きを進行させ始める。岸内閣は，その前提として反対運動の高揚を抑えるために，当時この運動の中核をなすと思われた教員の勤務評定の趣旨徹底を図り，さらに1958年には警察官職務執行法（警職法）改正案を国会に提出した。これに対して社会党・総評などが反対運動を展開し，警職法を審議未了とし，これを基礎に原水協などが新たに加わって1959年3月には日米安保条約改定阻止国民会議（安保阻止国民会議）が結成された。安保阻止国民会議は，4月の第一次から翌1960年7月の第23次まで統一行動を続けた。

1960年1月，岸首相らが訪米，日米相互協力及び安全保障条約（新安保）・施設区域米軍の地位に関する協定・事前協議に関する交換公文などが調印された。新安保は旧安保と比較して，米軍への基地提供から事前協議を通じた日米共同防衛へと一歩踏み込んだ点に違いがあった。新安保の国会審議が始まると，連日のように国会請願デモが繰り返された。5月19日に警察官を国会に投入しての衆

議院での強行採決に対して，議会制民主主義を擁護する運動が高揚した。6月10日のアイゼンハワー大統領新聞係秘書のハガチーが大統領訪日の事前打ち合わせのため来日した際，彼がデモ隊に取り囲まれてヘリコプターで脱出する，いわゆる「ハガチー事件」が発生し，アイゼンハワー訪日が中止され，続いて6月15日の安保改定阻止第二次実力行使には580万人がこれに参加する盛り上がりを見せた。そして迎えた6月19日，33万人が徹夜で国会を包囲する中，午前零時，新安保条約は自然成立した。翌7月15日，岸内閣は，安保改定と引き替えに総辞職した。

延べ数百万人の日本国民が，安保改定反対運動に参加したというのは，戦後政治の中で初めてのことだった。そして，反対運動の嵐のなかで内閣が倒壊したというのも初めての経験だった。こうした大規模な運動が広がった条件として，高度成長が過渡的段階で，成長以前の旧階層も成長後に増加し始めた新階層も，ともに現状に不満をもち，その不満が岸首相の強引な非民主主義的行為に対する反対の一点で結び合ったとも言うことができる。

その点に関して高度成長の理論的推進者だった下村治はこの時期を回想して次のように述べていた。

「岸内閣時代には，混乱がだんだんひどくなり，末期には政治的な混乱に陥っていたわけですから，それをおさめ，国民生活は十年で二倍になるんだという具合に，空気を明るい方向に切りかえればよかったのです。その当時の状況で，私ども自身は，主観的には，所得倍増計画で安保騒動はなくなるのだという見通しを持って，打ち出したといえます。安保騒動による混乱を消すためにやるのでなく，高度成長政策をとれば，混乱は消えるのだということですね」（下山治「高度成長政策と私」高原富保編『一億人の昭和史　7　高度成長の軌跡』1976年　250頁」）

その後の高度成長が一億総中間層化を生み出すと，運動自体は先鋭化して大衆から離れ，そして沈静していくこととなる。下村は言う。「事実，国民全体が希望と期待に胸をふくらますような状態に変わりましたね。安保騒動の段階のものの本質は，恐らく，わけの分からないもやもやした欲求不満であったと思いますが，これは雲散霧消したと思います。雲散霧消するような希望と期待を，政府が所得倍増計画によって保証したということですね」（同上）。

池田内閣の発足

池田は580万人が参加し東大生の樺美智子が死亡した安保阻止第二次実力行使の6月15日，池田派の会合の後で腹心の大平正芳が，次期総裁問題にふれ，「こんどはやり過ごした方がいい。あなたは保守の本命だから，こんな時期に出て傷がついてはいけない。いったん石井（光次郎）なり誰かになってもらって，すこし情勢が静まってから出たらどうですか」と忠言したという。それに対して池田は「君はそう言うが，おれの眼には，政権というものが見えるんだよ，おれの前には政権があるんだ」と答えたという。目に見えない何かを感じていたのであろう。満を持しての登場だといってもよかろう。大平が帰った後，秘書の伊藤昌哉が，「大臣，私も完全に政権が間近だと思います。話合いなどではなく，絶対に公選でいくべきです。区切りははっきりすべきでしょう。…総理になったらなにをなさいますか？」と尋ねると，池田は「それは経済政策しかないじゃないか。所得倍増でいくんだ」と答えたという（『池田勇人　その生と死』）。たしかに大蔵省の租税畑から戦後は大蔵大臣，通産大臣を歴任した池田にしてみれば，「経済はおれにまかせろ」，という気持ちが強かったに相違ない。

したがって池田は一切話しあいには応ぜず，公選を主張してそれを貫いた。かくして池田は総裁選の第一回投票では池田勇人 246 票，石井光次郎 194 票，藤山愛一郎 49 票で過半数を取れず，決選投票で池田勇人 302 票，石井光次郎 194 票で石井を破り 1960 年 7 月総裁に就任し，池田内閣をスタートさせた。

後景に退く黒子たち

池田内閣が発足した後でも研究会は継続し，『進路』は刊行され続けた。しかし，池田の高度成長論を作成した人物は誰か，といった話題がマスコミを騒がすなかで，研究会メンバーは，池田との接触を極力控えめにするように行動し始める。すでに池田が政権の座に就く前から池田への連絡役は田村が担当し，池田と面談するのも夜半に及んだという話を紹介したが，下村も池田との接触は極力控えめとなる。

下山は回想する。「（下村が）総理になられてからの池田さんと会ったのは一回か二回かな。信濃町のお宅に伺うのに，裏からこっそり行ったことがあります。表の方には新聞記者が張り込んでいますから……。私が行ったことがあまり人の目につかんほうがよかろうというような配慮がありましてね。とくに配慮しなければならないような用件ではなかったのですが，総理大臣のものの考え方を，後に人がいて操っているんだという言い方がはやるんですね。はやることはいいか悪いか一概にはいえないけれど，通常の場合は，総理大臣本人の権威をおとす形で使われるきらいがある。すでに池田内閣スタートの時から，政策を作ったのはだれだということになっていますから，それを最小限度にし，さらに大きくしない配慮はどうしても必要じゃないかという感じがしましたね」（下山治「高度成長政策と私」高原富保編『一億人の昭和史　7　高度成長の軌跡』1976 年　251 頁）。池田を前面に出すための演出が目に見えない奥底で静かに進行していたのである。

池田内閣と高度成長政策

どちらかと言えば，安保反対運動に対して自衛隊の出動まで考えた岸総理のこわもて路線と比較すると，岸を継いだ池田勇人のそれは低姿勢路線で始まった。かつて吉田内閣閣僚時代には，「貧乏人は麦を食え」「中小企業の一人や二人倒産してもやむを得ない」という過激な発言を発した人物と同一とは思えないほど下手に出ての出発だった。「寛容と忍耐」「低姿勢」という池田政権の代名詞はそれを物語る。そして，池田内閣は「月給二倍論」というわかりやすいキャッチフレーズを掲げて高度成長にまい進したのである。池田内閣発足直後の 1960 年 11 月には安保闘争と時期を同じくして起きた三井三池争議は 1 年間に及ぶ労使の全面対決の末，結局中労委のあっせんを受けて終結したが，これを前後して日本のエネルギーは石炭から石油へと転換していった。高度成長が軌道に乗るなかで，「三種の神器」といわれたテレビ，電気冷蔵庫，電気洗濯機が普及し，電機産業が急速な拡大を見せ，農村から都市への人口移動が激化し，企業が新卒者を奪い合う「青田買い」が広がった。都市では住宅難が深刻化し，公団住宅への入居希望者が激増し，1962 年には競争率は 50 倍を超えた。1962 年に日本の機械製品輸出が繊維製品のそれを凌駕した。同じ 1963 年 2 月には国際収支を理由に貿易制限ができない「ガット 11 条国」へ移行し，翌 1964 年 4 月には国際収支の悪化を理由に為替取引の制限ができない「IMF 八条国」へ移行した。同年 10 月には高度成長による先進国への仲間入

りのセレモニーともいうべき第一次東京オリンピックが開催された。オリンピックに伴い首都東京を中心にした高速道路網が整備され，羽田から都心に向けたモノレールが開通し，大会開催 10 日前に東海道新幹線が開通した。1966 年には日本の自動車生産は米，独に次いで世界第 3 位の位置を占め始めていた。1960 年代から 1970 年代にかけて，日本は年間 GDP 成長率 10％前後を記録して，世界から驚異の目で見られる経済大国へと成長したのである。

田村の死去

田村の健康が悪化したのは 1963 年に入ってからであった。田村の体調悪化の中で，彼が編集責任者となっている『進路』の発行が遅れだした。それまで該当月に該当号が出ていたのが，1963 年の第 10 巻第 4 号から同号は 4 月ではなく 5 月発行の 1 か月遅れとなり，次の第 5 号，第 6 号もそれぞれ 1 か月遅れの 6 月，7 月発行にずれ込んだ。そして第 7 号は同年 8 月 6 日に田村が死去したために「田村敏雄追悼号」としてさらに 1 か月遅れて 9 月に発行されたのである。明らかに編集体制が弱体化したことを示しており，この遅延は編集責任者の田村の体調悪化と無縁ではなかった。さらにそれを裏付けるように，連載されていた編集部の「所得倍増実現の可能性を探る」の連載番号が第 4 号，第 5 号では（33），（34）とすべきところを，ともに（33）と打っており，ベテラン編集者の田村には珍しい単純な編集ミスが目についた。

病院通いから入院が始まり編集へ割く時間は極端に減った。こうして半年に及ぶ入退院を繰り返すなかで，田村は膵臓病のため，闘病むなしく 1963 年 8 月東京青山の日赤病院で死去したのである。享年 67。

葬儀

田村が死去したのは 8 月 5 日で葬儀は 9 日に青山葬儀場でとり行われた。田村の死を悼んで多くの著名人が弔問に訪れた。筆頭は総理の池田勇人だった。葬儀に出席した池田は田村を偲んで弔文を読み上げた。「君とは大蔵省の採用が同期で山際君や植木君など多士済々な大正一四年組だった。君が任地の関係で満洲に去った時期を除けば特に戦後ソ連抑留から帰国してこの十数年間殆ど行を共にしてしたといっても過言ではない。……選挙のことは勿論，学会，財界，官界，政界と多岐に至る君の働きはどれほど私の助けとなっただろう」（『進路』第 10 巻第 7 号　1963 年 9 月　8 頁）。

これは，池田の本音だったというべきだろう。池田の中心的政策であった「所得倍増計画」は，田村無くしては，政策として結実することはなかっただろうから，田村の働きは値千金の重みをもっていた。しかし，こうして田村をおくった池田もその約 1 年後の 1964 年 9 月には喉頭がんで国立癌センターへ入院，翌 1965 年 8 月には東京大学付属病院に再入院し，13 日に帰らぬ人となっている。

1963 年 8 月 6 日の「読売新聞」は，田村の死亡記事を短く報じている。

「田村敏雄氏（大蔵財務協会理事長）心臓病のため 5 日午後 6 時 35 分東京青山の日赤中央病院で死去。67 歳。葬儀は 9 日午後 2 時から青山葬儀場で。自宅は東京都渋谷区代々木 1 の 5。京都府出身，大正 14 年東大卒，大蔵省にはいり大連税関長，満洲国濱江省次長。戦後は国際善隣クラブ理事，池田首相の後援会“宏池会”の代表」。

弔辞を読む古海忠之

田村の満洲国時代の上司だった古海忠之は，友人代表で弔辞を述べた。古海忠之は，星野直樹に率いられ田村と共に 1932 年 7 月満洲国に渡り，その後，1941 年に商工省次官として帰国した岸信介の後に満洲国総務庁次長に就任している。1945 年 8 月敗戦と共に侵攻してきたソ連軍に逮捕され，田村同様にシベリア抑留生活を送っている。古海は 1950 年に中国側に引き渡され撫順戦犯管理所に収容され 1956 年禁固 18 年の判決を受けるが，1963 年 2 月出所，3 月に日本に帰国していた。田村が死去したのが 1963 年 8 月だから，古海が中国から帰還してからわずか 5 か月後のことであった。田村は，病症を押して古海の帰国を羽田空港に出迎えに行ったし，それは古海にとっても戦後から数えて 18 年ぶりの再会であった。しかしその後語り合う十分な時間もないままに田村は古海の眼前から去っていった。古海の弔辞は，友人代表にふさわしく簡潔に彼の一生の歩みを紹介していた。以下，長くなるが，本稿をまとめるにふさわしいものなので紹介しておこう。

「昭和七年春満洲国が成立した直後満洲国から大蔵省に財政金融の担当者派遣の要請があった時星野直樹氏を頭に私達は決意も固く勇躍満洲国入りをした当時の君を私は忘れることが出来ません。その時から満洲国最後の時まで君は満洲開発のために祖国日本の為に情熱を傾け奮闘し続けたのでした」（同誌　11 頁）「最初君は財政部税務司国税科長として紊乱した税制を建直し厳正な徴税体制を作り上げ満洲国財政の基礎を固める大任を果たし，後に国税司長として税務行政にいささかの渋滞不安も感じさせませんでした。当時治安状況が極めて悪かった宝庫東辺道を開発する為め通化省を新設した際君は初代省次長に選ばれて挺身その難局に当り治安を恢復し満洲産業の開発に大きな貢献をしたのでした。満洲国の末期，北満の要衝浜江省の次長として手腕を振るい大蔵省出身の官吏であって地方行政機関に進出して業績を上げた君は私たちの誇りでもありました。教育方面に於ける君の識見，才能は万人の認める所でした。君は文教部教育司長として全満の教育行政を把ね教育普及向上に力を尽し又大同学院主席教授としを担当し幾多有能な満洲国高級官吏を育て上げました。君の協和会運動に関する大きな功績も見逃すことはできません。こうして君は行く所として可ならざるはない私たちの万能選手でした」（同誌，11–12 頁）。この「万能選手」としての才能を帰国後の田村は，宏池会の結成，池田内閣の実現と高度成長に捧げ，満洲国で果たせなかった「国造り」の理想を追求したのである。

弔辞で同じ思いを中国人の立場で述べたのが前述した孫亦濤であろう。彼は，吉林師道大学の学生である。吉林師道大学というのは，満洲の国民高等学校の教師の養成を行う大学として 1942 年に誕生した。1944 年ころで教員数は 70 から 80 人，職員を入れて 100 人前後，定員は各学年 150 人程度だったという（大森直樹・金美花・張東亜「中国人が語る『満洲国』教育の実態」『東京学芸大学紀要』第 1 部門　教育科学　第 45 集　55 頁）。その彼も戦後日本に帰国した田村を慕って葬儀のみならず，毎年命日には田村家を訪問して霊前に花を手向けたという。満州国が関東軍の傀儡国家であったことは言うまでもないが，そうした中にあって国家のあるべき姿とその理想郷を追い求め，果たせぬままに戦後政治に「見果てぬ夢」を託した田村の思いを感じとっていた中国人の声も古海忠之と重なる部分があったのかもしれない。

第 10 節　田村死後の宏池会

派閥の変遷と宏池会の位置

ここで改めて田村たちが組織した宏池会の位置とその後を自民党の歴史の中で整理しておこう。まず自民党の派閥系譜を見ておこう。戦後の派閥の源流は，大きく見れば旧自由党系の吉田派と旧民主党系の鳩山派に大別されよう。そして，自民党は 1955 年に自由党と民主党の合同で自民党として誕生したが，発足当初から通称「八個師団」と称されたように旧吉田派の自由党系，旧鳩山派の民主党系の派閥軍団から構成されていた。旧自由党系では池田勇人，佐藤栄作，緒方竹虎，石井光次郎，大野伴睦らがそれに属し，旧民主党では岸信介，河野一郎，石橋湛山らが並んでいた。そんななかで三木武夫だけはやや例外で，旧自由党，旧民主党というよりは旧改進党系に所属していたといえよう。発足当初の自民党では，一方で派閥の領袖が資金を集め，政治ポストを用意し，これを派閥の構成員に配り，他方で派閥構成員は領袖に忠誠を誓い，自派の勢力拡大に勤め，政界のルールを一つ一つ学習して実績を上げながら次官，大臣，総理への道を駆け上がる努力を重ねていったのである（渡辺恒雄『派閥』）。もっとも制度が整備される前の合同当初の派閥軍団は，さほど強い結束力があったわけではなく，一人で二派閥に所属するものもあり，その点は緩やかだった。

1955 年の派閥構成は，その後岸信介から池田勇人，佐藤栄作へとつながる総裁選のなかで，池田亡き後の宏池会は前尾繁三郎から大平正芳へとバトンタッチされ，その間に佐藤派が形成，拡大し，石井光次郎率いる石井派は消滅，大野伴睦率いる大野派は大野死後船田派と村上派に分裂していく。また，岸派は福田派に引き継がれ，河野派は河野一郎死後中曽根派に引き継がれ，石橋派は消滅する。この間に藤山愛一郎が一時的に派閥を形成するが，短命に終わっている（井芹浩文『派閥再編成』）。

派閥の組織整備

派閥の機能は，領袖と構成員の間で資金とポストと教育を媒体に主従的結束が形成されたと述べたが，派閥は初めからそうした形で整備されていたわけではない。例えば池田内閣時の宏池会は，どちらかといえば池田勇人個人をめぐる人間的つながりのなかかで形成されてきた組織だった。したがって，宮澤喜一の回想によれば（宮澤喜一『戦後政治への証言』），池田を総理にする政治家の派閥集団というよりは，池田を囲む大蔵省を中心に，財界人，政界人が加わる政策勉強会といった雰囲気は強かったという。強いて言えば，池田勇人個人の「応援団」的色彩が強かった，という。田村自身は，池田を総理にするための勉強会という意気込みで組織したのだろうが，政策勉強会という形をとったので，初めから議員中心の組織とは趣を異にしたかもしれない。

しかし，池田を次いで総理となった佐藤栄作が組織した周山会となると宏池会とは違って，政策研究会というよりは，佐藤を頂点としてきちっとした組織秩序が存在し，通称「五奉行」と称された保利茂，田中角栄，橋本登美三郎，愛知揆一，松野頼三が組織を把ね，運営していたという（御厨貴『知と情　宮沢喜一と竹下登の政治観』）。この周山会の手法は，その後田中の越山会に引き継がれ，さらに竹下登の手で創政会，経世会へと引き継がれて行くこととなる。ポスト佐藤の総理の座をめぐって田中派と激しい政争を演じた福田派もほぼ同じ手法を取り入れて派閥運営を展開した。

角福戦争下の宏池会

1972年7月に佐藤栄作が退陣した時，佐藤が自分の後釜として想定していたのは福田赳夫だったという。池田，佐藤と二代続いた高級官僚出身の総理のポストを同じ経歴を持つ福田に委ねようと考えていたとしても不思議はない。しかし，学歴こそ高等小学校卒ながら土木事業で財を成し，「とげの多い門松をたくさんくぐって，いささか仕事のコツを知っている」（早坂茂三『早坂茂三の「田中角栄」回想録』）と自負する田中角栄は実社会で鍛えられた経験を活用し，抜群の生き抜くパワーで政界出世街道を驀進する。1947年4月初当選，吉田の下で研鑽をつみ1957年には39歳で岸内閣で郵政大臣，続く池田内閣では大蔵大臣，そして佐藤内閣では大蔵大臣，通産大臣，党幹事長を歴任した。この間東京帝国大学を卒業し大蔵省でキャリア官僚として実績を積み政界に転じた福田赳夫と激しいライバル争いを演じた。田中は，後発から一気に追い上げて，佐藤を「待ったなし」（伊藤昌哉『実録自民党戦国史』）の状況に追い込んでいった。そして佐藤政権末期の1972年6月に『日本列島改造論』を発表し，それを引っ提げて7月の総裁選の決選投票で福田赳夫を破って自民党の総裁に選出され，翌日総理大臣に就任した。

この間宏池会はといえば，1965年8月に池田亡き後前尾繁三郎が宏池会の会長に就任した。そして佐藤内閣時代に厚生大臣に鈴木善幸，通産大臣に大平正芳，宮澤喜一を，そして前尾自身も自民党総務会長，北海道開発庁長官を務めている。しかし，この時期の宏池会の課題はなんであったのか。換言すれば，池田がやらねばならなかった課題，別の言い方をすれば池田が遺した課題は何だったのか。いまは亡き池田，田村に代わって，高度成長の立案者の一人だった下村治は次のように言う。

「池田さんは高度成長の入口だけを担当された。福祉の充実とか環境の整備とかをやろうと思えば思い切ってやれる段階に入る前，つまり，それをやるだけの基礎的な経済力を作る段階」を担当した，したがって，これを継承した佐藤内閣は「経済成長によって実現された力と，その過程に出てきたいろいろな問題をうまく捉え，その力で問題を吸収解消するような積極的措置をとること」であったはずだという。そして，佐藤内閣はそうした課題を未解決にしたまま政権を次世代に送った結果が，田中角栄の「日本列島改造論」へとつながったのだ。しかし「列島改造計画はあまりにタイミングが遅すぎた。佐藤さんがやるべきであり，佐藤内閣の時代に田中さんが一緒になってやればよかったのです（下山治「高度成長政策と私」高原富保編『一億人の昭和史　7　高度成長の軌跡』1976年　251–252頁）。

これは下山治の見解だが，彼の言のなかに宏池会の前尾繁三郎の名前は一言も出てこない。「学者肌の前尾繁三郎会長」（木村貢『総理の品格』93頁）は，池田の遺した課題を実現する機会もないままに1966年12月，1968年11月の二度の総裁選に佐藤に惨敗した後1971年4月には宏池会の会長ポストを大平正芳に譲っていく。

田中時代の宏池会

1972年7月政権の座に就いた田中角栄は就任2カ月後の9月に宏池会会長で外相の大平正芳と官房長官の二階堂進を連れて北京を訪問し電光石火の早業で日中国交回復を成し遂げた。「私は田中氏が組閣後わずか二カ月くらいで北京に出向くとは夢にも考えていなかった。もう少し諸般の環境調整をしてからだろう，と見ておったのだが，田中氏はやってしまった」とライバルだった福田赳夫は回

想し，「性急に過ぎたという面はあるが，大局的にみると歴史の流れが世界的にそういう方向に動きだした，田中氏はそれを巧みに捕らえた，ともいえるだろう」（福田赳夫『回顧九十年』）と述べていた。

外交面では大きな成果を上げたが，経済面では田中がぶち上げた「日本列島改造論」は，1971年8月のニクソンショックと円高の開始，その対応のなかで破たんし，それへの対応で過労死した蔵相の愛知揆一の後をライバルの福田赳夫に委ねた。福田は，「日本列島改造論」を「撤回する」ことを条件に大蔵大臣として入閣，安定成長路線へとかじを切った（福田赳夫『回顧九十年』）。経済の混乱に1973年10月のオイルショックが追い打ちをかけ，狂乱物価旋風が吹く荒れるなかで1974年12月田中はスキャンダル事件で辞任する。汚職まみれの田中政治を一新するため自民党副総裁の椎名悦三郎が下した判定は，田中の後継者に「クリーン」なイメージの三木武夫を総裁に据えることだった。そんななかで，1976年2月にロッキード事件が明るみに出た。アメリカの航空機メーカーのロッキード社が自社の航空機を売り込むための裏金を関係者に渡し，その一部が日本政府高官に渡ったという汚職事件である。7月いきなりトップの田中角栄元総理が外国為替法（外為法）違反で東京地検に逮捕された。田中逮捕のなかで，自民党内には，田中，福田，大平派などからなる「与党体制確立協議会」（挙党協）が結成され，その処理方法で対立した三木武夫総理を退陣させる「三木おろし」の動きが積極化した。経験豊富な政治巧者の三木は，田中・福田・大平を相手に「三木おろし」の辞任要求を巧みにかわして独特の「粘り」（戸川猪佐武『田中角栄と政権抗争』）で内閣改造を実施して12月に総選挙に持ち込んだ。結果は自民党の過半数割れの大敗で，三木内閣は降板した。この間，大平を会長とする宏池会は，「三木おろし」・田中擁護の立場にたち，田中派と行動を共にしていた。1976年12月から三木の後を受けて総理に就任した福田赳夫はさしたる失点もないにもかかわらず1978年12月の総裁選で，「予備選で一位をとれなかったものは本選を辞退すべき」と語って自信たっぷりに選挙に臨んだ福田自身がまさかの第2位となり，本選を辞退した結果田中派の支援を受けて大平が総理の座に就いた。宏池会は池田に次いで二人目の総理を送り出したのである。大平は，田中派の支援を受けたものの福田派などの反主流派との党内調整に困難を来し1980年には消費税導入などの不人気とKDD汚職が絡んで総選挙に突入，大平は過労のなかで急死するが，選挙は「弔い合戦」なかで勝利した。大平亡き後，その後継総裁には大平を次いで宏池会会長に就任した鈴木善幸が就任する。鈴木善幸は自民党総務会長を長く務めたことに象徴されるように政界では調整役に徹した活動をしてきた。総理に任命されたとき「和の政治」を目指すと表明したことは，それを物語る。しかし就任3年目にして官僚作成の原稿の「棒読み善幸さん」（宇治敏彦『鈴木政権・八六三日』）と呼ばれ始めていた。しかも「善幸とは何者」（木村貢『総理の品格』172頁）とアメリカメディアに言わせるほど国際的知名度は低く，自ら「外交は不得手」と自称するように，「日米同盟に軍事的意味合いはない」と失言して伊東正義外相の辞任を生むなど失策が続き1982年11月に中曽根康弘が総理の座に就いた。

脱田中時代の宏池会

中曽根康弘が総理に着いた1982年11月から1987年10月に次期総理後継者に竹下登が指名されるまでの5年間は中曽根時代ともいわれるが，この間に最大派閥だった田中派のなかに大激震が走

る。それは竹下登が田中派を割って自派を立ち上げたことである。それは1985年2月の創政会と称する勉強会から始まったが，分派行動と知った田中は，猛烈な切り崩しをかけるが，その最中に田中は脳こうそくで倒れる。この創政会が経世会と名を変えて文字通りの竹下派となるのは，中曽根内閣が発足した後の1987年7月のことだった。脳こうそくで田中の政界での影響力が低下するなか，1972年7月の田中内閣の発足から中曽根内閣中途の1985年2月の創政会の立ち上げまでの約13年間の田中角栄の自民党支配の歴史は終焉を迎える。その後中曽根内閣は「脱田中」を鮮明にし，1987年10月から竹下登の時代が始まる。竹下の政界操縦法は田中のそれと酷似し，院政を敷くことで経世会が政権を操る方式で，宇野宗佑（1989年6月–8月），海部俊樹（1989年8月–1991年11月）と短命内閣が続き1991年11月に宏池会の会長だった宮澤喜一が総理に就任する。

宏池会は，といえば1980年から1986年までの6年間は鈴木善幸が会長を務めていた。彼は，1982年に総理の座を降りているからそのあとも宏池会会長を務めていたことになる。宏池会の会長が鈴木善幸から宮沢喜一に代わったのは，総理を辞任した4年後の1986年9月のことだった。そして宮澤喜一が海部俊樹を次いで総理に就任するのは1991年11月だから鈴木退陣から9年の時間が流れていたことになる。この間宏池会は，総理を送り出してはいない。「この間の宏池会は，よく言えば『充電期間』，悪く言えば党内でちょっと干されていた感があった」（木村貢『総理の品格』191頁）。

宏池会会長の宮澤喜一の総理就任

宏池会会長の宮澤喜一が総理に就任した時宮沢はすでに72歳で，総理への挑戦は最後のチャンスであった。大蔵官僚から1953年に政界入りを果たし大平正義と共に池田勇人の側近として頭角を現し，未来の総理としてその将来が嘱望された。しかし，彼を総理に押し上げた力は竹下派であった。経世会会長代行の小沢一郎が派閥事務所に宮沢らを呼びつけて面談したことは，そのことを物語っていた。実際に政権運営は金丸信や小沢一郎といった竹下派が握り，宮澤は蚊帳の外という状況だった（朝日新聞政治部『竹下派支配』）。つまりは宏池会が押し上げたというよりは，竹下派の経世会に祭り上げられた感が強かった。1992年8月に金丸信が佐川急便から5億円を受け取ったという収賄事件が発生，これを機に自民党は分裂，内閣不信任に対して宮沢内閣は解散総選挙に打って出たが，勝利を得られず退陣，自民中軸の連立か，非自民かの選択のなかで1993年8月衆参両院は次期総裁に「日本新党」代表の細川護熙を選出，自民党は1955年以来初めて下野することとなった。宏池会は，1950年代末に池田勇人をもって自民党の有力派閥として出発し，1990年代初めに宮澤喜一をもって自民党の下野を演出する役割を担うこととなったのである。

加藤紘一と「加藤の乱」

宮澤喜一は総理辞任後も宏池会会長のポストに在った。そのポストを加藤紘一に譲るのは1998年12月のことである。この間，内閣は短期間で交代している。細川護熙（1993年8月–1994年4月），羽田孜（1994年4月–1994年6月），村山富市（1994年6月–1996年1月），橋本龍太郎（1996年1月–1998年7月），小渕恵三（1998年7月–2000年4月）と2年足らずでの交代である。羽田内閣に至っては，在任わずか64日，敗戦直後の東久邇内閣の54日に次ぐ戦後2番目の短さだった。急

死した小淵恵三の後を継いだのは，森喜朗だった。選出のされ方が不明瞭だった点は否めない。小淵総理の急病を受けて密室での後継総裁の選出協議のなかで選ばれたのが森総理だった。2000 年 4 月に総理に就任した森喜郎は，「日本は天皇中心の神の国」と発言して物議をかもしたが，2000 年 6 月の衆議院選では自民党・公明党・保守党の与党三党は後退するも安定多数を確保して乗り切り，2000 年 11 月には不信任案が提出されるが否決された。このとき加藤紘一自民党元幹事長が不信任案賛成に動き，山崎拓のグループも同調する直前で野中広務幹事長らの切り崩しの前に加藤の基盤である宏池会が割れたため，森不信任の行動を断念する「混乱」が発生した。世にいう「加藤の乱」であるが，この背景には総理選出などをめぐる自民党の長老支配への若手の反発が底流にあった。しかし，この「加藤の乱」により，自民党のリベラル派を代表してきた宏池会は，加藤と行動を共にした加藤派とそれに反対した堀内派（堀内光雄）に分裂した。加藤派には加藤以外に小里貞利，谷垣禎一らが，堀内派には堀内以外に宮澤喜一，池田行彦，古賀誠らが連なった。いずれも自民党リベラル派を代表する面々である。これで全体として自民党リベラル派の力は大きく削がれる結果となった。

宏池会の再統一

分裂していた宏池会が再統一されるのは 2008 年 5 月のことであった。分裂から 7 年半が経過していた。この間森内閣は 1 年の短命で，2001 年 4 月に小泉純一郎に内閣を譲っていった。小泉内閣は「聖域なき構造改革」を掲げて郵政民営化，道路公団改革を推し進め，外交では北朝鮮の拉致問題の解決に動くなど活発な活動で 5 年 5 か月の任期を終えて 2006 年 9 月に安倍晋三に政権を譲った。その後は，安倍晋三，福田康夫，麻生太郎が 2009 年 9 月までそれぞれが判で押したように 1 年間の期限で総理を務めて退陣した。就任期間だけでなく，安倍晋三は祖父に岸信介を，福田康夫は父に福田赳夫を，麻生太郎は祖父に吉田茂をもつ総理経験家系に生まれた「華やかな血脈」を持つ点でも共通していた。分裂していた宏池会の加藤派を引き継ぐ谷垣派と堀内派を継ぐ古賀派も安倍，福田，麻生と続く総裁選で協力することで関係を修復し 2008 年 5 月に合同へと踏み切ったのである。こうして 2009 年 9 月の自民党総裁選では麻生太郎の後を谷垣禎一が継ぐ形で総裁選に臨もうとしたが，古賀派が同意せず宏池会は一本にまとまらなかった。谷垣派が脱会するなかで，責任をとって古賀が会長を辞任し，そのポストを岸田文雄に譲り，古賀は名誉会長に就任した。現在の岸田派のメンバーは，衆議院 29 名，参議院 12 名で合計 41 名。岸田は第二次安倍内閣の外務大臣である。

田村を次いで長年宏池会事務局長のポストにいた木村貢は，池田・田村以来の宏池会の伝統を踏まえて宏池会の将来を次のようにその展望を述べる。

「わが宏池会は…小泉政治とも違うし，旧田中派ともまた違う政策を打ち出していくべきだろう。幸い，人材は豊富である。」もしこれに旧宏池会が再結集すれば 70 人以上の大所帯になろう。「ラテン語には『festina lente』という諺がある。『悠々として急げ』といったほどの意味であるが，この精神でいけばいい。そして『知恵』と『度胸』で，これまでの宏池会に貼られてきた『公家集団』というレッテルを吹き飛ばすのだ。そうした理念のもとに，もし大宏池会構想が実現したら，『宏池会五十年』の何ものにも替えがたい一大記念碑となるだろう」（木村貢『総理の品格』247–248 頁）

田村敏雄に次ぎ二代目の宏池会事務局長を 36 年間務め池田，前尾，大平，鈴木，宮沢，加藤の 7 人の会長と苦楽を共にした人物だけに宏池会に送る値千金の言葉であろう。

結語

田村武雄ほど激動の時代を力強く生きた人物もおるまい。確かに彼は，京都の山村の農民として一生を終える運命を持ちながらこの世に出てきた如く見えた。それが，義務教育を終えたあとは，農業を続けながら専門学校入学検定試験をパスして京都府師範学校に入学，さらにそこから高等師範を経て東京帝国大学社会学科に進んでいる。そして在学中に高文をパスしてエリートの道に分け入り，卒業後は大蔵省に入省，若くして山形および仙台の税務署長を務めあげている。ここで満洲事変が勃発，満洲国が出現すると，関東軍の要請に応じて渡満し，満洲国官吏として「建国」から産業開発，戦時高度成長政策の第一線での推進者となった。彼は，通化省次長として鉄鉱資源開発の最前線に立ち，続いて民政部教育司長として産業戦士の教育の第一線に立った。つまりは1930年代から1940年代前半の満洲産業開発の第一線を担ったのである。戦後は，敗戦とシベリア抑留，ソ連のスパイへの強要，そして帰国といった厳しい試練を乗り越えて，彼の満洲時代の経験は，1950年代後半から1960年代前半にかけての日本の高度成長の出発の中に生かされていく。田村は，池田勇人のブレーンとして宏池会を組織し，勉強会を通じて下村治の理論を解りやすい政策へと翻訳し，それを池田の政治活動へとつなげていった。「所得倍増」「月給倍増」政策とは，庶民の目線で，満洲国時代の教授としての経験を持つ田村ならではの離れ業だった。しかし，長年の肉体の酷使，無理の連続は田村から健康を奪い去っていった。田村は高度成長のなかで生まれた日本の生活の変化をみる間もなく1963年8月静かに消えていった。

参考文献

100周年記念誌刊行委員会『社会学研究室の100年』東京大学文学部社会学研究室 2004年
1920年代史研究会編『1920年代の日本資本主義』東京大学出版会　1983年
朝日新聞政治部『竹下派支配』朝日新聞社　1992年
飯塚浩二『満蒙紀行』筑摩書房　1972年
石射猪太郎『外交官の一生』読売新聞社　1950年
井芹浩文『派閥再編成　自民党政治の表と裏』中央公論社　1988年
板垣興一『アジアに道を求めて　藤崎信幸追想』論創社　1985年
伊藤昌哉『池田勇人　その生と死』至誠堂　1966年
伊藤昌哉『実録　自民党戦国史』朝日ソノラマ　1982年
伊藤昌哉『池田勇人』時事通信社　1985年
宇治敏彦『鈴木政権・八六三日』行政問題研究所出版局　1983年
梅里助就『ソ連抑留回想』梅里敦（学苑社）　1986年
NHK取材版・臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』　角川書店　1991年
大蔵省百年史編纂室編『大蔵省人名録　明治・大正・昭和』大蔵財務協会　1973年
大河内・清水幾太郎『わが学生の頃』三芽書房　1957年
大島幹雄『虚業成れり』岩波書店　2004年
岡本真希子『植民地官僚の政治史』三元社　2008年
香川鉄蔵『満洲で働く日本人』（ダイヤモンド社）1941年
香川鉄蔵先生追悼集刊行会編『香川鉄蔵』1971年
角田順編『石原莞爾資料　国防論策篇』原書房　1967年
上久保敏『下村治「日本経済学」の実践者』日本経済評論社　2008年
北村敬直編『夢の七〇余年　西原亀像自伝』平凡社　1965年
木村貢『総理の品格』徳間書店　2006年
京都女子大学『京都教育大学百二十年史』　1983年
沢木耕太朗『危機の宰相』学燈社　2006年
塩口喜乙『聞書　池田勇人』朝日新聞社　1975年

清水幾太郎『私の読書と人生』要書房　1951 年
新京法政大学同窓会編『南嶺慕情』1993 年
新京法政大学同窓会編『南嶺慕情続編』1997 年
『進路』（1954 年 5 月～1963 年 9 月）
鈴木省五郎『ダワイ・ヤポンスキー』創造　1976 年
杉山公子『哈爾浜物語』地久館　1985 年
瀬島龍三『幾山河　瀬島龍三回想録』サンケイ新聞ニュースサービス　1995 年
ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会編『捕虜体験記』5　中央アジア　ソ連における日本人捕虜の生活体験を記録する会　1986 年
大同学院史編纂委員会『大いなる哉　満洲』大同学院同窓会　1966 年
大同学院史編纂委員会『碧空緑野三千里』大同学院同窓会　1972 年
田村敏雄『満洲帝国経済全集』租税編前篇　東光書苑　1938 年
戸川猪佐武『田中角栄と政権抗争』講談社　1982 年
富田武『シベリア抑留者たちの戦後　冷戦下の世論と運動　1945－56 年』人文書院　2013 年
内政史研究会『松隈秀雄氏談話速記録』内政史研究会資料 93，94，95 集　1971 年 2，3 月
中山隆志『ソ連軍侵攻と日本軍』国書刊行会　1990 年
服部兵次郎『戦跡を顧みて』兵書出版社　1934 年
浜口裕子『日本統治と東アジア社会』勁草書房　1996 年
早坂茂三『早坂茂三の「田中角栄」回想録』小学館　1987 年
林久治郎『満洲事変と奉天総領事』原書房　1978 年
福田赳夫『回顧九十年』岩波書店　1995 年
防衛庁防衛研修所戦史室編『関東軍』2　朝雲新聞社　1972 年
星野直樹『見果てぬ夢』ダイヤモンド社　1963 年
松隈秀雄『私の回想録』平和厚生会出版部　1982 年
松本清張『日本の黒い霧』文芸春秋新社　1962 年
満洲回顧集刊行会『あゝ満洲』満洲回顧集刊行会　1965 年
満洲国史編纂刊行会『満洲国史』総論　満蒙同朋援護会　1970 年
満洲国史編纂刊行会『満洲国史』各論　満蒙同朋援護会　1971 年
満洲国通信社『満洲国現勢』康徳五年版　1938 年
満洲重工業開発株式会社『満州重工業資源の開発と満業の使命』1939 年
満蒙資料協会『満洲紳士録』昭和 12 年度版　1938 年
満蒙資料協会『第三版　満洲紳士録』1940 年度版　1941 年
満蒙資料協会『第四版　満洲紳士録』1943 年度版　1944 年
満蒙同胞援護会『満蒙終戦史』1962 年
御厨貴『知と情　宮沢喜一と竹下登の政治観』朝日新聞出版　2011 年
宮澤喜一『戦後政治の証言』読売新聞社　1991 年
山本四郎編『西原亀三日記』京都女子大学　1983 年
夜久野町史編纂室『夜久野町史』第四巻　福知山市　2013 年
渡辺恒雄『派閥　保守党の解剖』弘文社　1958 年

謝辞

なお，本稿作成に当たり，大橋正嗣（豊岡市但東町東里），大橋正規（西宮市弓場町），田村秋夫（京都府福知山市夜久野）山路峯男（東京都世田谷区）の諸氏からは田村家と生い立ちの歴史，山路吉兵衛との関係に関し，富田武氏（成蹊大学名誉教授）からはアメリカ NARA の田村敏雄関連文書（シベリア抑留，帰国後の活動）の提供を受けた。また，谷公一（衆議院議員），高野力（茗渓会），山下文生（豊岡市但東振興局地域振興課），藤克浩（兵庫県東京事務所），上村寛二（東京但馬会事務局）の諸氏からは田村敏雄の学生時代，郷里関連の資料に関しお世話になった。これらの方々以外にここにお名前は逐一あげられないが，多くの方々の支援を得た。ここに厚く感謝いたしたい。